

---

# 旅人と高校生の日常記録日誌！？

正体不明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旅人と高校生の日常記録日誌！？

### 【Nコード】

N6005I

### 【作者名】

正体不明

### 【あらすじ】

とある…性格はまあ普通だけど超女顔の高校生、鈴音と、本来交わることの無い3つの世界を旅する「旅人」と名乗る男が出会う。そんな鈴音の高校生活は波乱万丈！ 天然な幼なじみとポケッッコの応酬。

さらにこの世のほとんどを掌握する高校生の生意気理事長や、異世界から来た同級生に、関西弁漫才女まで登場！？

そんな彼らが異世界からの敵と戦ったり、喧嘩したり、普通に

おかしな日常を過ごしたりする！

そんな王道気味なファンタジーでコメディーで恋愛はあるのかないのか良く分からない何でもありな日常を記録した物語！

……かな？

## プロローグ

…懐かしい。懐かしいなあ…この景色、匂い、『人間界』に戻ってきたのは久しぶりだ…

それにしても…景色が変だ。何だここは？

……おかしいな…このような場所を見たことがない…

まあいい、それにしても腹が減った…ん？何やら向こうから旨そうな匂いが…

…マクデナルド？ここから旨そうな匂いがする…食堂か？とりあえず寄ってみるか…

\*\*\*

「ふう…今日から俺も高校生か…実感わかねえな」

「まあまあ、そんなこと言っていないで」

ここは山上島<sup>やまのうえとう</sup>、人口は数万人の巨大な島である。

俺の名前は槍館鈴音<sup>そうたたらすずね</sup>。

…女みたいな名前だが決して女じゃねえぞ？男だ。

はあ…しかも何故名前だけじゃなくて、顔も超ド級の女顔なのやら

…しかも背も小さいし…

次に俺に話しかけてきたのが…御神楽<sup>みかぐら</sup> 凜歌<sup>りんか</sup>、何故か中学のときか

らずっと同じクラスの俺の数少ない友達の一人だ。髪は何故か日本人には珍しい金髪のロングだ。

そして今、俺と凜歌は入学式が終わり、学校からの帰路についている。

「…帰りマクデよってかね？」

俺は唐突に言う、理由は簡単。急にハンバーガーが食べたくなってきたからだあ！

しかしマクデは決して誤字ではないぞ？マ○ドではないんだ。マクデナルドだマクデナルド！決して某日本最大規模ハンバーガーショップではないからな！ドナ○ドがいるわけでもないからな！

「うーん、いいよ。暇だし。

…って何考えてるの？」

「いや、ちょっとドナ○ドの方程式をな」

「ドナ○ドの方程式！？なにそれ！」

「特に意味はナーイ」

「ちょっと!?!？」

…とまあそんなこんな話してるうちにマクデナルドにたどり着いたわけだ。

「…………ええと、私は『ロイヤルスペシャルチーズハンバーガー』を」

………凜歌はロイヤルスペシャルチーズハンバーガーか…：カロリー高いけどいいの？

…って言っても、こいつは何故かいくら食べても全く太らない体質だからなあ…：きつとカロリーが脂肪となつて、胸にだけ行っているの  
だろう

世の中の女どもは間違いなく羨ましがらるだろうな…

「で鈴音は一体何頼むの？」

「うーん、じゃあ…この『不死鳥ドラゴンかめはめバーガー』ってのを」

ぶつちやけどんな味が想像出来ない…だがあえて挑戦だ！

「お待たせしましたー」

おっと届いた届いた。さあて…どんなのかと不死鳥ドラゴンかめはめバーガーを見て見ると…

何かハンバーグやらと一緒に鳥の羽らしきものが挟まれてるんだけど、しかもその色は黒…不死鳥というから普通赤だろ！？てかそれ以前に普通鳥の羽なんて食べねえぜ！？

しかもドラゴンというのはただ単にパンズにドラゴンの絵が書かれてるだけ！？

詐欺だろこれ！？ぜってー詐欺だあ！！！！

「…ドンマイ」

うう、俺を慰めてくれるのか…凜歌…

しかし、一度出されたものを食わない訳にはいかない

パクっ

とりあえず一口食べてみる

「……へ？意外とイケるかも」

「ええ！？本当？」

「ああ、一口食べてみるよ」

パクッ

「あ…美味しい…」

「だろ？」

ちなみに間接キスになったということは内緒だ…全く…こいつは…俺は男だぞ？

「ええと、ほら鈴音って女みたいだから。どーにも異性って感じがしないのよ」

「ちょっと待て！何故お前は俺の思考が読める？」

サイコメトラーか？お前はサイコメトラーなのか！？

「口に出ってたよ」

「…へ？」

…そうだったのかよ。これからは気をつけなくちゃあな

「さて、食い終わったし、お代は俺が払っとくよ」

「…うん。ありがとう」

…って…ええと……料金は…不死鳥ドラゴンかめはめバーガー、—

個にロイヤルスペシャルチーズハンバーガー……20個!?おいおい……いくら食べたんだよ……凜歌……  
うう、金が……懐がどんどん寂しくなっていく……しかもとっておいた2000円札まで消えていく……さらば、2000円札!  
そうして俺たちはハンバーガーショップから出ようとすると

「ちょっとすみませんが。そこにいる2人のお嬢さん」

そんな声が後ろから聞こえてきた。

それにしても……2人のお嬢さん?少なくとも俺たちではないな……と思いつつ後ろを向いたら何やら顔は見えないように深く漆黒の帽子を被った、何やらこの世界にはないような服装をした異様な男が確実にこちらを向いて立っていた。

「すまないが、お金を貸してくれないか？」

そしてその男はそう言い放った。

偶然か必然か  
絶望か希望か  
滅亡か創造か  
現実か幻想か  
最初か終末か  
奇跡か運命か  
天上か奈落か  
そう、この物語はここから始まる。



1 ページ目 殺人狂とハンバーガー!? (前書き)

とりあえずもう一話!

## 1 ページ目 殺人狂とハンバーガー!?

どうも、プロローグから引き続き、俺こと鈴音視点です。  
…とりあえず一言

「俺はお嬢さんじゃねえ！男だ！」

「……は？」

「疑問で返すな！」

「まあまあ鈴音、落ち着いて」

隣にいた凜歌が静止した

「…で、とりあえずこの人が食べた分はいくらなの？」

「ええと…… 575円になります」

「それだったら私が払うよ」

……払うのかよ

「はい、ありがとうございます。またのお越しをお待ちしてます」

そして店員のニコやかスマイル！さっきとは大違い。

…人って変わるもんだよなあ…

\*\*\*

今はハンバーガーショップの前

「さっきはどうもありがとう」

さっき店員と揉めてた、おかしい男が頭を下げる

「いえいえ、別にどうってことないから」

「…それにしても…お前は一体どこの誰？」

俺が男に向かって言い放つ

「…気にするな。俺は名もない旅人。ただそれだけだ」

「はあ？お前頭おかしいのか？」

それになぜ、旅人がハンバーガーショップ『マクデナルド』で食事  
なんかして、見知らぬ他人にお金貸してくれと懇願したのか…こい  
つは…謎だ

「まあ…そうとっつてくれても構わない」

「まあまあ、気にしない気にしない。きっと何か事情があるんだし  
さ」

そこで凜歌が制止した

\*\*\*

「へえー…いつの間にか人間界に戻っていたのね…旅人」

ここはとある高いビル。そこに、女が壁と垂直にして立っていた。まるで彼女の周りだけが別世界のように…ビルの壁に重力が働いているかのように感じる。

明らかに普通では無い

「後、近くにいる二人は…仲間？」

女は一人、眩きよりも更に小さな声で言葉を綴る

「だったら殺していいわね。ふふ、桜にばかり、一瞬で散っていく  
美しさは最高よね」

結論が出たのか、女は口を閉ざし…ビルの壁を蹴り、落ちるかの  
ように跳んだ

\*\*\*

「さて、それでは俺はこの辺で…本当にすみませんでした」

「うん。別に気にすることないよ」

「…それにしても…気になるなあ…あいつ」

「……………気にしたってどうしようにもないよ。もう行くつよ？」

俺と凜歌はあの男と別れ、家に向かって歩き始める

……次の瞬間

背後にあまりにも唐突に、巨大な気配を感じた

「ちょっと待ちなさい」

「!?!」

俺は振り向く、すると道の真ん中……さっきまでは誰もいなかった場所に何やらオレンジ色の帽子を被った。ゴスロリ的な服装の女がいた。

ここまではまだ普通。だが、この女は明らかに異常だった。

まず背中には巨大な3mはあるであろう鎌を背負い、さらに地面に足は着いていない……浮いているのだ。

今まで俺は一度も感じた事が無い……正体不明の『気』を放っている。殺気でも無く。闘気でも無い。何か

辺りには誰もいない。ハンバーガーショップ店内にも奥に引っ込んだのか店員すら見つからない

『逃げる』

そう俺の第六感が伝えてくる。  
くそっ！何なんだよいきなり！

「お、おい、凜歌！逃げるぞ！」

「う、うん！」

「……醜いわよ」

俺たちが逃げようとするのと、いつの間にか静かに……周りこまれていた。



「……………へえ…そうだったの。でも関係無いわ  
どうせ死ぬ命。今ここで美しく散らしてあげるのよ…」

「……………殺人狂か」

ガキン

小刀と鎌がぶつかり合う。しかし、その動きはあまりにも早い。とても俺の目じゃ捉えきれない  
武術とかそんなのでは無い。基本のスペックが違い過ぎる。人間だとは言い難い。

ガシヤアアアン

あ、ハンバーガーショップ、マクデナルドのガラスドアをぶち破った。

今は昼過ぎ。ちょうど時間帯が幸いし、店の中には今さっき奥から出てきた店員しかいなかった

「ってああ！？店のハンバーガーがあ！損害額は…」

そして偶然店にいた店員Hはこのバトルより損害額の心配をする…  
…おかしいだろ？オイ  
ってこう冷静でツツコめる俺も俺だけど、多分脳内処理が追い付かないのだろう。

そう馬鹿な事を考えてる間にも旅人と謎の女のバトルは進行する

「くっ、『ヘルウィンド』」

どうやら鎌を持った女の方が何か謎の言葉を言うと、突如、赤黒い

突風が吹き荒れる

……おいおい、この万能科学の時代にこんなことあり得ねーだろ。

そうか、これは夢だ。夢なんだ。そう思う。いや、そう思い込みたい店にあったハンバーガーが突風で吹き飛ぶ。

「店の被害総額があああああああああ！……！」

相変わらず叫ぶ……いや、もはや吠える店員H……この人も化け物だ。いや、どれもこれも夢なのだろう

「鈍い。『ヘヴンウィンド』」

……もぐもぐ」

今度は旅人が何かを唱える。

それと同時に黄金の風が吹く

もう科学に違反しているなんてどうでもいい。きっとこれは夢だ

そして、何故あの旅人はマジバトル中にハンバーガーを食べているのであるのか？

「く……」

二つの風が激突している中、女のほうを押されている

「もぐもぐ……もうお前は終わりだ。早く立ち去るのだな」

そして旅人は多少のシリアスな空気をハンバーガーによってぶち壊していやがるよ……

ベチヨ



うわっ！何だこりゃ？俺の顔面についたのは…ハンバーガー！？  
ちょうど、2つの風によって吹き飛んだのであろう。  
しかし、次の瞬間俺の視界は封じられた

「…ッ！」

飛ばされたハンバーガーが俺の目の前に来たのだ。

俺の視界が赤く染まる。血ではない。ケチャップだ。俺は目に激痛を感じる

………痛い？これは夢なんだろう？だったら何故痛い？

そこで俺は疑問し、結論を出す

………もしかしたらこれは…夢じゃない？

「くっ…どうやらここは負けのようね…醜い。まさか私がこんなことになるなんて…」

そうケチャップで目が見えない俺にそんな声が聞こえてきた…

やっと虚ろながら見えるようになった目を開く。すると、もう広がっている光景の中には鎌を持った女の姿は無かった………

あまりの非現実的光景。俺は本能的にこれを夢だと思っていた

「おい、大丈夫だったか？」

「！」

旅人の一言で俺と凜歌は呆然とした状態から戻る

「…見てしまったものは仕方が無い。最初から話す必要がありそう

だな……」

旅人はそうぼつりと言った

## 2ページ目 今までの日常からこれからの非日常？

どうやら旅人が言うには、この世界は神界、魔界、そして俺たち人間と動物等の生物が暮らす人間界に別れている。そしてこいつはその3つの世界を旅しているらしい。

どうやらさっきの奴は人間界とは違う世界での、何やら旅人の命を狙っているみたいだ。

そして、俺たちのことを旅人の仲間だと勘違いをし、殺そうとした。まあ、そんなところだ。

「…そんな馬鹿げた話、信じられるはず無いだろ！しかもなんかベタだ！ベタ過ぎる！」

俺は言う

「へー、そうなんだー」

「納得するなよ凜歌！

って頭から煙が！？ショートしてるのか！？お前は機械仕掛けのロボットなのか！？」

「…まあ、信じるも信じないも、お前たち次第だ。……じゃあな」

そして旅人は去って行った……謎を残して

\*\*\*

バサッ

「うーん、気持ちいい朝だ！」

俺はベッドから起き上がる

「……あれ？そういえば昨日のは何だったんだ？そうか、夢か」

俺は一人で勝手に納得して、とつと制服に着替えて、朝食の準備に取りかかる

バタツ

俺が朝食の準備をしているところで玄関のドアが開く

「おはよー鈴音！」

「お、凜歌か。今日は早いな」

凜歌と俺の家は隣通しだ。ちなみに俺も凜歌も親を亡くしている……それからは、よく凜歌が俺の家に来る。ちなみに朝、昼または弁当、夜の飯は日によって交代で作るようにし、何故かいつも俺の家で二人で食べる

まあ、俺は別にいいけどな

「うちそうさま」

俺は食べ終える

うう…何故か未だにズキズキ痛む…読者の視線パワーすげえ！

「…さて凜歌、とつと学校行くか」

「うん！」

って何故か読者の視線パワーが増したような気が…

そして何故か『幼なじみの女の子と一緒に登校するなんて羨ましい！』とか言う幻聴が聞こえる…

ぐはっ！今度は耳がいてえ！

「だ、大丈夫？」

おお凜歌よ…俺を心配してくれているのか？

…だが、俺はもう駄目みたいだ…勇者凜歌よ今こそ聖剣デストロイ（なにその名前！？）を取って立ち上がるのだあ！

……とりあえず今のは気にしない気にしない。そんな事を思った俺自身を自己嫌悪する

「そついえば昨日のは何だったんだらうね？」

今、俺たち二人はいつもの通学路を歩いている

「…夢じゃないのか？」

「ふーん…そうだったんだ」

よし、納得したみたいだ。

…あれ？凜歌ももしかしたら俺と同じ夢みてたのか？すげえ偶然だ！…ってそんなことないか。きっと俺と違う夢だ。凜歌は天然な一面があるからなあ…

そして俺たちは曲がり角を曲がる…って

「ぶはあ！」

「ってどうしたの!?!…え?」

どうやら凜歌も気付いたみたいだ

「…また会ったな…」

そう、曲がり角に見えるとある空き地で、昨日会ったのかどうか良く分からないが、旅人がテントを張って、焚き火をした。そして手にはハンバーガーを持っている…何故相変わらずハンバーガーなんだ…

って昨日のはやっぱり夢じゃない?やっぱりそうなのか?でもまあとりあえず…

「おい、凜歌。行くぞ」

「う、うん…」

学校に遅刻するような気がするし、俺たちは逃げるように去っていく……

出来るなら関わりたくないしな

\*\*\*

「おい、鈴音」

「何だ?聖鳴<sup>せいめい</sup>」

ここは学校である。今は昼休みだ。  
今俺に話しかけてきた男は豊満聖鳴<sup>ほうまんせいめい</sup>。

外見はさっぱりした短めの黒



「って俺を殺すつもりだったのか!？」

「イエスと言っただら？」

「ごめんなさい!」

全く…相変わらずこいつは中学の時からうるさいやつだ…  
こいつにも昨日のことを言うべきか？  
いや、やっぱりやめとこつ…ネタにされると困る

\*\*\*

「ふああああ良く寝た!」

「って相変わらず授業中寝てたんだね」

「仕方ねーだろ。寝みいんだから」

やはりまたしても放課後、下校最中  
って確か俺たちは今朝こころら辺で…

「…旅人。久しぶりだな」

「ああそうだな…リズミア」

やっぱり居たかよ

そこには旅人と…もう一人。男がいた。顔は何というか…整った顔  
立ちの美男子だ…茶髪は長く、服装はごく普通



「いつ人間界に戻って来てたんだよオイ」

「…つい先日だ。それにしても随分とここ（人間界）も変わったな…」

「ああ…確かに。後、こんな所でテント張るなよ」

「…駄目なのか？」

「駄目に決まっている！ってお前は戻ってきたばかりで良く分からないか…とにかく駄目なんだよ！今の世の中ではな」

「……そうか」

そこで見たのは、今朝の旅人が何者かと話してあるシーンだった

俺は道で立ち止まって傍観する…

「あの…これは一体…どういうことですか？」

って凜歌あああ！！！！話しかけるなあああ！！！！！！

「何？こいつの知り合いか？」

「あ…はい、そうです。一応」

答えるなよ！凜歌！

「じゃあ…悪いが…こいつを居候させてやってくれないか？」

「……………へ?」

俺がすつとんきょうな声をあげる

「……………ええと……………良いよ」

「ってOKするなよ凜歌！それにお前は何だ！？初対面の人にそんなこと聞くなんて非常識過ぎる！」

「だって……………もう襲われたんだろ？」

「!?!」

こゝこいつは一体……………何故それを知っているんだ？

「ふいー……………自分の名前はリズムミア。一応こいつ……………旅人の知り合いだ。どうせこれから襲われるだろうしこいつが近くにいた方がいいだろ？ちなみに今は旅人から聞いた話だ」

「……………はあ!?!?また襲われるってどうゆうこと!?!」

「……………その言葉の通りだ。まあとりあえずこいつを居候させてくれ。頼む」

「うん、いいよ」

「ってまたしてもちよつと待てい！凜歌！」

「えー!?!?どつち道この旅人とか言う人、その内保健所に連れてい

かれるよ!？」

「こいつは犬か猫なのかあ!？」

「…すまない。話に全く着いていけない」

すると、旅人が言った

そう言えば、この人…さつきからずっと喋ってなかったなあ…

「で、マジでどうするんだ？」

「この人はうちで……でも、うち狭いしどうしよ……」

凜歌が困った顔をしている………はあ………

「……はあ、仕方がねえなあ。うちに止めてやるよ。うち無駄に広いし」

「…あ、ありがとう!」

ってその反応を見ると、このリズミアという野郎は俺を全く信用してなかったなあ。この野郎!

でもな…まあ、凜歌の家に男を入れるわけにはいかないからな…

「うん、やっぱりそれが一番良いよ」

おっ、凜歌。そう言ってくれるのか…てかやっぱりってオイ

「………で話しはどうなったのですか？」





3 ページ目 もふもふでふわふわな生命体と居候（前書き）

…もう一つの小説の執筆が全く進まない…

### 3 ページ目 もふもふでふわふわな生命体と居候

「へえー。広いですね」

「あのな…もう丁寧語はいいぞ。旅人」

「…ああ、そうか」

今、旅人とリズミアと共に俺の家に戻ってきてる…

「ところで何でリズミア。お前までいるんだ？」

俺がリズミアに聞く

「ノリで」

「ちょっと待てい！色々と待て！」

「じゃあ…気分で」

「大して変わってねえ！？」

「本当のことを言うと…タダ飯が食べそうだしな」

「タダ飯目当てかい！そんなこと言っただったら出さねーよ！…」

「断る！」

「お前のどこに拒否権が!？」

「お客様だぞ！」

「こんな凶々しいお客様、この世に生まれて初めて見たが!？」

「まあまあ、二人とも落ち着け」

旅人が俺たち二人を制止する

「…ところで旅人」

リズミアが俺の話を見殺して旅人に話しかける

「何だ？」

「お前：家に入った時くらい帽子脱げよ」

そうである。この旅人は登場してからずっと帽子を被っていたのである

深く帽子を被っていたので、ずっと素顔は良く分からないまま。

「…ああ、確かにその通りだな」

そして旅人は帽子を脱いだ。

男にしては綺麗な銀色の長髪で…イケメン過ぎる。本当に嫉妬したくなるくらいのイケメンだったのだ。そしてさらに長身で…体つきもがっちりしてる。くそう、バレンタインの日は俺までチョコ処理の手伝いする羽目になりそうだな…って何を考えているんだ？俺は



そして…

「ここがお前の部屋だ」

「へえー…中々広いな」

俺は旅人に家を案内した

「そしてちょっと待て！旅人！お前は何故テントを取り出す！？」

そして何と旅人はいきなりどこからともなくテントを取り出した

「ああ…すまん。いつものくせだな」

こゝ、こいつは危険だな…下手すればその内、家の中でテントを張り  
そうだ…そしてついにたき火をし出して…家が火事に…いかん！そ  
れだけは阻止しなければ！  
そして俺はふと時計を見る

「…ヤバイな。そろそろ夕飯の用意を始めなきゃ」

「飯…か？居候だし、俺が作るう」

「…へ」

すると、旅人がこんなことを言い放ちやがった…

「よし、まず最初に…」

炭を取り出して…って

「まてまてまてまてまてい！」

「こ、こいつ俺の予想通りのことをやるうとしゃがったなこの野郎！」

「…？どうして止めるんだ？」

「お前は天然かあ！家が火事になるだろうがあ！」

「…あ」

「『あ』じゃねえよ！この野郎！天然か！？お前は！飯は俺が用意してるからお前はこの部屋で適当に待ってる！」

そして俺は部屋を出てキッチンに向かう…あいつは悪い意味で期待を裏切らないな…

ボタン

俺が食事の用意をしはじめた所で玄関のドアが開く

「やつほー鈴音！ご飯出来た？」

「お、凜歌か。今日は早いな。ご飯はまだぞ」

「…そうなんだ」

凜歌は非常にテンションの起伏が激しい

「あれ？そういえば、旅人さんとリズミアさんは？」

「ああ、部屋に居…」

そこで俺の言葉は止まった、何故なら…

「もふー」

「……………もふ？」

そう、俺の目の前に突如、なんか綿みたいでモフモフした、空にふわふわと浮かぶ、つぶらな瞳の顔をした、謎の生命体？がいたのだ…はつきり言って…

「…か、可愛い…」

そう無茶苦茶可愛いのだ。そう、なんとというかもう、モフモフしたくなる。抱き締めたい。あー、なんてキュートな生命体なんだ！。癒される〜

…はっ、ちよつとキャラ崩壊していたぜ。ヤバイヤバイ…危険だ。よりによってこんな最初のうちからキャラ崩壊するなんて特にふう…よし、落ち着いた。とりあえずまず一つの疑問が浮かび上がる。このモフモフふわふわした生命体は一体なんなんだ？

「モフモフ？」

「…も、もう我慢出来ないよ……………モフモフむにゅむにゅズドーンバキューンしていい？」

「いや、ちよつと待て！モフモフしたいのは当然だ。俺もしたいか

らな。そしてむにゅむにゅも分からないことは無いさ。  
だけどな…ズドーンバキューンって何だよ！？意味不明だあ！撃  
つのか！？拳銃か何かで発砲でもするのかよ！オイ！  
そしてプロローグの会話とは違って俺がツツコミなのは何故だあ！  
？」

…なんちゅう長いツツコミなんだ……

「……それは全て作者のせいだ」

「ああ…確かに…っていつからそこに居たんだあ！？」

そついつの間にか旅人が俺の真横に何事も無かったのようにいた…  
なんちゅう神出鬼没なんだ…用心しないとな

「まあまあ、落ち着いて」

凜歌が俺をなだめる…ふう、お前の顔が眩しいぜ

「それにしてもこの生命体は何なんだ？」

「…メルモフ。俺の可愛い可愛いペットだ  
おーい、メルモフー。戻ってこーい！」

「もふもふー」

……本当に一体何なんだよ！旅人！お前はな！

「…とりあえず…この謎の生命体はスルーで」

「可愛いー！」

「もふー」

つて凜歌…言ったそばからメルモフという謎の生命体に抱きつくんだよ…もふもふして気持ち良さそうだけどさあ…でもな…お前がしていることはパンダに抱きつくような行為だぞ！？パンダって可愛い顔しているくせに、中国では毎年パンダによる死者が出ているという事実を知ってるか！？

「…で、飯はまだ？」

「ああ…リズムア…お前まで来てたのか、もうちょっと待っていてくれ」

向こうを気にしたら負けだ！何に負けるのかはよく分からないけど…そして俺は調理を再開した

4 ページ目

あれ？オチは？（前書き）

今回はかなり短めの話です

#### 4 ページ目

あれ？オチは？

「本当に旨いな…この煮物は」

「鈴音の料理はいつも美味しいね」

「そ、そうかあ？」

どうも、引き続き俺こと鈴音視点です

今はリビングで食事中。

…それにしても…何故か俺の料理って適当に作ったつもりなのに…  
こんなに旨くなるのは…何故？

「旨いか？メルモフ」

「もふー」

旅人はメルモフに俺の料理を食べさせてる…もうツツコまないぞ！  
キリがなさそうだからな

「お代わりをくれ」

おっと、そこで旅人がお代わりを要求してきた。お前は居候初日だから遠慮しとけよ！って言いたいが、ほとんどをメルモフに食べさせてたから、まあ仕方がないだろうと思って俺は台所へ行った…が、諸事情のためにすぐに戻り、俺は凜歌のほうを向く

「凜歌あ…」





「…声大き過ぎだ。耳鳴りがする」

すると旅人が言う。

すまん！今はちょっと応答する力が無い！

「…で、お前はどのようにして自分が女だと分かったのだ？」

「…勘？」

「…って疑問系かよ！げほっ！げほげほ！」

うう…つい喉が痛いのにツッコミを入れてしまったぜ…そのおかげでますます喉が痛くなっちまった…

「だ、大丈夫？」

おお、凜歌！俺を心配してくれるのか！

…ってちよつとはお前にも原因があるんだけどな？

…まあ大半は俺のせいだけど

「…馬鹿が一人」

「誰が馬鹿だあ！

っ  
」

うう…喉がマジ痛え…ついまた反応しちまった…もしかしたらやっぱり俺は馬鹿なのか…？

「違うよ！鈴音は馬鹿じゃないよ！」

おお！またしても凜歌は俺の味方か！ありがとう凜歌！

「鈴音はただ単にツッコミ魂ソウルを見せただけなんだよ！」

つてオーイ！ツッコミ魂ソウルつて何だ！？答えてくれ！

「だから鈴音はただの馬鹿なんじゃなくてツッコミ馬鹿なんだよ！」

つて結局、馬鹿かよ！ツッコミ馬鹿つてなんか聞きなれない分、余計悪く感じてきたぞ？

\*\*\*

「ふう…やつと喉の痛みが治まったぜ」

「まあ自業自得だったけどな」

「…それを言うなよ…旅人…で、本題に入るが…」

「む、自分はとりあえず生物学上では女だが、常に男のような格好を好んでいる。以上」

「つて本題に入ろうとしたら全部言いやがった！？

そして…まあ、人の趣味には口を出さないけどさあ…」

そして俺は女だと分かっただりズミアを改めて見る

…男とも女とも言い難い難い中性的な顔立ち。はねっ気がある茶色の長い髪。しかし、背は高く。スラッとした長身。声は低いハスキーボイス

…とりあえず…女と思えるような要素はほとんどねえ。胸だって無

いし……

「胸が無いのなんて自分は一切気にしてないけど」

「ってお前は読心術でも使えるのか!？」

「エスパーなのか!?サイコネキスなのか?いや、もしかしたらフ  
ァンタジー特有の魔法とかなのか!？」

「サイコネキスで人の心は読めないぞ」

「って旅人?お前まで!？」

「サイコキ…いや、ええと、何だったっけ?テレパシー?まあそこら  
辺の能力が使えるのか？」

「…口に出てる」

「!？」

リズミアが言う。

「…そうか、そうだったのか…これからは気をつけないとな  
そう思いつつ一通りの作業を終えて俺は就寝する  
うう…明日は学校の授業か…めんどくせえな…」

ってあれ？今回のオチは？

4ページ目

あれ？オチは？（後書き）

さて、次は学校だ！

5ページ目

いつもと違う朝とおかしな電話(前書き)

今回は新?キャラ登場です

どうも、またもや相変わらず視点はずれず槍館鈴音です

今俺はベッドから目覚めて制服に着替え中。

さあてと、そういえば今日の朝飯は凜歌が作るばんか…ふああ…それにしてもまだ眠い…俺と凜歌は基本早起きで目覚めぱっちりのはずなんだけどなあ？

まあ昨日は色々あったからか、旅人という謎に包まれた男が居候してきたり、もふもふフワフワとした生命体が出没したり、実は野郎と思つてた奴が女だったり…

あれ？思つてたよりも少ないな？まあいいや、昨日は疲れた。この一言で終わることだ

つと、そうしている間に俺は制服に着替え終わる。さあ、今日の始まりだ。

……てか普通に昨日はこんなことがあつたんだから今日も何かあるよな？てか何か無いとおかしい！そっちのほう色々怖ええよ！いや俺にとつてはそっちのほうありがたいんだけどな！何かあると疲れるに決まつてる！特にツッコミ疲れがな！

てかよくよく考えるとツッコミの比重の多いキャラってこの小説で俺だけだよな！？ド畜生！！！！

はっ、でもこの流れから行くと今日はツッコミキャラが出てくるのでは！？そうしてくれると非常にありがたい！そうで無かつたら作者コロス

そう考えてる間に俺は二階から一階への階段を下りきりリビングに向かう

おっと、ここで俺の家の説明をしておこう

まず俺の家は二階立てで庭もあり、結構広い洋風建築だ。

一階の居間にはソファーベッドや大きめの地デジ対応テレビがあり、DVDプレイヤーもレコーダーもあり、一般家庭としてはかなり上だろう。

他に一階にはキッチン、風呂、トイレ、等がある

また二階には俺の部屋や、旅人の部屋がある。他にも大量の個室があるがほとんどが空き部屋、せいぜい倉庫になってるくらいだ

他に秘密の地下室もある。そこは親父が大量に残した、ワインやら焼酎やら酒の貯蔵庫がある

…とまあ簡単に説明するとこんなところだ

「あ、鈴音」

「おはよう凜歌」

「おはよー」

俺がリビングについた途端、俺たちは朝の定番挨拶をする。

「そっぴゃ旅人とリズミアは？まだ目覚めてないのか？」

「旅人さんはさっき起きて部屋にいるよ。リズミアさんは…昨日の夜、私が帰った後に出ていったみたい」

「そっか…おーい！旅人！飯だぞおっ！」

俺は二階に向かって大声で旅人を呼ぶ



「既にここにいる」

「…へ？」

気付くと俺たちの背後に旅人が現れた。  
全く…気配を一切感じなかったぜ

「いただきまーす」

俺たちは全員同時に言った。

普段は俺と凜歌だけのハモリだから、一人加わると何か新鮮だ  
……それが男でも

「そついや気になったけど旅人の年齢って幾つ何だ？」

俺はふと疑問に思い旅人に尋ねる

「…当ててみる」

「うーん………10歳？」

「すまない。それは俺の心に悪く響く……」

凜歌の解答に旅人が何やら暗いオーラが漂う……おいおい凜歌。流石  
にそれは無いだろう

「50歳代じゃないのか？」

「おい待て。お前は絶対に遊んでるだろ？」

おっとバレちまったか。

まあ凜歌は天然みたいだけどな…凜歌は10代と言いたかったんだろっ

「で、お前の実年齢は幾つだよ？20代くらいに見えるけど」

「ああ、俺の実年齢はもはや正解には分からないが…500歳は越えてたような…」

「金やるからちよつと病院行ってこい」

俺は真顔で即答する

まあコイツの頭がおかしいのか、マジなのは分からないが、とりあえず病院へ連れてけばこの野郎を追い出せて二石二鳥だ…あれ？一石三鳥だったっけ？一石二鳥というのも聞いたような…

「まあ、俺の年齢は気にするなと言うことだ」

「そ、そうか」

…あれ？今ふと、頭がおかしいという言葉で昨日の記憶が…確かコイツって昨日は家の中で焚き火をしようとしたよな？

そして確か今日は学校…俺と凜歌は家にいない。この家に旅人一人だけだ。家の中で焚き火なんかしようとする狂人がたった一人で半日も俺の家にいる…

「ど、どうしたの？鈴音？顔が青白いよ？」

凜歌…すまん。駄目だ…この状況で顔を青白くする意外にどうし  
ると？

プルルルル  
プルルルル  
プルルルル

すると、突然俺の家の電話が鳴り始めた  
俺はその電話を取る

『あ、もしもし。突然で申し訳ございませんが、ここは鈴音様のお  
宅で宜しいでしょうか？』

「あ、はいそうですよ」

電話の声は高い。どうやら俺の知らない女の人みたいだ

『あ、どうもはじめまして。私の名前は四葉<sup>よじは</sup>緑と言います』

「あ、どうもはじめまして…」

俺はつられて挨拶を返す。

『それで…旅人さんはそこに在宅でしょうか？』

「！？」

な、何だこの人！俺の家の電話番号を知ったことと言い…そして  
何でうちに旅人が居候として住んでいるのを知っているんだ！？

「え、ええそうですね」

俺は動揺しつつ正直に返す

『それは良かったです。実は私、旅人様の知り合いです。それで、貴方の学校の理事長室に旅人様を連れてきて下さい。どうぞ宜しくお願い致します』

「……旅人の知り合い？」

また旅人が…

『ええ、そうです。』

そして何故旅人様がそちらにご在宅なのを知っているか、何故貴方の電話番号を知っているか、それは理事長室にてお話ししますのでどうぞ宜しくお願い致します』

そして電話を切る

……さてどうしようか？予想以上に面倒なことになったぞ？  
…仕方がない。俺の家と全財産のためだ

「…おい、旅人。学校に行ってみないか？」

「学校？」

\*\*\*

ということ俺は今、鈴音と旅人とともに学校の廊下を歩いている

『うわぁ…何あのイケメン？』

『この学校の生徒かな？  
でも制服着てないようだし…』

『結婚して下さい！』

『一緒に歩いているあの二人の女の子…クロス』

『こーろっせ こーろっせ』

『あんなイケメンがいるから日本は少子化してるんだああ！！！！  
うわああああ！！！！』

『あんな男女結婚バランスを崩して世界を崩壊させようとしている  
奴は殺ればいい』

『そうそう、それで一緒に歩いている女の子を二人とも…ムフフな  
ことをしてと』

『うう…腹減ったッス…』

『……………武士子。朝もあんなに食べて…まだお腹空いてる……………』

…等々と道々で問題ありありの発言ばっか聞こえてくるが俺は気に  
しない

…あれ？何で俺は拳を全力で握ってるんだろ？畜生！止まれ俺の右  
手！そこら辺の野郎どもを殴ろうとするんじゃない！

そんなこんなで、俺たちは理事長室にたどり着いた

理事長室の前にはヒラヒラとしたメイド服を着た緑髪で長髪の…お  
姉さんが立っていた。顔立ちは整っており、かなりの美人。年齢は

20くらいだろうか？彼氏はいるのであるだろうか？  
そして驚愕するのはその胸。かなりでかい

「ああ、どうも、鈴音様に凜歌様に旅人様ですね？私は四葉緑よつばみどりと言います。

旅人様：貴女と私は直接は面識は無いのではじめましてと言っておきます

…さて、貴方のよく知ったお方がこの部屋の中にいらっしやいます。  
どうぞ、鈴音様と凜歌様もお入り下さい」

そして緑さんは理事長室の扉を開いた

## 5 ページ目

いつもと違う朝とおかしな電話（後書き）

次回、新？キャラ登場！

緑「実は私を知っているお方にはバレバレですけどね」

ハハハ、気にしない気にしない

6 ページ目 居候が同級生になることってよくあること (前書き)

とりあえず何とか…早めに更新…



「久しぶりだな旅人。」

と言つてもそつちは俺の顔を知らないみたいだな。ならば三人とも始めまして。俺の名は山上やまのうえ鳥本とりもとだ。一応この学校の理事長をやっている」

理事長室の豪華な椅子に座っていた男はそう言った。何だか威圧的な口調をしている。コイツが理事長？俺からしてみたら信用出来ねえ何故かと言つと…つと、まずは鳥本と名乗る男の容姿から言つておく。

身長は160から170の間くらい。体格は見た感じ男にしては細く、肌白。はつきり言つて弱そうだ。

顔は………いわゆる女顔だ。しかし、眼光と目付きは共に鋭い。髪型は…多少茶色っぽいような気もする黒髪の、ちよつど首の後ろが隠れるくらいに伸びたちよつと長めの髪。跳ねっ気は無い

はつきり言つと、一瞬女と見間違えた。でも、悲しき性か…俺も同じ境遇のせいか、女のように見えるけど男だと分かった

そして…年齢は15くらい…そう、俺と同年くらいなのだ。俺と同年くらいの男が自分の学校の理事長なんて信じられねえ。さらに何故俺たちを呼んだんだ？それに旅人の知り合いと言つてた癖に旅人とは初対面みたいだ。謎が多すぎる…

「ふむ、どうやら槍館君は俺の事を信用出来ないみたいだな」

「何で分かった!？」

「いや、普通に顔に出てるぞ」

「.....」

「まあまあ鈴音。きっとそれは正直だつて事なんだよ。正直つて良いことだよ？例えば...ええっと.....心理テストとかできつといい結果が出るだろうし...」

「もう良いんだ...凜歌...それは微妙過ぎる...」

「ふわあっ！鈴音！落ち込まないで？ね？」

うう...心に微妙な傷が...

俺が落ち込んでる間に旅人は鳥本に話しかける

「...山上...？まさか...お前...」

「きつとお前の思ってる通りだ。旅人」

「...懐かしい」

この二人の会話ははつきり言つてよく分からない。まるで遠い過去の昔話みたいだ...二人ともそんなにジジイには見えない...つてそれどころか二人とも10代に見える。

「...ところで要件は？」

「...ふむ、ちよつと過去の話にふけていてまだ話して無かつたな。要件を話そう。あと鈴音...と呼び捨てにしてもいいか？」

「え？あ、はい」

「よし、だったら鈴音。お前も話を聞け  
まあ正直言つて要件とは言い難いのだが…旅人。お前にはこの学校  
に通ってもらいたい」

「…………へ？」

旅人と俺の声がダブる

「…………旅人。お前が前にこの世界に来てから何年が経過したと思っ  
ている？」

「…すまん、前に来たのがいつだったのか覚えて無い」

「おおよそだが…既に500年は経過してる」

「…そうか…500年も…どつりでこの世界の景色は見慣れないと  
思った」

「…そうだ。魔界や神界はともかく人間界は違う。500年もあれ  
ば人は進化する。人間は神や魔族より遥かに不完全な生物だからな  
…」

「同じ人間であるお前が言うセリフか？」

「…………同じ人間であるからこそ言ってもいいだろ。それに人間は  
不完全だからこそ面白い」

正直、話について行けない。話が突飛過ぎる。とても一般人である  
俺がついて行けるような話ではないな…こりゃあ

二人とも…特に旅人が…まるで自分が『普通の人間ではない』ような話だ…おかしい。これは事実なのか？それとも二人とも頭が狂っているのか？もしくはこれが普通で俺が狂っているのか？その三つの解答しか俺は考えられない。だとしても嘔み合わないからだ

「さあ話の続きだ。旅人。お前には今挙げたことによりこの世界の常識というのが無い…よって、お前を学校に通わせることにした」

「…へ？」

旅人が疑問符を浮かべる。そりゃそうだろ。なんせ俺だって疑問符を浮かべているんだしな。

…まあ、凜歌も疑問符を浮かべているには浮かべているけど、俺たちの疑問符とは違う。きつと話に着いていけないだけだろう。

「…ちよつと待て。何故俺が学校に通うことになる？」

「…言つた通りだが…お前は社会常識に欠けるし、他の世界に行く用事は無いだろ？だからお前にはこの学校で社会勉強をして貰おうと思つてな…」

「社会勉強の必要など無い！」

おおっ！？旅人が『！』マークを使っているのを見るのは初めてだ！理由は分からないけど何となく感慨深い

「ははっ。旅人。お前がいない間にこの世界は随分と変わってるんだよ」

「…ってリズミアあつ！？」

「…何故お前がここに…」

「へ？リズムミアさん？」

…ふと気が付くと、突然、鳥本の背後に男物のライトグレーのスーツを着たリズムミアが立っていた。朝から見えてないと思っていたらこんなところに…

「ああ、リズムミアにはちょっとした事情でこの学校の教師をやっってもらっている」

どうやら鳥本とリズムミアは知り合いみたいだ…てか教師っておいおい…こんな変人を教師にしているのかよ…

「とりあえず自分は1のCクラスの担任になることになる」

「って俺のクラスかよっ!？」

「まっ、お前のクラスだからだ。からかいやすそうだし旅人も同じクラスになるし」

「…俺は納得いかない」

「まあまあ落ち着け、旅人。お前が生徒でリズムミアが教師という構図のほうが都合がいい…」

「そうか…」

「という事で鈴音、旅人の面倒を宜しく頼む」

「はあ！？何で俺が？」

「…旅人はお前の家の居候だろ？だからだ」

「う…ぐ…でも旅人が居候が成つたのは成り行き上で…」

「いかに成り行きで居候になったとしても、旅人はお前の家の居候という事実は一切変わらない…だから宜しく頼む」

「う…」

くそつ、論破されてしまった…でも確かに言ってる通りだ…

「さて、そろそろ時間だ。鈴音、お前はとりあえず凜歌とともに自教室に戻れ。リズミア、お前は旅人に一通り説明した後に旅人を教室に案内してくれ」

「はいはい。分かった」

「凜歌。戻るぞつて凜歌あつ！？」

「うー頭痛いよー…」

「いやちよつと待て！お前さつきから何も発言も行動もしてないかと思っていたら頭がショートしていたのかあつ！」

\*\*\*

「うう…疲れた…」

「また凜歌とトラブルか？」

俺は教室に戻ってきた。今は近くの席の豊満聖鳴ほうまんせいめいと話している。とりあえずこの前、聖鳴の容姿は言い忘れてたから今言っておく。聖鳴の体つきは…身長は比較的高め、体つきは比較的就ちりしている。顔も男らしい感じのイケメンで、美少年というわけではない。また、両手の人差し指に銀色の指輪を着けている。つとまあこんなところか

「そうそう、そういや今日はようやくうちのクラスの担任が決まったみたいだぜ？このクラスのクラス担任予定だった先生は何か突然やめちまったみたいだから中々決まらなかったんだよ」

「へえーそうなのかー」

大方鳥本理事長がそんな噂を流しているのだろう

「それで今日はクラスの一人一人の自己紹介があるのだとさ」

「そうなのかー」

俺は適当に相槌を打つ

そして最初のチャイムが鳴った

## 6 ページ目

居候が同級生になることってよくあること（後書き）

鈴音「ぶつちやけ言っただけで今回の話に出てきたのは凜歌を除けば男ばつかな」

うぐっ…それを言っな…

鈴音「大体この小説には女性キャラの配分が少ないような気が…」

ふふふ、しかし今回は新キャラがバンバン登場だ！お楽しみに！

鳥本「だがもう一つの小説は自分の身の程もわきまえずキャラ出しすぎてカオスになったんだよな」

うぐっ…では！

鈴音「逃げやがった!？」



7 ページ目 自己紹介って定番だよねっ！（前書き）

ふはははは！まさかの2日連続更新！

鳥本「多分3日連続は起こらないだろうな」

…ぐはぁっ！

あ、ご感想お願い致します！どんどん送ってきて下さって結構です  
ので！じゃんじゃん感想お願いします！

## 7ページ目 自己紹介って定番だよねっ！

「あーちよつと学校側の事情で担任が決まるのが遅れて申し訳無い。さて、自分の名前はリズミア・デルセス。このクラスの担任です。担当教科は日本史。年齢は二十歳の新米教師で、最近この学校に就いたばかりです。どうぞこれから一年間宜しくお願いします。何か質問は？」

リズミアが自己紹介をする。

こりゃあ多少嘘が入り交じってるな…ま、俺としてもそれが一番いいな、知り合いだと知られるとめんどくせえし

それにしても本当に野郎にしか見えないよなあ…女だとはとても思えない。コイツはもはや『男装の麗人』レベルをとくに超越している声もハスキーボイスだし…俺とは正反対だ  
畜生！ここまで来るとあの容姿が羨ましい！

「おい、鈴音。てめえ何を考えてる？変態か？お前」

「聖鳴。お前にだけはそのセリフは言われたく無い！」

「ちえっ、まあお前がああ先生が女だと気付いているはずないしな。だとすると…ついにBLに目覚めたのか！

…いや待てよ。お前の場合は同性愛にはならないのか」

「ちよつと待て！何であの先生が女だと知っている！？それに俺はホモなんかじゃねえ！ノーマルだ！普通に女の子が好きなんだ！それに『ついに』って何だ！？俺が今までに同性愛者染みた行動でもしたか！？

てか俺の場合同性愛にならないってどうゆうこった畜生！遠回しに

俺が女だとしても言ってるのか！？だとしたら殺すぞてめえ！外見はこうちよつとばかり女みたいだとしても中身は100%真正正銘の男だあつ！」

「…お前あの教師と知り合いか？」

「……あ」

今の俺はとつてもマヌケに見えることであろう。畜生！つい言ってしまったぜ！

「とりあえずお前相変わらず馬鹿だなあ…まあいつか。とりあえず教えるよ」

「…誰にも言うなよ？俺とあの教師はちよつとした知り合いなんだ」

「お前：金髪幼なじみに男装の麗人女教師が知り合いって…周りの属性多いな」

「好きで知り合ったんじゃないやねって…ところでお前は何で気づいたんだ？」

「ふ、俺をなめるなよ。」

俺は女性であれば男装の麗人幼なじみ同級生年上年下お姉様ロリお嬢様小学生OLメイド猫耳獣耳ボーイッシュインテールポニーテールロングショート金髪黒髪緑髪ツンデレヤンデレクールデレ素直クール腹黒多重人格人外妖怪神様エルフ妖精巨乳貧乳実の姉妹等々や最近では男の子でも可愛ければいつでも受け入れOKな俺をなめるなあ！」



「じゃあ彼女もしくは結婚しているんですかー？」

次は女子生徒が質問する

「またもや気になる質問だ。ここで自分は女だと暴露しちまうのか！  
？それとも…」

「いや、自分には現在恋人はいない」

…うん、リズミア…お前は隠し通すつもりなんだな…

「だったら私と付き合ってください！」

「断る」

いきなりの告白に即答！？

「畜生リズミア！心から羨ましい！！初日からいきなりモテモテじゃないか！実は女のくせに！」

「さあてと、他に質問は無いな

「それではまずクラス全員の名前を知りたいから一人ずつ自己紹介で  
もして貰おうか」

と、リズミアが言った。てか女子どもめ…さっきの返答から一気に  
質問に挙げてた手が下がってるじゃないか。お前ら皆レズなのか！  
？畜生リズミアめ！この色男女！

…微妙に哀しくなってきた

さて、ここからは俺の印象に残った自己紹介を挙げることにする

「先んじて一番手を勤めるのはウチやさかい！」

まず最初：出てきたのはエセ？なのかはどうかはよくわからないが  
関西弁の女。

身長は低め…小学生と言っても通用しそうなところか？それでいてス  
タイルは一言で言うとロリ体型：出っぱっていない

顔は…うん、幼さの残る顔で可愛い。それで特徴としては八重歯が  
見えて…瞳は日本人には珍しいブルーサファイヤで髪の毛は桜色の  
セミロング。俺にも妹がいればなあ…ってつい思ってしまったぜ

「ウチの名は舞津魅麗まいつ みれいや！自分で言うのも何やけど、美少女や。で  
も気にせえへんとして、ウチは可愛い女の子にしか興味が無いんや。  
野郎に恋愛感情なんて抱くこと無いやさかい。告白なんかせえへん  
といてや

あ、せやけど友達ならええで？」

……よくよくコイツの性格が分かった。多少ナルシスト気味…だけ  
ど可愛いのは事実だから置いといて、同性愛者かよ…ま、俺には凜  
歌がいるから関係無いしな…そう思っておく

さあて、次だ

「ほな、マイク替わるで」

次に出てきたのは男：黒髪で前髪が長く、右目が前髪に完全に隠れ  
ている。後ろ髪もそこそこに長い。でも寝癖が多多あり、手入れし  
ていないことがはっきりと分かる。顔は非常にバランス良く整って  
いて、美形だ。

長身でスマートな体型、でも決して細身という訳では無く、余分な



…まあいいか」

ようやく魅麗とか言う女の子は帰ってった…

「さて。僕の名前は蓬萊響ほうらいひびくって言います。これからの一年、宜しく  
お願いしまーす

あ、ちなみに僕と舞津さんとは初対面です」

『って初対面かよ!?!』

それが最初にこのクラスが一つになった瞬間だった

………何てしょうもないんだろ…このクラス



7 ページ目 自己紹介って定番だよねっ！（後書き）

鈴音「何か終わり方微妙じゃないか？」

はい！そうです！本来この話と次の話は同じ話の予定でしたが諸事情により途中で区切らせていただきました！

では！正体不明でした！

あ、あと出来れば感想下さい…

8 ページ目 何をかけたか自己紹介！？（前書き）

うーん…いいサブタイが思いつかない…

あ、感想ごんごん送ってきて下さいませ！お願いします！

## 8 ページ目 何をかけたか自己紹介!?

「はじめまして。俺の名前は……」

さつきからウダウダと何の面白味も無い自己紹介が続いている……  
ふわああ……眠い……マジ寝みい……寝たい。そう、早く机に突っ伏して  
あの有限のネバーワールド（夢の世界）に旅立ちたい……ふわああ  
……何か俺の目を覚ましてくれるような自己紹介をしてくれる奴はい  
ないのか？

「はじめましてッス！私の名前はええっと……鳴海<sup>なるみ</sup>武士子<sup>ぶしこ</sup>です！」

突然の大きな声で俺の目が覚める

うつらうつらしていた目をパッチリと開いて、武士子とか名乗った  
女を見てみる……

第一印象はまず、野性的。

……こういうのを体育会系美女とも言うのであろうか？しかし胸は  
結構大きい

それでいて、その純日本人的な感じのする黒々とした長い髪はポニ  
ーテールにしている。ちなみにそのポニーテールはかなり長い  
顔は凛々しくて、血色は良く、元気が溢れていそうだ。

「ええっと私の趣味は……確か……忘れました！」

「ナイスボケや！」

ちよつと待てえ！忘れた！？自分の趣味を忘れたのか！？

そして前回登場した関西弁の女の子……魅麗！そう簡単に乗るな！

「ええと…後は…あーお腹空いたツス…」

「今言うことか!？」

「お腹が空きすぎて破裂したらどうするのですか!？」

「なんで破裂するんだ!？」

「ええと…核融合?」

「そんな物騒なもんがそう簡単に起こって堪るかあああああああああ  
ああ!?!?!」

「まあまあ、二人とも落ち着きいや。それがウチをその漫才に混ぜてくれや」

「…お前ら全員待て。時間がつつかえてる」

まさかの旅人が言う

…うん、確かに時間がかなり経っている。こりゃあとつと進めないとな…

てか普通こうというのは教師が時間調整するはずなんだけど…リズムミアは一体何をやってるんだ?

っていない!?

教室を見渡してみてもリズムミアらしき姿は無い。

…あの野郎…放り出しやがったな…教師のくせに…

こういうのを駄目教師と言わないで何て呼べばいいんだ?

「何を思ってるんですか? 鈴音君」

「ぶおっとべさてらいとお!?!?」

「はい面白い反応をありがとう」

「iiiiiiiiiiつの中に背後にいたんですかりズミア先生!？」

「いえ、さつきからずーと鈴音君が眠たさそうにしてたから…起こそうと思ってました」

「その手に持つてるマジックは何ですか!？明らかにイタズラでもするつもりだったでしょ!？」

「さあ…？何の話でしょうか?それに鈴音君。静かにして下さい。自己紹介が進まないですよ?」

「今後ろにマジック隠しただろ!？  
てかこんな時に正論ですか!？」

「……………静かにして下さい」

「…はい」

畜生!最後は威圧感で押されてしまった!

…この反面教師め…そもそも生徒の可愛い顔に落書きなんてしようとするなよ…暴力教師

「今何て思いましたか？」

「いえ!何でもありません!」

な、なんて勘が鋭いんだ…脅威的…いや恐怖的だ。使う言葉には気









「いやちよつと待つてくれ！同時に話しかけるな。俺は聖徳太子の  
ような奴じゃないんだからさ……」

「えっ！？違うの？」

「オイコラ待て凜歌」

今は休み時間、何故か俺の机の周りを囲うように魅麗や響、武士子  
に凜歌がいる

何故だ…俺は目立たず普通に暮らしたいだけなのに……そんなに目  
立ったか？いや、大丈夫なはず…でも根拠は全く無いな…

……と、とりあえず気にしないようにしよう！全て  
は馬鹿へんたいのせいだ！

それにしても俺の周りにはこのメンバー以外誰もいないな…クラス  
を見てみると、大抵の女子どもは旅人の周りでキヤーキヤー言っ  
て旅人は追い回されてるみたいだ。

それでいて男どもは寝てたり一ヶ所に集合したりしてた。

何やら集合した男どもからは『旅人』『陥れる』『殺す』等々のリ  
アルに殺気がかった言葉が聞こえてきたが気にしないようにしよう。  
ちなみにリズムア先生は何やら鳥本理事長に呼び出されたらしい。  
まあ、きっと俺には関係無い話だろう

「それにしても、驚いたで。まさか自己紹介の最中に蹴りをかまし  
て登場やなんてなあ…流石に予想外だったで！」

「いや…ちよつとまあアレは…色々」

「それにしてもアンタ可愛いなあ…どや？ウチと付き合わへんか？  
性的な意味で」

「…へ？」

いきなり魅麗が俺に言ってきた  
付き合う？性的な意味で？

ファットドゥーユウースイング？

「あ、女の子どうしでおかしいと思っとなるやろ？別にきにするこ  
はあらへん。カナダとかオランダとか大阪とかでは普通や！」

「いや、大阪はおかしいだろ！？」

それに女の子どうしってどういうことだ！？」

「へ？ウチはれっきとした女の子やけど…」

「いや、そうじゃなくて…俺は男だってことだ」

「…へ？ほんまか？」

そついや女の子なのに男の制服なんておかしいと思ったんやけど…」

「俺は正真正銘の男だ。生徒手帳にも書いてある」

「つてええ！？」

「うっ…何か男と女の区別がよく分かんなくなってきたッス…あれ  
？そついえば男と女の違いつて何でしたっけ？」

響と武士子が驚愕する

「…ほんまなんか！！！？？」

「………ますます付き合いたくなっ たわ」



「あれま。先約がいたんか。ほなウチは諦めるしかないわな。あつさりしとるのが関西人の取り柄や」

その日ぐったりとした男？、約一名が誤解を解いて教室に戻ってきた。ちなみに他の男子生徒一名は行方不明になっていた。翌日血まみれの状態で発見されたらしい

## 8 ページ目 何をかけたか自己紹介！？（後書き）

さてと、今回からはちょっとした企画を行いたいと思います…その名も『企画募集企画』

はい。そのまんまです企画自体を募集してしまうという前代未聞の企画です！読者様がやって欲しい企画を募集します！

もちろん、奇を狙ったものでも、『もしも企画』のようなものでも、常識の範疇に入るのならば全然OKです！

感想欄でもメッセージでも構いませんし、一人いくつ送ってきて下さっても構いません！但し、常識の範疇で行って下さい

そして、送ってきて下さった企画をいくらか厳選して、実際にその企画を行います。

では！果たして送って下さる方はいるのかという一抹の不安にかられながら退散させていただきます。

…宜しくお願ひします！どうか一つだけでも送ってきて下さい！

## 9 ページ目

モテないのもツライけどモテすぎもツライ(前書き)

うう…すいません。一度投稿したこの話を一度消してしまっで、大  
幅に書き直しました…ちなみに内容もかなり違います

## 9 ページ目

モテないのもツラいけどモテすぎもツライ

「旅人さん！」

「付き合って下さいー！」

「結婚式はどこであげましょうか？」

「じゅる…美味しそうね…ふふ」

「旅人…殺す！」

「我がMY<sup>モテる</sup>(野郎は)K(殺す)会の餌食となれえええ!!!」

「殺す殺す殺す殺すひゃっはーっ！」

「刺殺か？絞殺か？斬殺？毒殺？焼殺？撲殺？鈍殺？飢殺？滅殺？  
さあ、死に方くらいは俺の慈悲の心により選ばせて…：…やらん！  
てめえみたいなモテ野郎は一番惨たらしい死に方で決定だああああ  
!!!」

「こらあっ！廊下を走るなあ！」

「ごめんなさい!!!」

ああ、これが鈴音以外の初視点か…どうも、旅人だ。

俺は今まで、それなりに自由気ままに異世界どうしを渡って旅をしていたのだが、ちよっとした事情により人間界に滞在することになってしまって、そして何の因果が働いたのか、この学校の学生をや

ることに…

今は昼休み。何故か大量の人に追いかけられている…理由は不明だ。何せ心当たりが一切無い…

口振りは冷静なようにしているが、実質はそれどころではないはつきり言つと、後ろの集団はかなり怖い。恐怖だ。今まで何度か死線をくぐり抜けてきた俺だが、今回は後ろから感じる殺気と、何だか良く分からない気が半端ではないのだ。とりあえず背後の集団に捕まったら、かなりの危機だろう。俺だけじゃなくて、作品的にも。

まあ、蹴散らせば話は早いのだが…暴力沙汰は起こさずに、さらに魔法も使つたりしないようにリズムアや鳥本に言われている。もし必要性が無いのに使つたと判断されたら…  
……………と、とにかく危険だ。

リズムアは俺と近い実力者だし、鳥本の戦闘力は見た感じ大したことは無いようだが…何かを隠しているみたいだし。さらに二人とも俺の弱点を知っている。

しかも緑とか言う女には『【ピー】しますよ。』と、とっても恐怖感溢れる言葉を言われた…あの集団や、リズムアや鳥本よりも一番怖いのはあの緑という女かもしれない…

と、とにかく背後の集団を蹴散らしたら…背後の集団に捕まるより恐ろしいことになる。だからこうなつては逃げる他無いだろう…しかし、魔法が使えないというのは非常に難儀な物だ。身体強化魔法も使えない…よって基礎能力だけで逃げるしかないのだ

「く…アイツ…意外と足速え…おい、B部隊。階段から周りこぶえつ」

そこで囁むなよ…とちよつとツツコミたくなる。しかし、そんな余裕など俺には無い！

周りこみだと？くつ…それは厄介だな…さてどうしようか？



「了解しました隊長！」

「イエッサー！」

「イー！」

「イー？」

「俺たちの名前は怨念戦隊オンネンジャーじゃー！」

「怨念戦隊オンネンジャーじゃーって何だ!？」

「つい俺はツツコミを入れてしまう。」

「しかし、実際はそんな余裕なんて無い。周り込まれたのだ。周り込んだ人数は5人…全員男だ。」

「くっ…なんて地味に厄介なんだ…、素手で何とか出来るが、暴力沙汰もここではご法度みたいだしな…後が怖い。」

「しかし、突破口は見つけた！」

「すまない！」

「怨念戦隊オンネンジャーとは、モテる男への怨念で世界の平和を…つてへ？何をやってるんぎゃあああ!!??？」

「何なの？あんたみたいなウジ虫野郎に私は興味無いのよ。とつととトイレに流されなさい」

「我がMYK会の邪魔だ!…!この社会の「コミ」!愚図!…!」

とりあえず、怨念戦隊オンネンジャーとか言っていた男を後ろへ放り投げて時間稼ぎをする。

…本当にすまない！…何か心から謝っておかないといけない気がした

「く…だがこのままでは堂々巡り…さて、どうするか…ん？食堂だと？よし、ここに逃げ込むか…」

そして俺は食堂に入ってしまった

### 鈴音視点

「モグモグムグムグパクパクムシヤムシヤ…この料理は美味しいッスねー」

「いや、武士子…お前ちょっと食べ過ぎじゃないか!？」

「うーん…太ってない大食いっ子というのも今までに無い感性で萌えるぜ!」

「聖鳴…お前はもう年がら年中365日萌えていやがね!このト変態男!」

「閏年の時はどうするの?」

「うーん…凜歌ちゃん。あれは言葉のあやというもんやで」

「……………」

……………ええつと、僕の台詞は？」

どうも、さっきは俺視点では無くなったような気もするけど鈴音です。

今は食堂で俺と凜歌、聖鳴、武士子、魅麗、響というメンバーで食事中。

それにしても…今、俺の目の前に異常な光景が作り出されている。それは何故かと言うと…鳴海武士子。彼女のせいだ。

何せ食べっぷりが半端では無い。正直言つて、とても怖い。怖すぎる！恐怖光景以外の何物でもない！きつと読者の皆さんの想像を遥かに越えたくらいのレベルの量を食べている！何せ、机一つ丸々大量の食器が幾重にも積み重ねられ埋まっているからだあ！！！！

どうしてそんな小さな体にそんなに大量に食べ物が入るのか。そんな事を考える余裕すらない！何よりも怖い！マジで怖い！夢だろ？これ、ぜってえ夢だろ！？なあ、目覚めてくれよ俺え！

……………ふう、何とか落ち着いた。恐怖を通り

すぎて一週回つたら意外と落ち着くもの何だなあ……………まあ、世の中にはこんな人もいるのだと心を広くして受け入れよう。うん。

ん？落ちつくのが早過ぎるだつて？ははっ。気にしないようにすればいいのさ

ちなみに他のメンバーももはや恐怖なんてしてない。凜歌や響は全くの無抵抗でこの事実を受け入れてるし、聖鳴は馬鹿だし、魅麗もどうやら俺と同じようだ。

そう俺が思っていると、突然廊下でドドドドと地響きにも似た足音が聞こえた。

「おい、助けてくれ！！！」

そして旅人が俺たちに助けを求めてきたのだ。

うわっ…めんどくせえ…

「あのう…すいません。誰ですか？」

「…他人のふりするな！」

「旅人さん！婚姻届に判子を…！」

「凍殺絞殺刺殺抹殺滅殺腐殺飢殺窒殺焼殺斬殺撲殺鈍殺圧殺落殺銃殺絞殺薬殺爆殺祟殺呪殺獄殺轢殺抉殺惨殺…！！！！！」

「くっ…もう追い付いてきたか…」

そして大量の人々を連れて、また逃げて行った…畜生め！あのモテ野郎め…！！羨ましい…！！

俺なんて…俺なんて…俺に言いよってくるのって男ばかり何だよ畜生が…！！

「ええつと…もしかしたら知り合いじゃなかったの？」

「そやな、向こうの口振りから察するに、知り合いみたいやけど…」

「聞きたいツス！」

…旅人め…まあ、一応ここにいる全員に説明しておくか…嘘混じりだけどな。

「…とまあこんなわけだ。この事は他人には言わないでくれよ？知られると色々と面倒くさそうだし」

「へえーそうなんだ」

俺は何とか説明する。まあウチに居候してるってことだけだけどなふう…あーめんどくさ

「ええ！？旅人さんはそんな人じゃ…ムグムグ」

「とりあえず黙っておいてくれないか？凜歌」

「うーん、何か色々と裏がありそうな説明やな」

「何かあの人はこの世界とは違う匂いがしたツスよ？」

つてヤベエ！いきなりバレかけてる。くそっ！何て勘が鋭いんだ。

「ええっと…何というかそりゃあまあ…」

「コイツの説明が下手なせいだ」

「つて鳥本理事長！？」

「鳥本理事長やて！？」

「あ、旦那あ」

「旦那あ！？」

皆、酷く驚愕している。それもそうだ。何せ突然、鳥本理事長という、偉い人が現れたのだから

……つて反応から見るからに本当にコイツ理事長だったのか？

でも、とにかく俺は武士子が鳥本を旦那と言ったことに驚愕した。

旦那って…け、結婚してるのかあ！？そ、そうだったら【ピー】や【ピーピー】【ピーピーピー】なこともしているのかよ！？おいこら！？

おっと、ヤバイヤバイ。俺の思考回路も聖鳴並になっちまう所だった。

「へえーほんまに入学案内の写真の通り、若いなー高校生理事長やなんて凄いで！な、鳥本理事長」

にゅ、入学案内だつてえ！？け、決して俺は見えないわけじゃないぞ。そ、そんな訳無いからなあ！それどころかその存在を知らなかった訳でも無いからな？

「まあ、高校生といつても他の高校なんだけどな。それに理事長だと言つても、同い年だからな。呼び捨てでいい」

つて本当に見た目通り同い年だったのかよ！？

……それに魅麗の台詞だと本当に理事長らしい。…うん。

「で、鳥本。何やっていうと、鈴音とは知り合いみたいやけど…」

「ああ、そりゃそうだ。俺と鈴音は親戚同士だしな」

「へえーそうなんか」

…へ？何だそりゃ？親戚同士だなんて初耳だぞ！？

ん？何か俺の元に一枚の小さい紙きれが…その紙を見てみると、綺麗な筆跡でこう書いてあった

『とりあえずこれは口裏合わせだ。まあ、親戚同士なのは事実だけ

どな』

…おいおい。

まあいいか。面倒くさいし

「で、ちょっと聞きたいんやけど武士子」

「へ？何ツスカ？」

「旦那ってどういうことやあ！？」

あ、すっかり忘れていたけど。それも気になる。てかさつちの方が遥かに重要だ！何か違うような気もするけど

「旦那は旦那ツスよお。それ以外の何者でも無いツス！ね？旦那」

「いや、武士子はウチの居候でな…拾ってやって以来何故かそう言われている」

「ちつ。何や、面白くないのお」

「お前は何を期待してたんだ？」

お前は何を期待してたんだ！？って言う前に、鳥本がツツコミを入れてくれた。

ま、まさか鳥本はこの小説の俺以外の唯一のツツコミ役なのか！？  
とつてもありがたい！本当に泣きそうだ！二重の意味で  
つと思つた所で背後から静かなる殺気が…

「鈴音…さつきはよくも無視したな…」

俺の背後に居たのは旅人だった。

くっ…この場を切り抜けなければ俺の命は無い！あれ？なんか知らないけどデジャヴ

しかしヤバイ。切り抜ける方法が全く無い！くっ…俺に残されたラ  
イフカードは…

『死亡』

『死亡』

『死亡』

俺の未来には死亡しか無いのか！？

「おい…ここで暴れたりするなよ」

「む…鳥本か」

おお！鳥本！あなたは救世主だ！貴方がここまで良い人とは思っても  
しなかった！

「精神的、経済的に痛めつけてやれ」

…良い人じゃなかった

その後、俺は傷つかなかったものの、しばらく毎日食べ物ハンバ  
ーガーだけだった。毎日ハンバーガーは地獄の苦しみだ。多分俺は  
しばらくハンバーガーを食べないだろう

今回の結果：鳥本と旅人、聖鳴、響、魅麗、武士子がそれぞれ友達



になった。  
旅人はハンバーガーが大好きだと判明した

## 9 ページ目

モテないのもツライけどモテすぎもツライ（後書き）

どうか感想下さい！宜しくお願いします！

## ページ裏

## キャラ紹介！（前書き）

ええ、今回はキャラ紹介です。別に読まなくても本編を読むにあたっては何の問題もありません…

あと、このキャラ紹介はちよくちよく修正されていきます。何か重要な変更があった場合はお知らせします

## ページ裏

## キャラ紹介！

どもども、作者の正体不明です！

旅人「無駄にテンション高いな…旅人だ」

鈴音「…で、今回は何をするのか気になる鈴音です」

イエー！男だけなのが気になるがとりあえず今回はキャラ紹介だあ！

旅人「キャラ紹介か…ベタだな」

鈴音「おいおい…せめて定番と言えよ」

ごめん…微妙に傷ついた

鳥本「とりあえず本題、キャラ紹介に行くぞ。どうぞ！」

鈴音&作者「って結局お前が進めるのか！」

名前：槍館鈴音そつたちすすね

性別：男

容姿：とてつもない女顔で大抵の場合は女と間違われる。髪は黒のストレートで、耳が完全に隠れるくらいまである。身長は低く、肌の色も白い。

毎日の日課：掃除洗濯、ツッコミ

成績：下の下

概要：本編の主人公で桜道高校に通う高校一年生。

過去に何か色々と有ったようだ。

はつきり言つて馬鹿だが、いざというときにはそこそこの知力を發揮する

両親はすでに死去。兄弟もいない

名前：御神楽凜歌  
みかくら りんか

性別：女

容姿：日本人には珍しい金髪のロングで、黒い瞳を持つ。かなり整った顔立ち。身長は女子の平均くらい。

毎日の日課：料理の研究

成績：中の上

概要：この小説のメインヒロインで桜道高校一年生で鈴音とは幼なじみの関係である。

両親はすでに死去。兄弟の有無は不明。かなりの天然であり、嘘なんかには直ぐに騙される

旅人  
たびびと

性別：男

容姿：一言で言うならば、絶世の美男子。顔立ちは非常によく整っている。銀色の長髪で、体つきはがっちりとした長身

毎日の日課：剣の手入れ、日記の執筆

成績：世間知らずな為、下の上程度

概要：何の因果か、学校に通うことになってしまった人。外見年齢は17。でも高校一年生。実際の年齢は不明

高校では神霊旅人しんれいりょびとという偽名を使っている。

今までは、人間界、魔界、神界の3つの世界を自由気ままに旅して

きた。しかし、何らかの事情により人間界に長く留まることになったメルモフという謎の生命体をペットに飼っている

名前：リズミア？デルセス

性別：女

容姿：美男子みたいな顔立ち。体つきは女にしては長身。胸が無い。茶髪で長髪

毎日の日課：情報収集。怪しい研究

概要：旅人や鳥本とは仲間。桜道高校で教師をやっている。秀才で、多少サドっ気がある

男装が大好きで、良く言えば個性的な人。悪く言えば変人

名前：豊満聖鳴ほうまんせいめい

性別：男

容姿：黒髪の短髪で、いわゆる美男子というわけではない男らしいイケメン。

普通よりも身長は僅かに高い

毎日の日課：可愛い女の子の物色。ナンパ

成績：上の下

概要：桜道高校一年生にして、性欲100%の変態。そのくせに結構頭は良い。今まで幾度なく彼女を作ってきたが、一ヶ月以上付き合い続けたのは僅か一名しかない。

両手に常に着けている銀色の指輪には深い思い入れを持つ

鈴音と同じで、過去に何か色々あったらしい

名前：山上鳥本やまのしづみもと

性別：男

容姿：ちよつど首の後ろが完全に隠れるくらいの長さの黒髪で、顔の輪郭やパーツは整っていて、いわゆる女顔。しかし鈴音ほどではない。身長も普通よりちよつと低め女と間違れることもしばしばある。

毎日の日課：仕事、甘い物を食べること

概要：桜道高校理事長。年齢は15。重度の甘党であり、かなりの大金持ち。何か人成らざる力を隠している様子。鈴音の遠い親戚である

名前：舞津魅麗まいづみれい

性別：女

容姿：ブルーサファイアの瞳を持ち、髪は桜色のセミロング。体型は：体は小さくて、未発達：属に言うロリ体型。綺麗と言うよりも可愛いという表現が似合う顔をする

毎日の日課：漫才の練習、ネタ考え

成績：中の下

概要：関西弁の元気が溢れまくる人。ハリセンを常備している。また、漫才の相方と成る人を探し求めている

同性愛者で可愛い女の子を見るとすぐに告白する…が、現在32連敗中

名前：鳴海武士子なるみぶしこ

性別：女

容姿：黒髪の非常に長いポニーテール。凛々しい顔立ちをしている。身長、体重ともに平均的。胸は：結構ある。何やら常に野性的な雰囲気を漂わせている

毎日の日課：剣術の鍛練

成績：下の下

概要：とてつもない大食いで、直ぐに腹が減る。

鳥本の家に居候しており、鳥本のことを『旦那』と呼んで、慕っている

実は、トンでもない所の出身であるが、隠してる

名前：蓬萊響ほうらいひびく

性別：男

容姿：前髪が長く、右目が前髪に完全に隠れていて、後ろ髪もそこそこ長い。でも手入れしていないから寝癖が多い。顔は非常にバランス良く整っていて、美形。

長身で余分な肉が無いスマートな体型

毎日の日課：読書、音楽を聞くこと

成績：上の上

概要：非常に温和で柔軟で優しい性格。また、金づちでもノコギリでもハリセンでも、大抵の物を何故か常に持ち歩いている。

成績は非常に良く、一度見たものは忘れないという特技を持つ

鳥本「とまあ大体はこんな所だな。まあ、作者の技量不足によりちよくちよく修正…もとい変更がなされるからちよくちよく見てやってくれ。今日のところはここまでだ。じゃあな」



作者&鈴音「って俺たちの最後の台詞は!？」

旅人「どうやら無いみたいだ…」

ページ裏

キャラ紹介！（後書き）

どうか…感想を…

あ、企画募集企画ですが…『人気投票』や『質問コーナー』等の定番の企画でも全然構いませんのでどんどん送ってきて下さい。お願い致します

10ページ目

死闘！鍋の巻！（前書き）

はい、今回のサブタイは軽くジョークです  
…うう…良いサブタイが思い付かないよう…

「うーん…」

どうも、鈴音です

俺は今、とある事で真剣に悩んでいます。

…さあどうするべきか、この選択が今日の1日…いや、一年…いや、一生を左右するかもしれない。

こつちか？いやいや、そう安直に決めてはいけない。もっとじっくり奥深く、そう、海の底…深海の地面よりさらに深い深い所まで考えなければ…たった一つの選択。しかし、この選択が後々にどう左右するのか分からない。だから考えなければ、山よりも雲よりも宇宙よりも高く…あれ？宇宙って『高い』という言葉を使うのか？まあいいや、それは些細な問題。この選択を早急に決めなければ…しかし、決められない。決断出来ない。くそつ、誰か俺にこの選択を決断する勇気をくれえつ！！この選択でいいのか？間違いなのか？

それは俺には分からない…だからこそ迷う…どうすればいい…どうすればいいんだああああああああ！！！！？？？

「あれ？鈴音。何を悩んでいるの？」

「凜歌…頼む！夕飯はキムチ鍋か、豚カツか選んでくれえ！」

「なにその、全く持って共通点が無さそうで微妙にありそうな二つの選択肢!？」

そう、俺が選んでいたのは今日の夕飯だ！

だって本当に一生を左右するかもしれないとても重要な選択肢だろ

!?

だってなあ、今日の献立次第で、死ぬ直前に何を食べたのかが決まるかもしれないんだぜ!?

あれ?死ぬ直前に何を食べたかなんて、さして重要では無いだって?

.....と、とりあえずスルーをお願いします

「うーん、でも私は鍋のほうがいいなあ.....」

「鍋...か。ふーん...」

「だってね。今日はどうせなら、友達になった記念に皆も呼んで鍋パーティーでもやったらいいと思って...」

凛歌はこういう時には非常に良い提案をする。当然俺は賛成だ。こんな楽しそうな事...断ると悪役に決まってる。例え断った理由が、金が無いという、とってもリアリティーに溢れ過ぎた言葉でも

「む、成る程。それにクイズとか罰ゲームとかを加えると中々面白そうだな」

「ああ、確かにそれは面白そう.....」

.....つて鳥本お!?!?.....」

俺が頷こうとしたら、隣にまさかの鳥本が居た。つて居たのか!?

「ど、どこからどうやって入って来たんだお前は!?!?」

「ふ、そんなのは簡単。ピッキングで不法侵入だ」

「いやそれは犯罪だろお！？って不法侵入ってちゃんと自覚してたのか！？」

「まあとりあえず落ちつけ。俺が不法侵入したって話だけだろ？実際に俺はお前たちに害は与えていない」

「いやいや、不法侵入しただけってそれ自体が問題なんだ！」

「まあ、俺とお前は親戚同士なんだ。幾らでも俺は弁明できる。…まあピッキングで不法侵入は嘘だけだな」

「う…ぐ…何て卑怯な…って嘘なのかよ！」

「まあ普通に正攻法で旅人に入れてもらったんだがな」

「へえ…ってアレ？旅人は？そういうえば、さっきから見て無いんだけど…」

「ああ、旅人なら庭でメルモフの世話をしているぞ」

「ここで来たか！メルモフ！」

「…いや、すいません。ちょっと読者の方々には分かりませんでしたね。はい。」

いや、メルモフという名前が出るのが結構久しぶりなもので、どうにもこうにも…本当にすみません！

「…で、とりあえずその鍋パーティー、俺が手伝おう。金が足りないんだろ？」

「!?!」

す、鋭い…この人。心眼でも持っているのか？

「というわけで資金提供は俺がさせて貰う」

な、何て観察力だ…コイツ。畜生。何となく気に入らないけど、まあ手伝だって貰う他に無いだろう。これは予想以上のスポンサーがついた。

……………ヤバい。何か欲が…

\*\*\*

「よおし、出来たぞー!」

「美味しそうッス!」

「鍋か…久しいな」

「はは、旅人。お前は鍋なんて作れないしな」

「鍋パーティーに招待してもらって最高や!食費が浮く!」

「本当にありがとう、鈴音」

「む、キムチ鍋に味噌にこみ、博多の水炊きや牡蛎鍋、定番の醤油だしで味付けしたすき焼きもあるな」

「うん、美味しい!」

「ちつ、お前には料理の腕前だけは勝てる気がしねえ！」  
パーティーが始まってしまった。

…うん、所々思いつきり本音が見え隠れしてて、ボコしたくなつてくるけど、まあ喜んでくれて何よりだ。血の涙を飲み込んで耐えよう。

ここに集まったメンバーは、俺、凜歌、鳥本、武士子、魅麗、響、聖鳴、リズミア、旅人と、かなり多い。でも俺の家は広いからまだ結構余裕がある。

それに大鍋もかなりの数と種類があり、余らないか心配だ。

……………肉だけは貰う！

「うおおおお！！！！肉は貰ったあ！」

「させるかあつ！」

「あ。聖鳴！箸を箸で弾くやなんて行儀悪い！ってそう注意されながら食べるなあああああああああ！！！！」

「鈴音、よそ見している、お前が悪い！」

「ってあああああ！！？まだ食うのかお前！？」

「こっちは育ち盛り。性欲盛りの高校生でい！」

「お前どこの人！？てか性欲盛りはお前だけだあ！」

「ってちよつと待て！目潰しは流石に駄目…ぐわあああああああ  
あー！！！！」

よっしゃ！まずは一人潰した！



え？こんなのパーティーじゃない？違うな。鍋パーティーとは……  
血肉湧き上がる死屍累々の死闘だあ！！！！

「む、鍋パーティーとはそんなことやってもいいのか…だったら俺も…」

「おい旅人。お前何をやるうとしている」

「へ？いや普通に鍋パーティーをな…」

「剣を構えるのは鍋パーティーに必要なことだ。緑！コイツを危険人物として連れていけ」

「はい。鳥本様！

…『ピー』しますよ旅人様」

そして旅人は青ざめた顔で緑さんに連れ去られていった。何やら放送禁止用語が聞こえたような気がしたけど気にしないようにしよう！うん！

これでまたライバルは一人減った……

「そついえば、魅麗。こういう鍋パーティーには漫才がつきものなんじゃないのか？」

「はっ！そついえばそつやな！早急にネタ考えんといかんわ…」

「僕も協力するよ。魅麗」

これで、魅麗と響の2人は落ちた！

ちなみに今回の鍋パーティーの代金は全て鳥本もち…よってこの鍋は食べれば食べるだけ得！こんなに沢山の鍋、普段は食べることが滅多に無いから、この鍋は俺と凜歌が貰う！

「さて…それでは俺も…おい、何故鍋を遠ざける？」

鳥本が箸を鍋に伸ばそうとした所で鍋を遠ざける

「ほう…見る様子だと、大方『こんなに贅沢な鍋は滅多に食べれないから独り占めしよう』という考えか…」

「っていきなりバレバレ!？」

この人…とんでもねえ洞察力だ!

「ふ…そうはさせんぞ。お前に鍋は食べさせん」

「鍋奉行になつたのは俺だぞ!？」

「その前に資金提供したのは俺だが？」

「うぐ…ならば実行使!つてあれ?さっき俺が奪い取った鍋はどこへ行った？」

「ふ…さてな。俺は知らんぞ」

「1」の野郎!」

「それよりもいいのか?向こうの方は食べ終わったみたいだが」

俺は鳥本と同じ方向を向く

「1」ちそうさま!美味しかったー」

「自分もこの辺にしておくか…」

見ると向こうでは、凜歌とリズミアが食い終わっていた  
むむむ…アイツらだけで、家族用の大鍋を2つも…ヤバい。残って  
いるのは1つだけだ  
これは死守しないと！

「さて、貰うか」

「ちよつと待てえ！貴方は金持ちなんだから、普段からこれ以上に  
豪華なものとか食べてるだろ！？だから普段こんなに贅沢なものを  
食べていない俺に譲るべきで…」

「…まあ確かにな、だが、俺の目的は別にある！」

「な、何だとお！？」

某悪役つばいな鳥本！

まあ俺もそれに乗っただけどさ…

「悲しむ皆の面白い顔が見たいんだ！」

「コイツSだあああ！！！」

何だよコイツ！？酷すぎるぞ！？よりによって全部独占しようだな  
んて…まあ俺の事は棚に上げといて下さい！お願いします！  
……………は！後ろから殺気！

「鈴音え…さつきはよくも…」





「この鍋、色々な種類や具やらが入っていて本当に美味しいッス」

鳴海武士子、彼女であつた…

そう、前回で垣間見た通り、彼女は途方も無い大食らい。  
ともなると、そこから導きだされる結論は一つ

「うーん、これで鍋は8つ目ッスけどまだまだ足りないッス…  
あれ？皆、そんなに気の抜けたような体勢でどうしたんスか？」

「もう放っておいてくれえ…」

それが、俺たちの心からの叫びであつた

10ページ目

死闘！鍋の巻！（後書き）

あ、ちなみに次回からは更新が比較的遅くなるかも…

11ページ目 古代の爆発！でも不発？（前書き）

うう……すいません……全く納得の出来ない完成度で、話自体も短くて、コメディもほとんど無い話ですけど……どうぞ。見捨てないで下さい



## 11ページ目 古代の爆発！でも不発？

「うーん…ん？今日は豚バラ肉が安いね…買おうかな？でもそれじゃあ今日予定していたカレイの煮付けはどうしようか…？」

あ、どうも。僕視点になるのは初めてですね。蓬菜響ほうさいひびくです。

今、僕はこここのスーパー…『田中さん』で今日の夕食の買い物をしている最中です。

…決して『田中さん』は人の名前ではありませんよ？スーパーの名前です。こここのスーパーは品揃えが豊富で尚且つ安く。僕のような貧乏学生にとっては、毎日のようにお世話になっているスーパーです

「まあいいや。冷蔵庫で保存しておけばちよつとの間はもつだろうしね」

「よう、響じゃん」

すると、僕の背後から聞き慣れた声が聞こえた。僕の…新しく出来た友達だ

「やあ、鈴音」

僕の背後からやってきたのは槍館鈴音。妙に馴れ馴れしくて、まるで古くからの友達みたいだけど、実はつい最近…ほんの少し前に学校で知り合った友達。

こんなところで友達と出会うのは初めてだ…

「いやー奇遇だな。まさかこんな所で会うなんて…」

「うん、そうだね」

…鈴音はこのスーパーに良く来てる？」

「ああ、まあそうだな。買い物は基本的に俺の仕事だし」

「そういえば鈴音の家族ってどうなの？」

僕はふと鈴音の口振りからふと思って、聞いてみる  
そうすると…鈴音が一瞬だけ寂しそうな顔を見せた

…どうしたんだろう？僕は鈴音にとって聞かれないことでも  
聞いたのかな？

ま、まさか……………

「既に死んでる。二人ともな。」

おっと、そう申し訳無さそうな顔するな。あんな、ろくでなしの親  
…死んで当然だ」

鈴音はそう言ってる…でも、顔はまだちょっと何処と無く寂しそう  
だ…悲しいとかではない。ただ寂しそうな顔だった…

「そ、そういやお前の家族はどうしたんだ？」

「ああ、僕は一人っ子で兄弟はいないよ。それでいて、両親は二人  
とも…海外で考古学者をやってる。子供を一人放りっぱなしでね。  
…まあ、中学卒業式の時には流石に来てくれたよ。それ以来は会っ  
てないけど…」

いくら放りっぱなしにされていても、両親がいる僕と両親がいない  
彼とは全然立場が違う……………両親の事を聞いた僕が悪かった…

「へえーそうなのか。考古学…か…」

お。でも彼は両親とかに関わらず、考古学の方に興味を示してきた。…きつと、これは彼もこの話は嫌なんだろう。よし、僕も頭と話を切り替えよう！鈴音の両親には触れないようにしてと

「うん、ウチの両親がよく世界中で手に入れた文献やら興味深いものを仕送りと一緒に送ってきてくれるんだよ」

「へえ…そうなのか…もしかしたらそこにメルモフとかいう言葉は出てきたことは無い？」

「うーん…メルモフ…？流石にそれは無いね…」

あ、良かったらウチにおいでよ。不思議なものがたくさんあるんだ」

「あ、ありがとう。その誘い…乗ることにする」

そうして、鈴音がウチに来ることになった

「へえ…ここがお前の部屋かー」

「まあ、マンションだけどね」

僕の家はマンションの5階にある一室だ。

本当に家もあるにはあるけど、とりあえず僕はここで一人暮らしをしている。部屋の中は一言で言うと、異様…なのかな？玄関から入ると、いきなり巨大な戦国武将みたいな鎧兜とご対面をする。

居間には謎の彫刻やら美術品やらが飾っており、一昔前の古い書物

を並べてある本棚がある

「これはまた随分と趣の感じられる……」

「はは、素直に古臭いって言えばいいよ。今お茶を入れるからとりあえずソファアームにでも座っててよ」

僕はお茶の葉をきゆうすに入れて、ポットのお湯を注ぎ入れる。

「……あ、そうそう。さっきメルモフとか言ってたけど……何なの？」

「あ、い、いや何でも無いんだ」

明らかに動揺してる。

でも僕は鈴音の言うことを信じよう。これは何でも無いんだ。そう僕はお茶を机に置きながら思う

「それにしても……本当に色々なものがあるな……」

「あ、触らないで。壊れたり、歌ったり踊ったりすると困るしさ」

「歌う！？それに踊るって一体どういうことなんだ！？」

「うーん……ほら、ウチには訳が分からないものがたくさんあるからさ。前にそんな事、実際にあったしね……それだけじゃなくて時には急激に老化したり……」

「おいおいおいおい！！！！一体どれだけ危ないんだ！？お前の家は？冗談だろ？」

「まあ、とにかくうかつに触らないで。危険だから」

「……ごめん。既に遅い」

「ってまあ、何の反応も無かったみたいだし、きっと大丈夫だよ。そうそう起きることじゃあ無いし……」

『後、30秒で爆発します』

…へ？

どこからともなくそんな声が聞こえてきた…もしかしたらこれって…今、鈴音が何かをいじったせい？

……な、なにやらすごく危険な予感が…

「ここに来て爆発オチなのか!？」

「てか鈴音。オチって何なの？」

「いや…まあなんとというかアレだ。話の区切りっていつか…」

『後、10秒です』

「ってたった残り10秒かよ!」

「……はあ…僕はもう潔く覚悟を決めるよ」

「って響!?諦めるなあ!」

『3…2…1…』

「だってもう手遅れだし」

「…俺も覚悟決めるか」

『O—』

うわっ！爆発する！僕は腹をくくって、目をぎゅっと閉じる

.....

.....

.....

.....

あれ？爆発

は？

『ピー不発です』

「…へ？」

「って結局爆発しないのか！」

「そりゃあまあはるか古代の物だから不明な点がたくさんあるけど  
…まさかこんなことになるとは……」

「…うーん……と、とにかく考えても仕方がない。考える事は他にもある」

「……ど、どつやって鈴音に弁明しようか……出来ればこんな異常な事、隠したい。でも下手に隠そうとすると疑われる。だから僕は冗談だと思ってくれるようにあえて歌うとか踊るとか言ってたんだけど……今回はどつしめっ」

頭を抱えて真剣に悩む僕だった

11ページ目 古代の爆発！でも不発？（後書き）

評価、感想を心よりお待ちしております



12ページ目      イクスプロージョン!? (前書き)

うっ…評価、感想下さいませ…そうすると励みになります

俺の名は旅人。

俺は、いつものように朝早くに起きて、メルモフを洗ってやっていった。

「もふー」

「そうか、そんなに気持ちいいか…」

メルモフは全身が何やらもふもふとした毛に覆われたふわふわの生命体だ。はつきり言おう、モフモフはとてつもなくモフモフだ。モフモフはそれ以上それ以下のモフモフ以外、何者でも無い！

とまあ、俺が言いたかったことは…モフモフ最高！ということだけだ。モフモフはとっても気持ち良い。

俺はメルモフを一心不乱にモフモフモフモフしてやる。気持ち良い…夢心地だ…最近の様々な動乱で疲れた体を休めてくれる…

「おーい。旅人！朝飯だぞー！」

俺が居候させて貰っている家の家主、鈴音の声が一階から聞こえてくる

…でももつとモフモフしてたい。一度はまったら辞められない。麻薬にも似た感覚だ…

「もふー もふもーふふもふ」

う…何てメルモフは可愛いんだろ…永遠にモフモフしていたい。モフモフ……く…何て強烈な願望が生まれるんだ…モフモフ…

でも、そういう訳にもいかないだろう。俺はメルモフを連れて、立ち上がり、居間に向かう

「おはよう。旅人」

「おはよー!」

「あぁ……………おはよう」

鈴音と凜歌に挨拶する

正直、俺は挨拶というのが苦手だ。

今まですつと一人で旅をしてきたせいなのかは知らないが、挨拶をすることに對して、何の必然性も見つけられない。所詮はただの定例系ではないか。

「もふー」

「あ、メルモフ…可愛い」

「もふも?もふー!もふもーふもふ」

凜歌がメルモフを奪いとってモフモフする

むむむ…そのモフモフは俺だけのものだ!と言いたいが……そんなことは……大人気が無い。

「それじゃあ、食おうか」

「いただきますーす!」

「む…何だこれは？」

俺が指を指したのは…何やらネバネバとした豆であろうか？とにかく茶色い豆らしいだ、はつきり言つと腐ってる。臭い

「ああ…それは納豆つて言つんだ…まずは醤油をかけてかき混ぜてご飯にかけて食べるんだ」

「かき混ぜるか…よし」

「いや待てえ！何で納豆をかき混ぜるためにお前は剣という人を斬殺するための武器を取り出してるんだ！？」

「違うよ鈴音。人を刺殺することだって出来るよ！」

「そういう問題か！？凜歌！」

「こんな腐ってる豆が食べれるはずが無い…それなのに食べる等と言つ虚言を…食費を浮かせるために、腐ってる物を出して尚且つ俺を騙そうとしたな？」

「ちよつと待てえ！確かに食費を浮かせたいのは事実だけどさあ！でも納豆というのは最初から腐ってる食べ物だから！それに俺が嘘をつくような奴に見えるか！？この目を見てくれ！」

「……………すまない。嘘をつくような奴に……………見える」

「……………おおいー！？」

「腐っても食える豆は存在しない！  
チーズとかはカビが生えていても食えるし、シュールストレミング  
はサバを発酵させたものでも食えるが…豆を発酵させるなど聞いた  
事が無い！」

「なんで世界一臭い缶詰と評判のシュールストレミングの存在を知  
つてて納豆の存在を知らないんだ!？」

……あ、そうか、シュ  
ールストレミングは世界一臭いと言っても、仮にも世界一だから外  
国の人でも知ってるか…ってそんなこと考えてる場合か!？俺！」

「…」

「ってちよつと待て待て待て！」

何故お前は無言で納豆を持ってこっちにサイドスローで投げる体勢  
に!？

納豆を顔面に投げつけられるのは嫌だぞ!？いくら食品と言っても、  
食品だからこそ駄目じゃないか!？  
食べ物粗末にするな!！」

「…とりあえず食え」

「命令系ツスか!？お前一応居候だよな!？」

「ふむふむ、鈴音。お前はどこの武士子…もとい体育会系だ？」

「って鳥本!？どつやってこに!？」

…俺が鈴音の口の中に腐った豆をねじ込もうかとしていたら、鳥本

がソファーに座つといた。  
全く…鳥本、コイツは…

「む、当然のように不法侵入だ」

「またもや不法侵入かよ!？」

「またもや？鈴音、お前は馬鹿じゃないのか？俺は前回、不法侵入はしてない」

「でも前回、不法侵入とか言ってただろ！

…あれ？でも確かアレって嘘だったような…いや、でも…」

「やはり馬鹿だな」

俺もそう思う、まあ口には出さないが

「馬鹿馬鹿言つな！馬鹿って言ったほうが馬鹿なんだぞ！」

「一体どこの言い伝えた。それに俺は事実を言ったまでだ」

「ひでえ！」

鳥本…口喧嘩が強いな…まあ鈴音が弱すぎるせいもあるだろうが

「さてと…すまないがさっきの話は聞いていたぞ。旅人、鈴音の言  
つてることのほうが正解だ」

「む…そんなはずは無い。腐った豆をそのまま食べるなど、神界  
や魔界でも聞いたこと無いぞ、お前も騙すつもりか？」







12ページ目      イクスプロージョン!? (後書き)

はい、爆発落ちですね。前は爆発しなかったけど(笑)

鈴音「うっ…酷い目にあっただ…」

そう言っちなよ鈴音

では、正体不明でした!

13 ページ目   メルモフ捜索部隊（前書き）

うーん、更新ペースが戻ってしまっただけ…  
あ、後今回の話は長めです



「ちっ…仕方がないな」

「舌打ち!？」

うっ…酷い目にあつた…鳥本は怖い人だ…

それに今日は幾度無く不幸に見回れてる。不法侵入されるし旅人に斬りかかられるし人望無いしガス爆発するし死にかけるし金無いし…最後は微妙にずれてる気もするけど

「さてと…む、誰かがいないような気がするが…」

鳥本が言う。

誰か修復作業がめんどくさくて逃げやがったか!?

鳥本と俺は当然のようにいる。

旅人は…いる。凜歌も…いる。

うーん…どうやら全員居るみたいだ。鳥本の気のせいかな?

「…メルモフがいない」

旅人が言う

「…へ？」

メルモフって確か、あのモフモフでフワフワした謎の生命体で、旅人のペットだったよな？

「む…確かにメルモフの姿が見えないな…」

鳥本が辺りを見渡す。俺も鳥本に次いで辺りを見渡す。

…確かにいない

「うーん…もしかしたら誰かモフモフ愛好会が連れ去っていったんじゃないのかな？」

「凜歌…モフモフ愛好会って何だよ!？」

「モフモフ愛好会は…モフモフを何よりも愛し、何よりもモフモフで絶対にモフモフで、とにかくモフモフで、モフモフな会だよ!きつと!」

「って結局は想像かよ!？」

「…モフモフ愛好会は実際に存在する…」

旅人が何やらおかしな事を口走ったが気にしないでおこう  
何か会員証やら出してるけど見なかったことにおこう!うん!

「ふむ…可能性としては先ほどの爆風で飛ばされた確率が一番高いな…だとすると危険だぞ」

すると、鳥本が流れを断ち切って真剣に話をする…  
まあなんだかんだ言っつて、この人は結局は物事を一番真面目に考えてる人だな。

「…へ?モフモフでフワフワ何だし、飛ばされたとしてもフワフワと浮かんで大丈夫何じゃ無いのか?」

「鈴音…お前はやっぱり馬鹿だな」

「馬鹿って何だよ！？馬鹿って！」

馬鹿って何回も言われているような気もするけど、一応こう言っておく。何か馬鹿というイメージが定着しそうな気がするから。そう、決して俺は馬鹿な訳では無いんだあ！

「鈴音！前にも同じような光景を見たような気がするよ！？」

「ワンパターンだな……」

ぐはあっ！

……せ、精神的ダメージが……特に最後の旅人の台詞が心にズサツと突き刺さった……

「鈴音。よく考えてみる。飛ばされる事自体はさしたる問題ではないけどな……厄介なのはその後だ

そもそも……あんな生物を見た奴らが、放っておきにすると思うか？大抵は逃げ出すか、警察に連絡をする。もしくは捕らえる奴らもいるかもしれない。だがまあここまではまだマシだ。俺の権限で揉み消せる」

一言。貴方は一体どこのアメリカ大統領だ？どんだけ権限あるんだよ……

あ、アメリカ大統領ならアメリカか

「しかし、厄介なのは売り飛ばそうとしたりする奴らだ

……下手すれば裏社会に持ち込まれて、実験台か……流石に俺でも裏社会の最深部には権力が効かないしな」

……それって裏を返せば、裏社会の浅い所には権力が効くということ

とか？

…なんか軽く怖くなってきた…俺みたいな実に普通な一般ピープルがどれだけ偉い人と話しているんだろ…

まあ、それはとりあえず置いて、鳥本の言ってることは実に納得できる

……………ともなると俺がやるべきことは一つだ

「メルモフを捜す」

「…ああ、それが何よりも先決だ」

「私も協力するよ！」

そうしてメルモフ捜索隊は結成されたのであった。

…まあ、ただそこら辺をフワフワしているだけかも知れないけど、むしろそれがありがたい。

俺たちは決してメルモフが捕まったりして無いことを祈るばかりだ  
おっ？何か軽くシリアスマードを感じさせるな

「む、俺の人工衛星からの情報によると、近くの電柱に引っ掛かっているみたいだな」

「って今のムードを返せえっ！！！」

でも結局はこんな落ち

.....あれ？終わらない？

「もふー!?」

「く…メルモフがまた風で飛ばされた…」

今、俺たちは電柱の真下。メルモフを回収しようとしたら突然、猛烈な風が吹いて、メルモフが吹き飛ばされていったく…不味い…姿を見失っちゃった……

俺たちはメルモフが飛ばされた方向に走っていく…ん？あれは…?

「よう、鈴音。皆揃ってどうしたんだ？」

「すまん聖鳴。今は説明している時間が無いんだ！」

目の前に見えたのは聖鳴。でも俺はちょっと断って脇を通りすぎようとする

「ちえっ…そうか…せっかく俺がついさっき、そこら辺を飛んでいたモフモフでフワフワとしている実に珍しい生物を捕まえたっていうことを自慢しようと思ったのにな…」

「もふー!!」

「ってそれだあっ!!」

方向転換!

ターゲットはメルモフを脇に抱えるようにして持っていた聖鳴だあ



っ！

「って何でいきなり襲いかかる!？」

当然の報いだあ！お前が言わなかったら無駄に走るところだったんだからなあ！

「…メルモフを捕まえる奴は殺す…」

って隣の旅人から感じる殺気がもの凄げえ！

何だよお前!？捕まえたりするだけで殺すのか？だったらメルモフを殺したりしたらどうなるんだ…？

………うっ、想像するのが怖くなってきた

「ふおっ!？」

「モフ!？」

すると、聖鳴があまりの旅人の殺気に怖くなったのか、手を離れた。すると、メルモフが風に乗って飛ばされた。しかも既に遙かに上空へくっ…そして聖鳴が逃げ出しやがった…そりゃあまあ普通に考えたら逃げ出すよなあ？だって逃げないと旅人に殺されそうだもんない…あれ？そっぴや明日は学校だ。学校に行けば同じクラスだし、当然旅人と会う。その先には………

「なあ、旅人。殺したりするのは止めてくれよ？」

「…そうか…だったら………99%殺しは？」

「99%ってほとんど変わらないから！死ぬって!！」

「9割9分殺しなら？」

「それは変わってねえ！99%と同じだあ！」

すまん。聖鳴。旅人の怒りは俺には抑えられそうな気がしない。

……………冥福を祈る！お前の事は3年くらい忘れない！

「あれ？」

…鈴音。もうあんなに遠くに行ってるよ？」

凜歌の言った通り、既にかなり遠くへメルモフが飛ばされている。

「メルモフを捕まえたりする奴は…例外無く殺す…」

…しかし、まずはメルモフを追いかけないとな」

とりあえず、もう聖鳴の事に関してはいいか。どうせアイツの死はもはや決定事項だ

「…ふむ…なるほど…次に飛ばされたのは喫茶店『カイ』の方角か」

「喫茶店『カイ』って確か、つい最近オープンしたばかりの喫茶店だったよな？」

「ああ、あそこのモンブランは最高だぞ。栗の甘味がしつかりとじていて、生地も『パン屋のパン』では無く『ケーキ屋のパンケーキ』だったぞ。なおかつ、一番下の土台となっているタルトは栗の甘味をさらに引き立てるための…」

鳥本の言ってることがはっきりいって、全く持って分かりません

だってあんまりにも専門的…もといマニアックなんだからな何だよ  
この人？ケーキマニアかあ？  
何だか鳥本理事長のことが良く分からなくなってきた

\*\*\*

「く…一体どこだ…」

今は喫茶店『カイ』周辺を探索途中。

さつきから必死で探しているけど、メルモフが見つからない。一体  
どこだ…

「あ、凜歌ちゃんに鈴音に旅人に鳥本やないか！」

「こんばんは」

「あ、魅麗に響じゃないか」

俺たちがメルモフを探していると、魅麗と響が現れた。

今日はよく知り合いに会うな…まあ、普段知り合いが少ない俺から  
見ての話だけだ

「二人でどうしたんだ？…あ、そうか。デートか」

「何言つとるんや？ウチと響はただの漫才コンビや！ウチが興味あ  
るのは女の子だけや。」

それにそれはこっちの台詞や！

どうして4人でこんなところろついでるんや？」

「うーん…なんというかまあ…秘密で」

「気になるやないか！」

「まあまあ、魅麗落ち着いて」

「響！お前は興味無いんか？」

「うーん…無いよ」

「ってないんかい！」

「…あ、そういえばメルモフ見なかった？」何やら、漫才が続きそうなる所を凜歌が無理やり遮って二人に聞く…

てか普通メルモフって言われても、分からないだろ！

「何やそれ？何やらモフモフでフワフワしている謎の生物みたいな名前やな」

てか分かつちゃったよこの人！？

「まあそんなところだ…」

「てかほんまにそんな生物おるんか？」

……  
まあええ、もし見つけたら伝えとくわ。ウチの喫茶店にも一応、張り紙もしといちやる」

「ああ、ありがとう……喫茶店？」

「そや、ウチのおとんは喫茶店『カイ』ってところを経営してるんや！  
良かったらウチでバイトでもしてみんか？」

へえー魅麗の家は喫茶店なのか。

てつきりお笑い芸人、もしくはたこ焼き屋だと思っていたっけ  
だって関西弁の家ってそんなイメージしか無いんだもんな

「ちなみに僕はここでバイトをしてるんだよ。どうにも最近金欠気  
味だからね」

「うーん…考えとく」

「給料は弾んでおくで！時給900円や！」

「いつ頃来ればいい？」

「って決めんの早いで！？即答やないか！」

当然じゃないか！だって今、俺の家は旅人が居候になったことによ  
り金欠だしな！

時給900円…なんて魅力的な数字なんだ。夢のようだ！

「ねえ、水を差すようで悪いんだけど…旅人と鳥本はもう行ったよ」

すると、響が言ってきた。

…あれ？そういえば俺たちは何をしに出てきたんだっけ？

「…はつ。そ、そういえば忘れてたあ！俺たちはメルモフを捜して  
いたんだ！」

「ああ！？確かにそうだったね鈴音！」

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。

つい、微妙に和やかな会話になっていたもんだから、今一瞬すつかりメルモフの事を忘れていた！

「ど、どうしよう鈴音…」

「どうしたって二人を追いかけるしかないだろ…」

くそう！まずは鳥本がいないと、メルモフの大体の場所すら分からないから俺たちは問題外だ！

しかもあの二人は無駄に足速いからな…追いつけない可能性も十分にある

うう…どうすればいいんだあ…考える！頭を捻りちぎってでも考え出すんだ俺え！

「キミたちが捜しているのはこの生物のことかい？」

「もふー！」

「へ？」

俺が決死の思いで頭を捻り契ろうとしていた所で、目の前に女の子が…いた。

その女の子の年齢は15くらい…俺と同年みいだ。

髪はウェーブのかかった透き通るように赤い長い髪。目はパツチリと見開いて、顔の輪郭も整っている。

服装のせいなのかボーイッシュな雰囲気をしていて、それでいて綺

麗な人だった。何と言うか：魅力的。男にも女にもモテそうな感じのする

そして、そんな女の子の両手に持たれていたのはメルモフだった

「メルモフ!？」

……………ええと、どうもありがとうございます!」

「いやいや、別に何てことは無いよ。ボクはついそこで見つけただけだし

それより…キミの名前を覚えてくれないかな?」

「へ?名前ですか?良いですよ。俺の名前は槍館鈴音です。こんな外見ですけど一応、男です」

会っていきなり名前を聞くなんておかしな奴だと思いつつ、普通に答える。

「そう…槍館君か…」

名乗ってくれたんだしたらボクも名乗らないとね。

ボクの名前は…式城夢音しきじょうむねって言うんだ……………宜しくね。メルモフは返しとくよ

「もふ!？」

「おっと!」

俺がメルモフを受け取った瞬間。猛烈な風が吹いて、メルモフが飛ばされそうになるところを俺はすんで捕まえた

「あ、すみません。貴方は……………」

そして、俺が夢音のほうを向き直したら……  
……すでにそこには誰も居なかった。そう、まるで風が吹いたのと  
一緒に消えたような……そんな感じ

\*\*\*

今、二つ目の『音』が聞こえ始め、交差する。  
始まりを告げる前奏曲が  
終焉を司る鎮魂曲なのか  
はたまた二つの音の行方はどうなるのか  
その答えは誰も知らなかった



### 13 ページ目 メルモフ搜索部隊（後書き）

今回は色々と…唐突な話でしたね。はい

こんな旅人日誌ですが、見捨てないで応援して下さい！宜しくお願  
いします！

14 ページ目

カオスな日常。そして立ち込める暗雲… (前書き)

うーん、今回の話は色々と納得のいかない……どうか見捨てないで  
下さいまし！

うーん…昨日の女の子は一体何だったんだろう？俺は考える。思念する。

昨日会った女の子…確か夢音とか名乗ってたっけ。彼女からは不思議な何かを感じた…うーん、何だろうか？まるで向こうは俺のことを観察してるような…もしかしたら修行時代に起因しているのか？それとも中学時代か…  
つとまあ考えても結論が出るわけ無いか…

「ぐぎゃ ああああ！！！」

「…昨日のメルモフを捕まえてくれた恨み…晴らしてくれよう」

「怒った旅人様も素敵！」

「ちよつと待てえ！」

旅人！お前がそんなに暴力的だなんて俺は今まで知らなかったぜ！  
？」

「さ、逆さ吊りって…い、一体いきなり何があったんだい？」

「登校早々にシユールな光景やな…」

「うーん、美味しいツスね！このハンバーガー」

「ふおっ！武士子。あんた相変わらず食べ過ぎやで！？」

「そうそう、ハンバーガーだけじゃ健康に悪いよ？」

「そういう問題ちゃうやろ響!？」

それ以前にそのハンバーガーはどっから持って来たんや!？」

「あ、私も一ついただこ…」

「いいつスよ!」

「ますますシユール…というかカオスな光景だ…」

いきなり絶叫が響き渡ったと思ったら、リズムア先生の言った通りに教室の中ではとつてもシユールつつかカオスな光景が展開されていた。

まず女の子たちに囲まれてキヤーキヤー言われている、殺気全開フルオープンな旅人

教室の中央で旅人に逆さ吊りにされてギヤーギヤーうるさい聖鳴  
大量のハンバーガーに囲まれつつ、目の前にはシユールな光景が展開中にも関わらずいつもの様にハンバーガーを食べ続ける武士子  
それに便乗して隣でハンバーガーをつまんでいる凜歌

ハリセンを持っていつのまにやら漫才を繰り広げている響と魅麗  
その様子を第三者視点で見守る俺

止める気が一切無い担任教師、リズムア

うん、カオスだ。カオス以外の何者でもない……って

「止めて下さいよ!？リズムア先生!」

「面白そうだから断る」

「いや面白く無いとか面白いとか以前にあんた教師だよな!？あんな殺人事件が現在進行形で起きているんだから止めるよ!？」

「あー警察に任せれば何とかなる」

「警察が到着前に死にますよ!？」

「大丈夫。自分に責任は無い」

「それでも貴方は教師ですか!？」

「これが自分の教育方針だ!」

「どんな教育方針だあ!？」

ヤバい。コイツ…完全に面白がつてる。

どうすりゃいいんだ?畜生!

………まあいいか。どっち道聖鳴だし、その内ひよろりと復活しているだろう

おっと、聖鳴に酷いなんて言葉は通用しねえ。もう既に俺の頭には聖鳴⇨変態⇨生命力虫けら並の方式が成り立ってるし。その内これが世界の常識になるだろう

「鈴音!そんな所で傍観してないで助けてくれ!  
今回はマジで死にそうな予感がする!!!」

「あー何だか幻聴が聞こえるなー」

「ってスルーするなよ!?!この男女あ!」

……あれ?今聖鳴の言った台詞は何だ?男女?

女男ならまだしも男女?それって俺が『女みたいな男』では無く『



「……！」

その後、聖鳴と言う名前だった肉片が辺りに飛び散った  
あー、処理がめんどくさそうだ

「えーどうやら終わったみたいなので、遠足の説明を開始する」

つとまあ色々と考えてるうちにリズムアが遠足の説明を始めやがった  
…最低限の仕事はするんだなコノ野郎は。さっきは止めなかつたく  
せに

それにしても遠足かあ…しばらくその存在自体を忘れてたな…

\*\*\*

「春の遠足…かあ」

ここは学校の屋上。

そこにある、安全対策のためのフェンス…の上に女が一人、颯爽と  
立っていた。

制服を着ている事を見ると…どうやらこの学校の生徒らしい。

下手すれば、間違いなく命を落とす。しかし、彼女はゆつたりと自  
然体で平然と屋上のフェンスの上に立たずんでいた。しかも顔には、  
微妙な笑みが見える。恐怖心なんて一切感じて無いようだ

「ははっ、ボクが遠足だなんて初めてだよ」

一人言…にしては声が大きい。しかも、誰かに話しかけているようだ  
……つと彼女がそこまで言い終えた後に、どこからともなく……男  
が現れた。

その男は黒と白のモノクロのマント…でその身体を覆い隠している。

白い単髪をし、顔の右半分は普通の…どっちかと言うと良い方の顔つきをしている。そして、その顔の左半分は黒のまるで人を嘲笑しているようなデザインのなされた仮面を被っていた。

「それは良かったナ。まあ君が学校に行くだなんて驚いたけど、こつも簡単に入学出来るとは思わなかつタ」

男はゆっくりと言う

「ははっ、高校と言うのは試験をクリアさえすれば簡単に入れるものだよ」

「そうなのカ…？」

…で、僕をここに呼びゆせた要件はなんダ？早急に答え口」

「ああ、言うのを忘れてたね……………ボクの部下を一人か二人、呼んできて欲しいんだ。出来れば春の遠足に間に合うように」

「そうカ？よし分かつタ、任せてオケ」

「ああ、頼むよ。」

遠足で面白いことになりそうだからさ」

「全ク…お前は明らかに楽しんでるナ？」

「ああ、楽しんでるさ。だって一生に一度しかない学園生活だもんね」

「…そうカ。まあこちらとしてモ最終的にきちんと殺りさえすればどうでも良いしナ……………」



「じゃあ期待してるよ」

「そんな事で期待されても困ル…まあ、出来るだけ頑張っておくヨ。  
夢音」

そして、男は音も立てずに煙と化して消えていった……

はい、今回の話は一言で言うなら繋ぎの話ですね。はい

さて、これからも『旅人日誌』を宜しくお願い致します！評価感想下さるとありがたいです！

15ページ目

遠足の始まりは戦いの始まりと共に…（前書き）

うう、更新遅れ気味だ…

「ふあああ…眠い…」

「鈴音。今日は遠足だよ！？そんなにテンション低くていいの？」

「遠足なんてもん一体何の利点があるんだよ…授業中だったら幾らでも寝れるのによお………」

「ええと、遠足の利点は例えば………」

……授業が無くなるとか…他には授業が無くなるとか、授業が無くなるとか…かな？」

「って授業が無くなるくらいしか利点は無いのか!？」

「他にもあるよ！クラス内での交流を深めるとか………」

「いや、そっちの方を先に言えよ!？」

「相変わらずお前らは見事な漫才コンビだな」

「聖鳴…俺は好きでツッコんでんじゃねえ!」

と言うわけで、今俺たちは第一学年、春の遠足の最中です。

遠足かあ…中一の時以来だなあ…それ以外は小学校の時も含めて一切、遠足になんかに来てなかったような気がする。

おっと、説明しないとな。今俺たちはいつものメンバー集まって一緒に歩いている最中。基本歩く順番もクラスも関係無しで、皆で好

き勝手にグループを作って歩いている。

俺たちの学校：桜道高校は基本的に生徒の自主性を尊重する…と言う名目の完全な放任主義だ。さらに先生どもでさえ非常に自由奔放リズムアがその例だ：本当に大丈夫か？この高校。まああの理事長のせいもあるんだろうことなあ…

おっと、話がそれちまった。遠足の行き先は山。要するにハイキングだ。

ここの山は『左野山』<sup>あひらのやま</sup>とか言う名前の、安直に付けられた漢字に適当な当て字をしたような山だ。

左にあるから『左野山』ってマジで安直なネーミングだよな？責任者には出てきて欲しい。そして改正を要求する

でも『あてらのやま』って…絶対初見でこう読む人はいないと思う。居たら神だ。俺はその人を尊敬して崇める！そして祭壇に生きながらにして奉る<sup>たてまつ</sup>

「いや、それって人柱なんじゃ無いですか？」

「って武士子にツッコまれただとう！？」

終わりだ！

まさかの一番のポケキャラに心の中をツッコまれるなんて…そんな馬鹿な！あり得ねえ！俺はもう色々と終わりだあ！

「なんか軽く酷い事を言われたような気がするッス…」

「てか何でお前は俺の心が分かる！？」

「野生の勘！」

いや、そんなVサインしつつ自信満々に言われても……それに野生

の勘っておいおい…どう対応すればいいのやら

「鈴音…お前は武士子ちゃんとも漫才コンビが組めたのか…」

「いや、さっきから言ってるけど、漫才コンビじゃねえ！」

「んな嘘っぱち、ウチは信じないで！鈴音はウチと響とで漫才トリオを組むんや！」

「って魅麗いい！？それこそ嘘だよな？」

「どうやら事実らしいよ」

「響、お前までもかっ！？一体俺に選択肢は無いのか！？」

「無い」

「そうですかー無いですかーって、リズミアてめえ！教師の癖に生徒の自由を侵害するなあああああ！！！！」

「さて、何の話でしょうかね？」

「しらばっくれるつもりか！」

「無理だよ、鈴音。リズミア先生に鈴音が口で勝てるはず無いよ」

「凜歌…無理でも挑戦する。それが男だあ！」

「そんな女みたいな顔してか？」

「リズミアてめえ！お前こそもがあっ！」

俺が反論しようと思ったら口に何か黒い物を突っ込まれた。くそっ！何だよこれは？

俺は口から取り出して確認する…と

「恵方巻き？」

そう、それは恵方巻きだった。紛れも無く恵方巻きだった。本来なら節分の日に、とある方向を向いて食べるはずの恵方巻きだった

「何故に恵方巻き！？」

「ああ！？鈴音！恵方巻きを食べてる最中に喋ったら駄目なんだよ！？」

「いや、凜歌。一つ言っておくけど。これはそういう問題じゃ無いだろ！？」

恵方巻きが何で今、ここにあったのか聞きたいんだよ！」

「…へ？節分じゃないのに恵方巻き食べてちゃいけないんですか？」

「武士子、お前かぁ！！！」

前々から気になっていた武士子の背負っている、おびただしい大きさのリュックの中身がちらほらと見える。中には…大量の弁当。水筒。お握り。乾物。お菓子等々の品だった…はっきり言おう。どんだけの量なんだよ！？もはや怖い！

でもこれで納得した…確かにこれだけの品物があるんだったら恵方巻きが一つや二つ有っても不自然ではないよなぁ…

「ほ、ほな話を変えるで。これ以上話とっても武士子の食べ物も含めて何の解決にもならへん！」

「あれ？そういえば旅人はどこ？」

「へ？」

響の言葉に反応する。確かに辺りを見渡してみても旅人の姿は無い。名前も分からない女の子たちがさっきから『旅人様どこ？』とかと言う事をほざいてる

……今気付いたんだけど、そういえば山を登っている最中に旅人の台詞を一言も聞いてない……！

「ま、まさか……」

「リズムア先生。何か知っていますか？まさか旅人は実は方向オンチとか……」

ぶつちやけ旅人が方向オンチとかあり得ないよな？

「いや、それは違う。本当は……」

……アイツは長年旅をしている間に、敵や猛獣に襲われないために、山道とかでは道無き道を行く習性があつてな……」

「アイツ、馬鹿だあつ！」

ふおつと！？つい口から心無い一言が飛び出してしまった。そんな事はない。俺は心清らかな優しい人間のはずだ！

それにしても道無き道を行くってどうゆうこと？周りに抗ってまで



アイツは道無き道に行くのか!? 一人残らず道有る道を行ってるだろ!? それなのに一人だけ道無き道を行くとは…それに敵ならまだ分かるけど、猛獣に襲われないためって…そっちの方が危険だろ!? やっぱ旅人は馬……っとまた心にも無い言葉を言っちゃう所だった

「鈴音…きつと大丈夫だ。お前を越える馬鹿なんて日本中捜しても居ねえよ。良かったな鈴音、お前が日本一だ」

「聖鳴…それは俺を貶しているのか? 称賛しているのか?」

「当然貶してんに決まってるだろ。やっぱり馬鹿……ってちょっと待てえ! その体勢は何だ? チョークスリーパーか!?  
つてむぐう!」

「お見事。流石聖鳴、正解です。さて、賞品としては…温泉へのチケットです。そう三途の温泉へのなあ!」

尚一層強く首を絞めてやる。理由なんて極単純にして明解。ムカついたから。

「ぐぐぐぐぐぐ……………ぐがあ……………  
……………がくっ……………」

あ、落ちた

「さあそんな茶番劇をしてないで、とつとと旅人を捜そうか」

「リズムア先生! 人が目の前で死にかけたのに茶番劇は酷いぜ!？」

「ちっ、生きてたか」

「……………俺って何かそこまで酷い事をしたのか！？教えて下さいー！」

聖鳴が何処かに消えて行った。多分、女の子に涙を見られたく無かつたんだろう

「…さてと、とりあえず旅人を捜すにしても…多人数で探しに行つてまた迷子が増えたら洒落にならない。

そして旅人が居ない事を他の生徒達に知られたら……………旅人様ファンクラブとかが下手に捜しかねない。だからメンバーを厳選する

とりあえず旅人が居ない事をはつきりと知っているのは

……鈴音、凜歌、魅麗、響、武士子、それに自分のみだ。よつてこの面子で捜しに行く事にする。分かったか？」

「ええ、分かりました」

一段落着いた所でリズミアがこんな事を言い出したから適当に返しておく。

ちなみにリズミアの台詞は、見た感じ今名前を挙げられた面子以外は聞いていない

…ちなみにリズミア先生の本来の口調は既にクラス内では知れ渡つてる。まあ女だと言う事は知られて無いんだけどな

「よし、決定だ。とりあえず他の生徒達は先に行かせておくから、そこで待つといってくれ」

そしてリズミアは向こうの方に向かって行った

## 旅人視点

「…この空気は美味しいな」

俺はふと呟く。今はなんとというか…道から大きく外れたところにある、崖の真ん前で眼前に広がる海と町の景色を見ながら大きく深呼吸をしていた。

「やはりハンバーガーは最高だな」

懐から出した、ちょうどこの場で食べる8個目のハンバーガーを食べながら景色を楽しむ。

…この世界も随分と変わったものだ。上から見渡すと、改めてそれが分かる。所狭しと建物が並び、非常に規則正しい道が並んでいる。人々の往来も激しく、ほとんどの者は急いでいるようだ…  
前来た時は非常に開放的な自由感が溢れていたが、社会福祉人が行き届かず、人はよく死んでいた。

今現在は非常に規則的…みんな何かに捕らわれているような感覚だ。しかし社会福祉は発達し、人が寿命を迎えずして死ぬ事は少ないしかし、決定的に違うのは『人の気力』だ。昔は何がなんでも生きてやるうという気が満ち溢れていた

…やはり時代ははるかに変わったと、そう俺は感傷に浸ろうとする…

「最後に見る風景は楽しみなさいね。今、殺るから」

「！」

その瞬間、何者かの鎌と俺の大剣との間に火花が飛び散った

「…やっぱりしつこく醜く生きてるくせに、強いわね」

「…またお前か。いきなり背後から首を狙ってくるとはな…」

俺は首にかけられようとした鎌を、その間に入れた大剣で薙ぎ払い後ろを振り向く

「だって一瞬で殺ったほうがより綺麗に散ってくれるじゃない」

そこに居たのは、巨大な鎌を手に持った女、オレンジ色の帽子を深く被っていて、ヒラヒラした服を着ている。顔は深く被った帽子のせいで良く見えない

………先日、ハンバーガーショップで対峙した女だ

「さあ、今回は前みたいにかかないわよ」

「…そうか、だったらこっちも本気で行こう」

俺は大剣を持っていない方の手にあるハンバーガーを一気にほっばりこむと、戦闘体制に入った

「さあ、美しく散りなさい」

その女の言葉は戦闘の合図となった

\*\*\*

「くんくん…んー…」

「武士子。どうしたんだ？」

俺は武士子に尋ねる

ちなみに今俺たちは集団で固まって旅人を捜している。リズミアによると、個別個別で行動すると危険だそうだ

「へ？ええつと…なんと言うべきか分かんないツスけど、最初に山に入った時とは違うおかしな匂いがするツスよ。ほら私って鼻が効くツスから！」

「本当にお前は野性的だな！？」

「くんくん…あ、向こうから何かが来るツスよ！」

「ってスルーすんなよ！」

く、見事にスルーされた…ここまで見事だと虚しい…いや、むしろ恥ずかしい…

つととりあえず俺は武士子が指を差した方を見る  
すると、がさがさと茂みのほうから、何かが出てくる。旅人か？だつたらいいなあ、そうすればこんな探索部隊もつとと終わる

「グルルルル…」

「…へ？」

何だ？今の鳴き声。少なくとも旅人じゃあないよなあ？

そして俺は目を凝らして良く見る

するとそこに居たのは旅人でも…人間ですらもなく

「グルルルル…グガアアツ！」



15ページ目

遠足の始まりは戦いの始まりと共に…（後書き）

ということで次回はバトル展開になる…はずです！宜しくお願いします

16 ページ目 春の遠足でバトル展開？ 前編 (前書き)

すいません。更新がグダグダに遅れてしまいました…本当に申し訳  
ございません



16 ページ目 春の遠足でバトル展開？ 前編

「誰でも良いと聞いた夕からアイツを連れて来たけど…」

「ああ、ありがとうね。助かったよ。ボクも動きたく無いし」

「……おい。いいの力？あいつら八命令も聞かずニ好き勝手に暴れてるゾ？」

「ははっ。別にいいさ。結果は知れたものだしね」

「全く持つてお前八…ト言つても仕方がない力…」

巨大な木の上、そこにいるのは赤い髪をした女

そして空中に浮かんだ、仮面を被った片言みたいな独特の喋りをする男が…いた

「それにしてモ何故こんな所デ攻撃するんだ？学校帰りと力でも良いだろウ？」

「うーん、そうなんだけどね。あの学校の理事長の鳥本とか言う奴が厄介だからね…」

「そうなの力？あんな時たま、女と見間違えるくらいな女顔ヲしたような奴がそんなに厄介なの力？金持ちそうではあるが…特に意味は無いだ口？」

「…うーん、触らぬ神には祟り無しってとこかな。彼はとっても厄介だよ。色々な意味でね」

「そう力…お前の言う事だかう。間違いは無いだろうナ。僕も注意すル」

「そうした方がいいよ

…さあて、それじゃあボクも時間だね」

「時間？何の事ダ？」

「学校の友達を待たせてるんだよ。これ以上待たせると向こうが心配するからね」

「学校の友達…：お前、学園生活を満喫しきってるナ？」

「そりゃあ満喫しないと損だよ。学園生活だもんね」

「お前…：人の上に立つ者として自覚あるの力って消えた力…」

そして男も消えて行った…

### 旅人視点

「…そういえば、私の名前を言って無かったわね。今言うわ。

私の名前は…瞬<sup>まはたき</sup>。覚えなくてもいいわ。どうせあなたが死ぬのは一瞬だし。

あなたの名前は言わなくていいわ。私って私以外の名前は覚えられない夕子なのよね。どうせ人の名前なんて一瞬で散らせるから」

ガキン

奴の大鎌と俺の持つ大剣が交差する

「…そんな事を言いながら平然と攻撃か…セコいな」

俺と奴…瞬は今現在交戦中だ。俺は大剣、瞬は大鎌を持ち戦っている

「そう？そんなこと無いわよ。ただ、そうした方が上手くやれるから…よっ！」

奴の大鎌が俺の胴体目掛けて薙ぎ払われる。

俺はそれを見切り後ろに下がりが避け、すかさず近づいて肩口目掛けて大剣を振り落とす…が鎌の柄で受け止められる

「…だがそんなのは関係無いっ！」

「く…っ！」

俺は受け止めらたはずの大剣を勢いと重さに任せたまま振り切る

…しかし、鎌の柄は折れても斬れても無い。威力を殺されたか…  
奴は俺から離れて距離をとる。そして、奴は口を開く

「大体にしてそっちが強すぎるわよ…こっちの攻撃なんてまるで…  
死神の鎌風デスビュート！」

「…また不意討ちか…夢幻の竜巻！」

奴が放った、切り裂くような鎌風は俺の目の前に作り出した竜巻に  
吸収された

「ヘル・ジャッジ  
…地獄裁判！」

すると奴はその鎌風に隠れて突撃していた…が

「そこに俺がいつまでもいると思ったか？」

逆に、突撃してきた奴の背後に周り込んでやる

「くっ！」

「重心が乗ってないな」

奴が背後に向かって鎌を振るが、俺は軽くないなし、大剣から手を離し拳を一発腹に叩き込んでやる

すると、奴は面白いぐらいに吹き飛ばされて、木に激突して止まる

「うぐっ！」

「……………今ので流石に分かっただろう。実力差は明らか。前より、強くなっていたがまだ俺のほうが強い。また大人しく退いてくれ…」

「断るわ。私が二度も退くだなんて、みっともなく相手を生き延びさせるどころか、私自身も醜すぎるわっ！死神の大鎌デスサイズ！」

瞬は巨大な鎌にオーラを纏わせて振りかかってくる。

…弱すぎる…な

「通用しない」

俺は大剣も使わずに、鎌の刃を片手で白刃取り……へし折った

「かかったわね」すると、奴はこんな台詞を言ってきた……が……すまない。そっちは俺を策に嵌めたつもりだったみたいだが。生憎……バシてる

「……甘い」

俺は大剣をもう片方の手を使い……後ろを見ずに、背後へと振り払った

「なっ！」

それと同時に背後にあった大量の金属が切り裂かれた

「……背後から大量の鎌で狙っていたか、正面からの攻撃はただの布石……だが読めてる。降参するのなら今のうちだ」

俺は大剣の刃を瞬の首筋に当てる

「……やっぱりそれは嫌だわ」

「なるほど………命よりも誇り（プライド）をとるか」

そう言った一瞬後、俺は大剣を振り切った

その瞬間、鮮血が辺りに飛び散った

16ページ目 春の遠足でバトル展開？ 前編 (後書き)

うっ…なんかこの話、短いなあ…

17ページ目

春の遠足でバトル展開？

中編

(前書き)

普段の旅人日誌を期待されてる方…どうも申し訳ございません！今回の話は色々と異色の話であります。

はつきり言つとグロ描写もありの、鈴音の一人称ですらシリアス風味のシリアス気味な話です！

しかも今回の話は文章うんぬんが多少、納得いきませんでしたし…どうか、こんな小説でもご恩赦をお願い致します！見捨てないで下さい！では本編をどうぞ！

「ふう…まさか熊なんてものが山に居るとは予想外だ」

「それにしてもいきなり何やったんや…死ぬかと思ったで…」

ええと、前は登場しなかったような気がする鈴音です  
とりあえず今の状況を整理してみよう。

まず地面にひれ伏して倒れている熊。手をハンカチで拭いているリズミア。熊を食べようとしている武士子。それを止める聖鳴と凜歌。何が起きたか非常に訳が分からないでいる魅麗と響。

そりゃそうだ。端からみると、何が起きたか分からないだろう…何故こんな状況になっているのか。それを説明するのは難しい。何せいきなり熊が倒れたのだから。

でも、俺の目は捉えていた。リズミアが一瞬で熊に飛びかかり、熊の顔面に一発ぶちかました後に元の位置に何事もなかったかのように戻ったことを。その後には熊は倒れた

………何故熊に触れた場所は足のはずなのに手を拭いているのか、俺はよく分からない。てか拭く必要は無いと思う。

それにしてもリズミア………前に旅人がかなり強いと話していたが、事実らしい。本当に強え。

「さて、自分はちょっと用事が出来た。旅人探しは自分………先生に任して、他の皆と合流してくれ」

そしてリズミアが唐突に言う

いきなり何だよそれは！？それに熊だって出たんだぞ！？無責任過ぎる！

………待てよ。もしかしたら何か考えでもあるのか？そもそも、さ



つき熊を倒す前は何やら考えていた。しかもリズミアは旅人の旧友だし、何か知ってるのかも……  
だったら……

「へ？何やそれ！？探すのを手伝ってくれだとか言っておいてそれはあんまりなような気がするで……」

すると魅麗が言う。まあ当然の反応だろう。どうしようか……リズミアが帰つといてくれと言った限りじゃあ、俺達は邪魔者以外の何者でも無いだろう。

「……仕方がない……か」

「へ？仕方がないって一体………つてええ！？」

すると、リズミアがそう言った途端に何故か俺以外の奴らが……倒れていた。

「取り敢えずそいつらを連れて戻つといてくれ。なに。心配はいらない。まあ前後の記憶がちょっと失われたかもしれないが……そのくらいだ」

「つてお前一体何したんだよ！？」

「ちょっと薬品を打ちこんだだけだ。早く連れて行け」

薬品を打ちこんだだけ………今度は全く見えなかった。コイツ……一体どれだけ速いんだ

「てか俺一人で全員持てるはずないだろ！？」

「誰がお前一人と言った」

「私もいるツスよ!」

「って武士子お!？」

俺とリズミアの間に割り込んできたのは…鳴海武士子。彼女であつた。

……おいおい……どうなつてんだよこりゃあ……もう一体何がなんやら…俺の頭じゃあ理解出来ない。一体何故リズミアは俺たちに帰れと言つんだ?なんで武士子は今の状況に疑問を持たないんだ?なんで武士子が残つたんだ?なんでだ?一体どういう事だ?

……俺の頭はショートした

\*\*\*

「さてと、二人は行つたか……そこにいるのだから?出てこい」

「ええと、取り敢えずバレてるようなので出ますよ」

リズミアがそう言うと同時に辺りにある木々や雲の『影』の一部が結集し、一つの人形を形成する。

それは黒髪黒目の純日本人的な容姿をし、両肩の所から肌を出すような青と赤の特殊な服を着た…男だった

「…ええと、ここはひとまず。バトル開始と言つべきでしょうかね?」

「さあ…？でもバトル開始の前に会話を入れた方が定番だと思うな」

男の疑問にリズミアが答える

「じゃあ一体何を話しましょうかね？僕は特に話すことなど無いのですが…」

「なら、ここは流れるにもこう聞こうか。  
お前らの目的は何だ？」

「…そりゃあまあ普通に言いませんよ。って正確には答えることが不可能ですからね…何も聞いてませんから。

とりあえず暴れてこいと言われただけです……………さて、とりあえずここは自己紹介に入るべき所ですね。

僕の名前は黒<sup>ウツクシ</sup>。黒と書いてシャドウと読みます。決して影と書くのではありませんよ？」

「これはまた…中二病くさい名前だ」

「仕方が無いでしょ。名付けたのは僕じゃなくて僕の育ての親なんですからね……………さて、会話パートはこら辺でやめといてバトルパートにでも入りましょうか…ってあれえ!？」

すると、男がそこまで言った所で男の身体中から……………

……………血が吹き出した  
ブシャアアアア!

血液は皮膚を突き破り、まさしく身体中から吹き出ている。腕からも、足からも、目玉からも、首からも……………男の足元には血液の水溜まりができるばかり。

「あいにくだが、自分は旅人のように手加減出来ない」

「……酷いですね。こんな遙かに王道とは違う、邪道を選ぶだなんて…僕の口から何も言えなく前に聞いておきますけど、どうやったんです…?」

男は何かを悟ったかのように、言葉を発する。しかし、その声はかすれかすれで、さらに口を動かしているのかどうかすら、血だらけのために分からない。

「邪道で結構。というか自分には邪道が一番似合ってる……王道なんてつまらない。邪道こそ…最高だ。」

…さて、まだ耳は聞こえるよな？簡潔に話そう。

自分はさつき、熊を倒した時についてに効果が表れるのが遅い、特殊な毒ガスをばら撒いた……だからさつき、アイツらは早急に退避させた」

「…毒ガス……ですか…?…本当に……非道……ですね…よりによって…この世界の戦争でも禁止されてるような……最悪の兵器を持ち出してくるとは………自然環境とか……考えて…いますか?」

今もなお…流出は止まらずに血の水溜まりは広がるばかり

「ああ…大丈夫だ。どうせこの程度の毒…大して問題にはならない」

「本当に…もうこれじゃあ…どっちが悪役だか………分かりませぬね………」

「自分のほうが悪役だよ。」

…最後に一つ聞いておくか………」

リズミアは口を動かし、はっきりと言う

「……………埋葬されるのはどこがいい？」

「ははは…じゃあ、火葬場できちんと火葬して下さいよ……………せめて生まれた時と死ぬ時だけは普通がいいですからね……………」

…それが彼の最後の言葉となった

\*\*\*

### 鈴音視点

「武士子…お前は一体何者なんだよ!？」

ここは山道。俺は武士子に問いかける

「うーん、旦那から口を止められてる訳では無いから…言っっすけど……………私は……………」

そして武士子は静かに言う

「私は……………この世界とは違う所から来た……………者ッス」

「……………この世界とは違う世界?それって一体どういう事だ?まさか……………俺も大して信じちゃいねえけど…神界や魔界から来たって……………」

「いつのかよ？」

「いや、違うツスよ………私はその世界とはまた違う世界から来たツス……まあ、私もよく分からないツスけど。旦那から聞いた通りに言ってるだけツスから」

「……………そうか」

「あれ？あんまり驚かないツスね？」

「いや、そりやまあ異世界人には旅人とかで経験してるからな……それと言ってどうとかもねえよ」

「つてええ！？旅人も異世界人だったツスか！？」

「てか知らなかったのかよ！？俺はてつきり知ってるのかと思ってたぞ！？」

「私知ってるのは私が異世界人だって事だけツス！！！」

「じゃあどうしてリズミアがあんな事したのに全く驚かなかったんだよ！？」

「へ？普通なんじゃないツスか？」

「おいおい……………」

おいおい待てよこれ。ここまで行ってもコメディか……最初のシリアスっぽい空気は一体……  
それにしてもアレを『普通』だって言うなんて……コイツの居た異世

界って一体…

「あ、そういえば言い忘れてたッスけど…この事は鈴音と旅人以外には秘密にしとけって言われてるッスから」

「ああ、他の奴らには言わない。まあどうせ信じねえだろうけどな…っ!？」

… 会話はそこで打ちきられた

「やあ、奇遇だね…って何もそんなに驚く事無いんじゃないかな？」

何故なら…突如として、一切の音沙汰も無しに『気付いたら』誰もいないはずの場所に…人…それも前にメルモフを拾ってくれた不思議な人、式常夢音しきじょうむおんが現れたのだから

今回の話：春の遠足シリーズはかなりの気付かれない程度の伏線もあります：まあ、伏線なのかどうかは作者にも分からなかったりする事もあります(まあ)

しかし、誤字、文章事項の間違いはどんどん指摘して下さい。どうぞ宜しくお願いします。

次の話で、今回のシリアス編は終了致します！

どうか、こんな作者の書く小説ですけど広い心で見捨てないで下さい！



18ページ目

春の遠足でバトル展開？

後編

(前書き)

取り敢えずバトル展開は今回で終了ですが…春の遠足シリーズはまだまだ続きます！

それにしても更新ペースが遅れてるなあ…それに文章も酷いし…  
……こ、これからは頑張ります！

旅人視点

「…驚いた」

俺はぽつりと呟く

「…よく醜い私を見てくれたわね」

目の前にいるのは……首を切られてもまだ生きて喋っている女……ここは一般的に見て、いわゆる『化け物』とでも表現するべきであろうか。

……とにかくそんな女が……俺の目の前にいる。その女の名前は『瞬<sup>まはたき</sup>』。この名前が本当の名前か偽名なのかは分からないが、多分実名であろう。

その首からの出血による血だらけのヒラヒラした服を着た胴体はその女の首を右手で抱えるようにして持っている。当然、もう片方の手に持つのは奴の武器である大鎌だ

「醜いわね、私。本当に醜い………あんたも醜いと思うでしょ？私の事」

瞬が俺に尋ねてくる

「…さあな。俺から言える言葉は何もない」

「…そう………ねえ、死なない相手を殺す

方法って知ってる？もし知ってるのだったら私を殺してくれない？」

「…すまない。俺はまだ死なない相手を殺す方法なんて知らないんだ」

「そうなの……」

『不老不死』って何……

よりも醜いと思わない？」

瞬は……しばしの沈黙の後に唐突に、そう語り出した。

「私って、生まれた時から既に不老不死だったのよ。老いじゃなく成長はしたけど。羨ましいと言われた事はあるわ、でもどこが羨ましいのか私は理解出来ないわ。不老不死なんて、ただただとても醜いだけよ。どんな事をしても死なないだなんて。命は儚い事に意味があるわ。儚いからこそ死ねる、死ぬ事が出来る。そして、その命が死ぬ瞬間こそ最も美しい。

だから私は殺す。醜い私を見られないために。そして一瞬で散らせて美しく終わらせてあげるために……

今私が所属している組織は利用しているだけよ、私が死ぬ方法を探すためにね」

「……こちらとしては、そちらの事情はともかく、はっきり言つと厄介極まりない話だな……あと、組織とは何だ？」

「ああ、まだ話して無かったわね。まあ……面倒くさいけど……上からは『神界にも魔界にも人間界でも無い、全く違う異次元に存在する組織』……って言うように言われたわ」

「そうか…………ところで、お前はこれからどうするつもりな

んだ……？

…帰るのか？それともまだ戦うつもりか？  
俺としては帰って欲しいのだがな…」

「うーん…そうね…じゃあまだ戦うことにするわ。私について語って動揺させる作戦は少しも効かなかったけど」

「……………」

俺は無言で大剣を構え直し、奴は手に持った首を本来あるべき場所に戻す。どうやら再度、首と胴体が繋がったみたいだ

「……………そんな大剣で…………居合い切りね…………」俺がした構え、それは日本剣術で言う居合い切りの構えだ。またの名を抜刀術。ただし、鞘は存在しない

「…勝負はお前の美学の通りに一瞬でつける」

「一瞬…ね…そうよ。それが私の求めていた勝負…………これで私が負けたら大人しく引き下がる事にするわ」

奴は大鎌を頭上に上げて、高速で回し始める

俺はじつと身構え、奴の動きは瞬き一つせずに見すえる

「…封印されし数々の亡霊よ…今その怨念を力へと変えよ」

奴は鎌を回しつつ、呟くような感じで何か呪文を唱える。すると、その巨大な鎌は強大なる怨念の邪気を放つ。

なるほど…奴が今まで殺した奴らの怨念があつた鎌の中に結集されてるのか…………！

奴は鎌を大きく振り上げ、こちらへと駆けてくる。

「首狩りの極刑ネットクハント・ペナルティ！！！！」

「……………流剣術居合い一式、始来シヨク」

奴からはただただ非常に純粹なる負のエネルギーの塊を纏う鎌が振りきられ、俺がする技は古流日本剣術の居合い切り……………本来ならばとても俺の武器である大剣とは合わない技。しかし、力づくで無理やり振り切る！

「……………」

「……………」

俺と奴の立ち位置が入れ替わる。交差する

ブバシャア

刹那、俺の服が赤く染まる

「……………」

……………私の負け……………ね……………

……………くっ……………」

……………奴の腹から吹き出た返り血で……………

鈴音視点

俺たちの目の前には、赤いウェーブがかつた髪をした中性的…ボーイッシュユっつうんだっ たっけ？とにかくそんな顔をした女…式常夢音がいた

「ええつと奇遇ですね。夢音さん。あ、特に警戒してる訳じゃありませんよ。何せあまりにも突然だったので」

俺は動揺を隠しつつ丁寧に落ち着いて返答する。

しかし今の台詞は正直、半々くらいの割合で嘘っぱちだ。確かに夢音については不思議に思ってるだけで、警戒してる訳じゃあ無い。それなのに俺がなんでこんなに動揺しているのか、理由は簡単……：さっきの俺と武士子の会話が聞かれなかったかどうか心配だからだ！

へ？聞かれても信じられないから問題無い？

いや、違う！そういう意味じゃねえ！あいつらはダチだからいいんだ。でも、こんな他に誰もいない所で今みたいな異世界とか話していたら、電波系以外の何もんでもねえ！主に俺の近所での評判が危なくなる。ご近所付き合いは大事だし噂ってマジで怖えんだぞコノヤロー！

「ああ、そうだったんだ。それにしてもボクは君たちがここで何をしていたか気になるね」

それは聞かなくてくれえ！そっちが俺たちの会話を聞いて無かったみたいなのは幸いだけど、その事を聞かれたんじゃないやあどうしようにも無い

「ええと、登山をしてたツスよ！」

「へえー。そうなんだ」

おお！武士子がナイスフォローしてくれた！

…でもまあ多分フォローとかそんな事は考えてねえと思うけどな。

「じゃあ…その木で横たわってる人たちはどうしたのかな？」

夢音が見た方向。そこには先ほどから気絶してて、俺たちがここま  
で運んで寝かせといた凜歌たちが……

エマーゼンシー  
緊急自体

だ！

どどど、どうすれば良いんだ！？流石にこれは誤魔化せねえ！しか  
も事情を話したら電波系だということで、それはそれでやべえ！

……打つ手がまるで

思いつかねえ。考えろ！考えるんだ俺！こういう時にだけは馬鹿な  
自分を恨めしく思う

こうなったらしゃくだが武士子に期待するしかねえ

「……全員。春の眠気に

やられたツスよっ！」

武士子はちよつと考えた後、こんな事をほざく

…いや武士子。流石にそれは無いだろ！？それじゃあ絶対に誤魔化  
せねえ！

それとも武士子。お前の居た異世界では一度にほぼ全員が春の眠気  
にやられるのか！？

「ああ、そうなんだ。なるほどね」

って誤魔化せたっ！？誤魔化せちゃったのか！？何でだよ！？何で

疑問を抱かないんだよ!?

……まあ、いくら心でツッコんでも無駄だし、今はこの機に乗ろつ。取り敢えずこの会話の流れをずらす。まずはそれからだ。

「ところで式常さんは何でこの山に?普通に登山ですか?」

「ははっ。そうだよ。ちょっと学校の遠足でね、寝坊して遅れちゃったよ」

寝坊……か……どうりで一人な訳だ……

……学校の遠足?

「ええと、もしかしたら学校って……」

「桜道高校だよ」

へえー……桜道高校ねえ……確かソレって確かなんかム力つく理事長がいる………ん?

「ってええ!?!俺たちと同じ高校ですよ!」

「え?そうだったんだ。じゃあボクの名前は呼び捨てで良いよ。煩わしいし。頼むよ鈴音君。それじゃあボクは………行くから」

「あ、ちょっと待って下……っ!?!」

ガシッ

すると、突然夢音は俺の首を素手で……捕らえた。く、何だよこのあんまりにもいきなりな急展開……



かなりキツく、俺の首に夢音の指が食い込んで……く、苦しい……  
声が出せねえ

「……………さて、茶番もこの程度がちょうど良いかな」

夢音が言う。茶番って一体何だよ!?

ってか武士子は一体どうしたんだよ!?!この場に居るはずだろ!?!

「……………  
メモリーチェンジ  
記憶改変」

そう、俺の意識が途絶える前に聞こえたような気がする

18ページ目

春の遠足でバトル展開？

後編

(後書き)

突然の急展開！

というわけでは無いです…

## 19ページ目 記憶改変と十字架の火刑（前書き）

更新遅れてごめんなさい!!!最近スランプでして…どうか許して下さい!これからは執筆ペースを上げていきます  
あ、後8ページ目を改訂しました…

## 19ページ目 記憶改変と十字架の火刑

鈴音視点

「う、うーん……」

俺は目を覚ます。

「あ、鈴音え……」

すると、目の前に見えたのは凜歌の心配そうな顔だった。

「全く、突然気絶したから事後処理が大変だったぞ」

リズミアの声が聞こえた。

起き上がって周りを見渡すと皆がいる。どうやら俺は倒れて寝ていたみたいだ。

「なんや。そんな起き方じゃあつまらんわ!」

「でも大丈夫そうだよ。こういうのは倒れた時の地面に頭をぶつけたダメージのほうが深刻だからね」

次は魅麗と響の声。

「……あれ？ちょっと待てよ。状況整理が出来ねえ。記憶が曖昧で尚且つ頭がぼーとしている。こりゃあ一体どうなってるんだ？」

「ああ、状況理解が出来ないみたいだな……まあ一言で言つと、お前はすつ転んで山道を転がり落ちたらしい。それで今ここは山の頂上、目的地だ」

リズムアの状況説明

すつ転んでつて……どんだけドジなんだよ俺!?

……つてあれ? ちょっと引つかかる言葉が……

「……らしい?」

「ああ、それは自分もお前を運んできてくれた女の子から聞いた話だからな。確かその女の子の名前は……夢音つて言ったか。珍しいウェーブがかつた赤い髪で、多少ボーイッシュな感じだった」

夢音?

……あれ? どこかで聞いたような……ああ、そうだ。ついさつきこの山で『友達』になった人だ。こんな事を忘れるなよ俺! 友達付き合いも大事だからな!

「つと噂をすれば来たな」

「鈴音君の様子は大丈夫? つて目が覚めたようだね。良かったよ」

向こうから来た女の子の声で俺は振り向く

するとこつちに向かつて歩いて来ている赤い髪の女の子が見えた。

名前は………夢音。今日友達になった人だ

あー畜生! 記憶が曖昧だ! 今一瞬、名前が何故かまるで思い出せなかったぞ!

うーん、ちょっと記憶を整理してみるか

俺たちは学校の遠足で山に登っている最中、旅人が道無き道を行くという悪魔でもビックリするであろうくらい馬鹿な行動をして、行

方不明……つかあの場合は迷子と言えば正解か？  
と、とにかくそんな状況になる。

うん。ここまでははつきりと思い出せる。その後の記憶が何だか途切れ途切れだ

……ええとリズミアが『一人で』旅人を捜しに行った後……そうそう、俺たちは夢音と会ったんだ。同じ学校だって事で驚いて、その後視界がひっくり返って……って俺が気絶したのはここかあつ！  
で、今に至ると。そういう事かよ……  
……ん？あれ？なんだ？何だか違和感がある  
……ような……この記憶、間違っていないはずだよな？

「鈴音君？大丈夫？意識はある？」

「……うおたあつ！？」

夢音の声で俺は意識の世界から戻ってくる……そして気づいたら夢音の顔が俺の目と鼻の先に……俺は飛び上がり即効後ろへと退く。

畜生！どこかの誰かさん。俺を決してへタレだなんて言わないで！  
仕方ないじゃねえか！気づいたら、可愛い顔が目の前にあったんだから！

確かに一般男子にとってはなんとも嬉しいシチュエーションだったけど！でもこの場合、俺に何をしろっていうんだよ！？今みたいに後ろに下がるくらいしか出来ないだろ！？

へ？やっぱりへタレ？

……ああはいそうですねえへタレで悪かったですねコンチキショー！

「……鈴音……その様子だと大丈夫みたいだね」

凜歌が半ば呆れたように言う

「さて、皆揃ったことだしここからは自由行動だ。一応言っとくが、危険な事はするなよ。めんどくさいし」

と、一拍子のち、そうリズミアの言った『じゃあもう教師するなよ！?』とツッコミたくなるような台詞で自由時間になった

〔数十分前〕

「……………記憶改変」

赤い髪をした女……………夢音は女みたいな顔をした男……………槍館鈴音の首を片手で掴み持ち上げ、そう唱える。  
どさっ

そんな音がした。鈴音が地面に倒れた音だ。

「……………全くお前八……………『友達』を待たせているのでは無かった力？」  
すると、空間を切り裂き、一人の仮面をした、独特の喋り方をする男が夢音の前に現れた。

「ははは、それは本当だよ。……………友達……………『旧友』さ」

「全く……………お前の考えてル事は理解出来ないナ……………そのオンナオトコに記憶改変なんてして何の意味があるんだ力……………そいつ、旅人を匿ってるだけデ一般人だゾ？」

「一般人？うーん……………まあ、確かにそうかな？」

……でも、この世界には変な関係があつてね……」

「すまん。学の無い僕に八理解出来そうにも無い」

「……じゃあやっぱり高校に入れば？理事長と契約してるからいつでも入れるよ？」

「断ル。中学生の問題も出来ない僕にはきつと頭がパンクして破裂する自信がある」

「大丈夫だよ。破裂しても直すから」

「………そ、そういえば！ここに居たもう一人はどうした？」

「ああ……武士子ちゃんの事？彼女なら鈴音君や他のみんなと同じく記憶改変して、とりあえず世界を飛ばしておいたよ。鈴音君が目覚める頃には何の違和感も無く突然現れるんじゃないかな？多分ね」

「多分って……もし失敗したらどうなるト思ってるんだ？」

「まず99%くらいの確率で彼女は死ぬね、そうなたらあの理事長が黙ってないだろうし、ほぼ間違いなくうちの組織は消滅するね」

「………絶対失敗するなヨ？まあお前の事だから大丈夫だと思うけど」

「ははっ。手順は完璧だし……問題は無………おや？来たみたいだね」

「夢音。お前の仕業か……」



夢音がそう言うと同時に、茂みの奥の方から一人……現れた。それ  
つは、男のような外見をしているが、女だ。

「やあ、久しぶりだね。リズミア……ちゃん」

「『ちゃん』は止める。『ちゃん』は。虫酸が走る」

二人はお互いの顔を知っているらしい。因縁の敵………というよりは  
むしろ、お互いを認め合ったライバルのように見える

「……と、単刀直入に聞こうか。何が目的だ？」

リズミアが尋ねる

「さあね？」

「……………」

リズミアはちよつと頭を押さえてから言う

「全く……お前はいつもそうだ。

目的があるかのように見えてまるで何も目的なんて無かったり、目  
的なんて無いように見えて推敲な計画を組み立てていたりな……

……いくらお前に問い詰めても仕方が無いし、意味も無い。理事長の  
方には連絡はしないでおくからとつと用件は済まそうか。めんど  
くさいけど」

「用件？用件ってなんだい？」

「こいつの後始末だ」

リズミアが夢音たちの方に向けたのは、人の形をした赤い肉塊……  
…正確には、つい30分前までは普通に生きて喋っていた男の残骸……  
……だ。  
名前は確か、影と言ったか黒シヤクと言ったか

「どうやらこいつは火葬が良いとかほざいていたが、どうすればいい？お前らに引き渡せばいいのか？」

「わざわざ尋ねてくるなんて、律儀だね。どうせ答えは分かっているせに。」

まあ…君の予想通りにして良いよ。こちらとしても手間が無いから助かるし」

「そちらにとつては小指一本動かすくらいの手間だろ？  
まあ関係無いか。これが終わったら用件はもう無いからそちらも適当に撤収しろ。特に夢音はこの学校の生徒だし、ちゃんと遠足に来てくれないとめんどくさい事になるんだ」

リズミアはそう言い終わると同時に、その生暖かい、まだ腐臭も漂ってない血だらけの肉塊を上空へと放り投げて

「燃え消える。十字架の火刑」  
クルス・オブ・ラストフレイム

リズミアはそう言うと、右手を上空に挙げ、腕を十字を描くように振るう

その瞬間……投げられた肉塊から炎が吹き出た。その炎は広がり、肉塊を交差点として、十字架のような形を成す

ゴオオオツ！！そんな効果音が聞こえる

とてつもない熱気。それはこの炎がどれほどの高温なのかを示して

いる。

必然……その肉塊は焼けたり真っ黒焦げなんてレベルでは無い。骨すら残らず……灰……いや、その灰すらも消え去り、その肉塊の全てが消えた。

「……やれやれ、酷いね君は。人間らしく、死なせて欲しいって要望もあつたんじゃないかな？」

夢音が言う

「十字架で炎に包まれて死ぬ……いかにも人間らしい死に方じゃないか」

「やり過ぎだよ……いくら何でも灰すら残らないなんて、どこが人間らしい死に方なのかな？せめて遺骨は残しておくべきじゃない」

「……………面倒臭い」

最後にリズミアはこう呟いた  
その後、彼らはその場から消えた

## 19 ページ目 記憶改変と十字架の火刑（後書き）

とりあえず次回か次次回でコメディィに戻る…はずです

鳥本「ふむ、それにしても俺の出番が無いな」

お前は良いじゃないか。感想欄や、本編中にも重要そうなポジションで名前が出てるし

緑「私たちの事は忘れてませんか？」

メルモフ「もふー！」

あ、忘れてた。でもゴメン。やっぱり暫く出番無いぐはああああっ  
！！！！（作者吹き飛ばされる

20ページ目

遠足の終りと『ある組織』

(前書き)

祝。 20ページ目！

「なるほど。そういう事か」

「ああ、だから今回の事は極秘で頼む」

「……………分かった。夢音がこの学校に居る事は最初から分かっていた事だしな……………それに夢音はほつといても大丈夫だ。アイツは策略こそ立てるが一般人に手を出すような事はしない。決してな」

「確かにな。今回の一件でも奴らは『一般人』には誰一人手を出していないし、自分の時の場合はまるで『自分が一人になるのを』待っていたようだ。自分ならあの場に罠を仕掛けておくけどな

熊はもはや一種の動揺作戦だろう。現に、熊の足跡は自分たちの周辺にしか存在して居なかった。多分、その目的は離れ離れにする事だけだろう。普通、熊は人の気配を感じれば近づく事は無いしな…」

「…俺の場合も同じだ…まるで人の居ない場所を狙って襲撃したとしか思えないぞ…」

「それに夢音は色々とお茶目な奴だから、友達を作った理由も分からないでも無い。大方、自分が楽しむだけだろうな……………迷惑な話だ」

「…まあ、心配は無いか」

リズムアと旅人は話していた。ここは影……………鈴音や生徒たちから見えない死角の位置で、付近を警戒している

すると、ふと遠くの方から鈴音たちの声が聞こえてきた。どうやら弁当とかの事で、はしゃいでるらしい

〔鈴音視点〕

どうやら予定通り自由時間に入ったらしい。とりあえず大抵の生徒はそれぞれのグループで集まって弁当を食べている。俺たちもその一つだ。

……っ！かやっぱ俺は全然腹減ってねえよ！やっぱり気絶してて歩いていないせいかな？

そう考えると複雑な気分になる。本来だったら歩きもしないで頂上に着けてラッキー！

……のはずなのだが、ぶっちゃけ言つとそもそも何もしないで頂上に登つたからつて一体何なんだよ！？苦労も何とも無しに登つたから感慨深さも何もねえ！

……ああもう畜生！食事だ食事！大して食欲湧かねえけど、でも美味そうな弁当を見れば食欲が出てくるかもしれないし、女の子の真心詰まった特製手作り弁当を食べるかもしれない。地味だけど端からみてる男からしてみれば羨ましいシチュエーションがあるかもしれない！

俺はそう思って夢音といつの間にか現れた武士子も含めたメンバーで頂上の広場に取り付けてある椅子とテーブルに集まって、それぞれの弁当を出す……っ！？

「ど、どうしたの？鈴音……」

「！？」

凜歌を始めとした数名が俺の鞆の中を確認した瞬間。場が凍りついた

……………ドンマイだぜ。鈴音」

「……ええと……私は見ていた訳では無いけど……あんな事が起きたんだから仕方がないよ……………」

「……災難やな……………」

「お、落ち込まないで……………」

「……………ぎゃ、逆に俺がとっても情けない奴に思えてくるから気にしないで！」

そもそも俺はたいして腹減ってねえし！昼飯なんて食わなくても大丈夫だから！」

やっぱり転んで山道を転がったことが原因か！？鞆の中身が壮絶な事になってやがる！

どんな事になってるのかと言うと、鞆の中一面に散らばったご飯とおかず。そして開いた弁当箱と弁当の中にある、妙に片寄ってて量が少なくてぐちゃぐちゃに掻き混ぜられた昼飯を見て想像しやがれちきしょおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！

「げ、元気出して鈴音…私の弁当あげるから」

「う、ウチの弁当もあげちゃるで……………」

「うつつ…ありがとう凛歌…魅麗……………」

「…モテモテだね鈴音君」

「違っぜ夢音ちゃん。あれは鈴音から漂うマイナスオーラの同情心



から来るものだけ」

「へえー。そうなんだ」

「……………美味しそうッスね……………」

「ぶ、武士子!？」

全員が弁当を出し終えた所で隣を見ると、武士子がいまにも飛び掛かるうとしているように、目が光り輝いている

「た、食べるなよ!？武士子!お前だったら人の事なんか気にせず全部食いそうな気がするし、何より精神的に辛い!

つてかさつきまでお前のリュックの中に大量に詰まっていた食物類はどうした!全部食べたのか!？」

「一体その時に出たゴミはどうしたんだ!？ほらごみ箱に捨てて!そうしないと山が汚れるだろうがあアああああああああああああああああああ!!!」

「ツッコミ所がズレてるよ鈴音!？」

そこから始まるのはいつも通り……………つか、いつもよりハイテンションヒートアップのどんちゃん騒ぎ。

その後、聖鳴が吹っ飛ばされたり魅麗と響がハリセン出して漫才始めたり、凜歌が大ボケぶちかまして俺がツッコミ入れたらミスって土下座クライシスを繰り広げる羽目になったり、旅人とリズムアが戻ってきてその様子を見て呆れたり

そんなこんなで『何事も無く無事に』今回の遠足は終了した……………」

〔鳥本視点〕

コンコン

理事長室の部屋にノックが鳴る

「……………夢音か。入れ」

「ははっ。久しぶりだね鳥本君」

「…相変わらずお前は馴れ馴れしいな」

理事長室に入ってきたのは夢音。『一応』うちの生徒の一人だ

「それで、用件は分かっているだろうな？」

「……………今回の遠足の件だよね？」

「そっこだ……………」

まあ、まだ許容範囲内なのだがな。一応形式上の忠告だ。お前はこ  
の学校の生徒ということになっているが、こちらとしてはいつでも  
お前を始末できるのだぞ？」

「ははっ。怖い怖い。」

流石は世界経済の半分以上を占め、圧倒的なる財力、科学力、技術  
力を持つ『山上財閥』のトップ、山上鳥本君……………」

「……………まあ、あの組織の中でも『穩便派』であるお前には手出しす

るつもりはないがな……お前が消えると色々と厄介な事になる」

「まあその『厄介事』といっても君の力をもつてすれば軽く何とか出来るんじゃないかな？」

「そんな事は無いぞ？『山上財閥』には色々と敵が多い……この世界にも当然『異次元世界』にもな……お前らの組織と戦争している間に他の組織から攻められて終わりだ」

「ははは……まあ頑張つてよ。ボクも山上が崩壊すると色々と困るからさ」

「ふむ、好きにするといい……俺が困るような事でなければな」

「ははつ。まあ気をつけとくよ……」

その後、赤い髪をした女、夢音は後ろを向き、ドアを音も立てずに開け立ち去っていった。

ふと、俺は机の上にある書類に目を向ける。

その中の一枚、夢音の残した紙にはたった一つの言葉しか書かれていない

その言葉はあくまで通称に過ぎず、読み方も分からない

『神魔者』

それが奴らの組織名だった

20ページ目

遠足の終了と『ある組織』（後書き）

いやはや、今回で遠足編は終了。暫くは一話完結のコメディになります

## 21ページ目 リズミアの部屋で逆襲イベント？（前書き）

11ページ目を改訂致しました。オチの辺りを変えてあるので見て下されば幸いです

## 21ページ目 リズミアの部屋で逆襲イベント？

今日は休日。俺たちは家で揃って朝飯を食べている  
ちなみに何故か、今日はリズミアまで居る。本人曰く『今日は朝飯  
を作るのがめんどくさかった』らしい。

色々と言ってやりたいが、何の断りも無いよりは遥かにマシだしと  
いうことと、凜歌の『可哀相だよ』と言う台詞（むしろこっちが主  
な理由）によりリズミアにも朝飯を作ることになってしまった

「いつも本当に美味しいよね鈴音の作るご飯」

凜歌がふとこんな事を言う

「……確かに。この肉じゃがの芋の舌触りの良さ。煮加減。味付け。  
どれを取っても凄いな……プロの料理人でもそう簡単には作れない  
レベルだ」

「もー！」

「ふと自分は思っけど、どうやってたらこんなに煮崩れしないのだ…  
？」

「いつもお嫁さんに行っても恥をかかないね。鈴音」

「別に大した事はしてねえって。いつも大袈裟なんだよお前は。  
後、凜歌。お前今なんて言った？せめてお嬢さんの間違いだよな！  
？」

「……………へ？」

ええと私何か間違いましたっけ？

……あぁっ！そういえば鈴音は男だったんだ！

「忘れていたのかよオイ！？しかも今思いつきり熟考していたよな凜歌！？」

「何度も俺は男だって言ってるよな！？鈴音君からしたらお前の記憶力が心配だっ！」

「それともアレか？アレなのか！？俺がそんな事を忘れさせるくらいにお嫁さんっぽいっていう事なのかよ！？それが一番ショックだ畜生！」

「お嫁さんっぽいと言うのは誰も否定は出来ない事実かと思うが？」

「そっだよねリズムア先生。」

「ほら、だって家庭料理は美味しいしその他家事洗濯も日々の日課」

「……多少、口が汚いのは残念だがな」

「ってまさかの三人がかりで総攻撃っ！？」

「くそう！ここに俺の味方はいないのかよ！？」

「もふ？もふもーふふもふふも！」

すると、隣にいるメルモフが何かを叫んでいるのを俺は見た

「め、メルモフ……！ありがとう！お前の場合は気持ちだけで十分だ！」

涙を流す俺。

正直、メルモフの言葉はまるで分からないけど俺を援護してくれているって事は分かる

あ、ありがとうメルモフ！お前だけだ俺の味方は！

「ちなみにメルモフは『ああ、この料理美味しいなー』と言ってるだけだ」

「俺の感動を返せえっ！」

「……勝手にこれくらいで感動した方が悪いと思うのだが……」

その瞬間、旅人の言った台詞により俺は軽い自己嫌悪でうなだれ、無言になる

「だ、大丈夫だよ鈴音。

そ、それよりも他の事を話そうよ！」

そこで凜歌が俺の事を心配してくれたようで無理矢理話題を変えようとしてくれた

「ええと……例えば……」

「……」

「……よしよし、メルモフ。可愛いな……お前は」

「もふー！」

「……」

「……って誰かこの沈黙を断ち切って下さい！そして」



旅人もメルモフと、もふもふしてるだけじゃ無くて流れを読めえつ  
！」

俺は沈黙の静寂……テレビの音しか聞こえない状況に耐え切れずつ  
い叫ぶ

あと凜歌は会話の議題が思いつかなかつたみたいだ

「そ、そういえば。リズミア。お前『朝飯を作るのがめんどくさか  
つた』とか言ってたけど、もしかしたらこの近くに住んでるのか？  
そうじゃなかったら来る方がめんどくさいだろうしな」

ふと思いついたままに話題を提供してみた俺

「ん？ああそうだが。自分はここの近くのマンションの一室に住ん  
でいる」

「リズミア先生の家……うーん。どんな風になってるのか、ちょっ  
と想像出来ないよ」

「……気になるな」

凜歌に旅人の言う通りだ

男装好きの変人の部屋……生活感丸出しゴミたくさんなのか、以外  
と整ってるか、非常に気になる

でもまああいつの場合、『一応』女ということになっているから、  
女の人の部屋に入るのは失礼だ………全く女って感じがしねえけど  
当然、リズミアの家に俺たちが行く事も断ら……

「ああ、自分の部屋か？いつでも来ていいぞ。今すぐでもな」

「……れるはずだと思っていたら行ってもいいのかよ!？」

「鈴音、日本語が途中からだよ?」

凜歌に冷静にツッコまれる

くそっ……つい思っている事が途中から口に出てしまった…

「ああ、何なら飯食ったすぐ後にでも来るか?」

「鈴音、今日は何にも予定無かったよね?それじゃあ行こうよ」

「……俺も行こう」

そんな事があつて俺たちはリズムアの家に行く事になった

\*\*\*

「……………ふ、普通だ……………!!」

「第一声からそれか」

今俺たち四人はリズムアの住んでいるマンションの部屋の前にいます  
とりあえず、なんとというかドアの所を見た限り最初の感想は普通。  
なんも変哲も無い……ぶっちゃけ言つと、つまらない。

いや何も変哲も無くて安全なのはこちらとしても超大絶賛大歓迎な  
のだが、拍子抜けした

「それじゃあドア開けるぞ」



「もふー」

メルモフの鳴き声と同時にドアが開かれ、リズミアが出てくる

「待たせたな。入ってくれ」

「って何だよさっきの触手は!？」

「気にするな」

「即答かよオイ!そもそも気にするなって言われて気には出来ないはずねえだろ!」

「それでも気にしないでくれ」

「いやもう何というかお前の家は入りたくねーよ見たくねえよ!」

「鈴音。そんなに大声出してると迷惑だよ?」

「凜歌あ!お前はさっきのを見ても何も思わなかったのかよオイ!」

「へ?」

「……………リズミア先生が気にするなって言ってる訳だし、きつとさっきのは幻覚か何かなんじゃない?」

「幻覚!? 幻覚でも結構ヤバむぎやう」

「まあ、話は部屋に入ってからだ」

俺はリズミアに口を塞がれて、強制的に入らせられる

「げほっ！て、てめえ何すんだこの野郎！」

「失礼した。いくらなんでも近所迷惑だったし、ここなら防音設備があるから問題無い」

「そういう問題じゃあねえよリズムミア！」

「……まあ入っちゃった以上は逃げようも無いし仕方がねえけど、さっきのは一体何だよ？」

「ああ、アレは触手生命体。名前は『ドリндаちゃん』。ちょっと知り合いから細胞の一部を譲り受けて、クローン培養していたらいつの間にかあんなサイズにまで成長してな……」

「……もう俺はツッコまねえぞ。何もツッコまねえ。絶対にツッコまない」

淡々と説明するリズムミアに、必死でツッコみたい衝動を抑える俺。更にハンバーガー5個目に突入している旅人に、モフモフでフワフワな不思議生命体をモフモフする凜歌

「……うん。なんとというか無茶苦茶シユールな光景だ。でもツッコまない。ツッコんだら何かに負けた気がする

そこでふと、俺は冷静になって辺りを見渡す

「……妙にキチンとした部屋だ。

ダイレクトにキッチンと繋がったリビングにある、タンスに少々大きめのテレビ。ここには不振な点は何一つ見つからない。当然、ドリндаちゃんなんて触手生命体の影も形も無い。

「……他の部屋か。そう思う。」

第一にしてこの部屋は外向きのお客様の部屋なのである。この部屋だけじゃありズミアの私生活は暴けない

ここまで来たんだ。どうせなら一つは秘密を握って帰りたい  
……もうすでにかんりの秘密を暴いているような  
気がするけど、リズムミアがバレたら困るような秘密を見つけてない。  
そもそもあの『ドリンダちゃん』だって、下手に言えば……いや上  
手に言っても付近の人に信じて貰えない可能性は高い。下手すれば  
こつちが『電波系』の汚名を着る事になる。電波系女はいいが、電  
波系男は色々キツイ  
あと、お前は女だるとか思った奴はそこに直りやがれ。一人ずつ順  
番にブツ潰す！

「さて、それじゃあ自分はまだやる事があるから少々席を開ける。  
好き勝手しても良いから、すまないけど少し待っていてくれ」

そう思っていた最中、リズムミアが言い残して、席を立つ

「ねえ、鈴音。ちょっとつけてみようよ？」

「ん？ああそうだな凜歌。明らかに何かがありそうで怪しいし……」

リズムミアの後をつける俺たち。

すると、リズムミアはこことは違う、とある部屋に入ってしまった

……怪しい。非常に怪しい。そんな能力は無いけど、何とな  
く俺の超直感がそう告げている

これは…何か弱みとかあるな？

普段は結構、理不尽っぷりが目立つリズムミア。その弱みを握れたら  
儲けものだ。果たして男装大好きな変態である事を全く隠そうとも  
しない奴に、弱みという弱みなんてあるのかとつても不安だけ  
そう思いつつ内開きのドアを開けつつ静かに中に入ろうとする俺たち  
プライバシー？そんなの関係ねえ！

あ、今のは決してわざとじゃないからな。古いとか絶対言うなよ！？

ガチャ

「……………は？」

少し薄暗い部屋に一步踏み出した矢先、何だか右足に鉄のようなひんやりとした感触が……

「……っっていたあつ！」

何だこれ！？トラバサミ！？俺始めて見たぞこんな罠たたたたたたた！

「不用意にこの部屋に入るからだ……………」

すると、目の前に現れたのはリズミア。さして動揺もしていないしかし、何だか顔が嬉々としている

……………せ、背筋に何だか寒気がする……………

あ、改めて部屋の中を見渡してみるとかなり広い。

基本的に薄暗くて目の前の机にはプラスチックの中に入った緑色のブックとした液体やら、とにかく見るからに危険そうな物と、怪しげな光を放つパソコンがある

横のたくさんの本棚には、長い年月を経過したのか全体的に黄色く黄ばみ、端のところがボロボロになった……………見るからに自分は怪しいですと主張しまくってるかのような本がたくさんある。

そしてその本たちのタイトルはほとんどが日本語じゃあ無い。一体どの言語かは知らないけどヤバ過ぎる感がバリバリだ

そして、リズミアの手には黒い液体が入った試験官があるのに気づいた。

身動きの取れない俺

怪しげな液体

少しだけ嬉々としているリズミア

この状況から………俺はある結論に辿り着く

「あの…リズミアさん。アナタハソノ液体デ俺ニ一体何ヲスルツモリナノデシヨウカ？」

「なに。心配はいらない。ちょっとこの新しく調合した薬の被験者になって貰いたいだけだ」

「あんまりにも予想通りの答えかよ！

それって絶対ヤバいだろ！？死ぬから！そんな黒い石油みたいな液体を飲まされたら槍館鈴音の人生はそこで終わってしまいそうな気がするから！だから止めやがれ！

てかまさか俺をこの家に呼んだのはまさかこの為なんじゃ無いだろうな！？」

「あのう…リズミア先生。その薬の効能は何ですか？」

「ああ、これは『性転換薬』だ。効果は………言わなくてもわかるよな？」

「ぶほっ！？」

リズミアの発言に俺と凜歌が同時に何かを吹き出す

「いやいやいやいや！そんな薬使ったら間違い無く俺の俺としての人生終わるから絶対止める！いや寧ろ止めて下さいませとんでも偉大なるリズミア大先生！」

「そつだよ！鈴音には男らしくなる薬が一番ピッタリ……あれ？じ



やあ性転換薬で合ってるのかな？あれ？でも鈴音の性別は男……え？でも朝はお嫁さんとか言われていたから女の子……？」

「凜歌！？お前の言ってる事は俺の心に大ダメージクリティカルだ！」

「さて、それじゃあそろそろ実験開始だ。安心してくれ。小一時間ほどで元に戻るはずだ」

俺が逃げようと足掻いている最中。リズミアがそう言う  
ヤバい！もう少して死ぬ！

「どこが安心出来るかあっ！せめて確定しろよ！

そんなデンジャラスで正体不明な薬の被験者になって病院送りなんて勘弁だぞ！？」

それにどうせその小一時間間に何かトラブルに巻き込まれる事はこれまでの経験から確定事項のようなもの何だよ畜生！」

俺は必死に足掻く。全力で足掻く。無駄かもしれないけど暴れる

そこで奇跡が起きた

ガシャーン

そんな音とともに近くにあった一つの試験官が俺の指先にギリギリで引っ掛かり、割れたのだ。

そしてその液体は、リズミアの顔面へとかかって行く

「！」

リズミアが反応した時にはすでに遅い。すでにリズミアの顔面に液

体が降り懸かっていた

それだけだ。すぐに拭けば大丈夫

そう思っていたら、リズミアが突然慌てて顔を両腕をクロスさせるようにして隠し

「い、今の自分の顔を見るな！」

という世にも仰天台詞を言いやがった

「……は？」

俺と凜歌は目が点になる。何が起きたのか理解出来ない

「くそっ！男のように見せるための特殊メイクがはげた！」

普段のリズミアからは想像のつかない非常に慌てた大声

すると、ふとリズミアの腕の隙間から垣間見える顔。普段の男っぽい顔ではない。しかし、それがリズミアだと言っことは分かるような、中性的な…。どちらかと言えば女顔に近い顔。

そしてリズミアは全力で奥の方へと引っ込んだ。

それを罫をちょうど何とか解除出来た俺と凜歌は呆然とした様子で見ている

「もふー！」

「やはりハンバーガーは上手い……」

その頃、旅人は部屋にてハンバーガー15個目に突入していた

21ページ目 リズミアの部屋で逆襲イベント？（後書き）

今回劇中に登場した『ドリンダちゃん』はコニ・タン先生の作品、  
『学園珍事ファミリア』よりお借りしました。どうもありがとうございます！  
ざいます！

あと何だか最近良いサブタイトルが思いつかない……

22ページ目 とあるマンションに現れるモノ（前書き）

良いサブタイが思いつかない……

鈴音が薬の実験台にされかけていた頃、同マンションの一室にてその部屋にはあちこちに段ボールが山積みになれ、つい最近引越したようだ。

そこで段ボールを開いている、赤いウェーブがかった髪をした女が一人と、白い短髪で美形の黒い仮面を顔の半分につけた男がいた

「……………なア夢音。少し聞いて良いカ？」

「なんだい？」

「……………はあ……………」

男はそこで軽いため息をついて、一気に空気を吸い込んで言い放つ

「なにゆエ僕達は引越しの荷解きなんテ事をしてイル！？おかしイだろウ！？」

「どこがおかしいんだい？引越したから荷解きは当然だよ？」

「いや、そもそも引越シという前提が間違っテいるだロ！？なぜお前八引越しなんテするんだ！？」

男は少々、怒ったような顔になる

「えー？だつてボクは高校生になつた事だし、通学するなら近いほうがいいよね？」

対して女の方はずっと変わらず笑った顔だ

「いやもうなん力普通の高校生だナお前!？」

という力距離なんテ関係無シニ時空を飛ばバ学校に行くノなんか一瞬だ口!？」

「うーん……だってそれだと気分が乗らないしね」

「気分!？ たつタそれだけノためニ、わざわざお前八仕事モほったらかして、こんな所ニ引越しなんテしたの力!？」

「こんな所だなんて酷いなあ。」

このマンションのこの部屋って家賃も安い癖に、かなり広くて部屋数も多いし、駅やスーパー、商店街にも近くて利便性が高い非常に優良な所だよ。

強いていうなら、幽霊が出るとか天井から不気味な物音がするとう噂があるぐらいさ」

「いやそれは論点から外れてるゾ! という力幽霊が出るトいう噂がある時点でアウトだト思うガ？」

………はアー、全くお前ガあそこに居るだけデ他派閥へノ牽制になつタというのニ………ハオウエルトなんて結構必死ニ飛び回つテいたゾ？」

「ははは。ハオは真面目だね。仕事なんて別にしてもしなくてもウチの組織に取っては関係無いのに。今度労ってやらないと」

「ああ、そうだな………仕事をする必要は無イとか言うお前の代わりにナ」

黒い仮面をした男はさっきとはうって変わって少々、苦笑いする

「……本当だよ？第一にしてウチの組織に明確な目的は無いしね。ウチの組織は外れ者達が勝手に集まってそれぞれ全く別の目的のために利用され利用しているだけだよ。」

今は資金稼ぎとか諸事情により警備員と暗殺者を足して2で割ったような事を『仕事』ということにしているけどね。本来はこんな仕事やる必要は無いんだよ」

「……………」

男は何も答えない

それからしばし訪れる沈黙。二人は作業に没頭する

「……………とくるテ」

先に沈黙を破ったのは男だった

どうやらさっきの話題はしたく無いらしく、違う話を出す

「瞬まはたきの方八どうしたか知ってる力？旅人に負けた事は分かるが……それ以来姿を見てない。アイツは不死身だシまさか死んだ何テ事は無いだ口？」

瞬とは、オレンジの帽子を被りゴスロリ服を着た、一瞬を狂人的に好む女の事だ

「ああ、彼女なら奥の部屋に置いた回復装置の中だよ。何せ体が9つに分かれるほどの重傷だったからね」

「それほどノ状態になってモ死ねないのかアイツは……………何と力してやりたいナ」

「……君って何だか優しいよね。ウチの組織ではとつても稀な事に  
「そんな事八無い。早く死んで欲しいと思う優しい奴なんテどこに  
いるんだ？」

「ははっ確かに。

でもボクの引越しを、頼まれ無くても仕事をしろとかブツブツ言い  
ながら手伝ってくれているのはどこの誰かな？」

「うぐ………こ、コレはだナ………ひ、引越しガ早く済めバ  
お前が仕事ヲしてくれるかと思っテ………」

「ははっ。そうなんだ。ありがとう」

夢音の顔は大して変わらない。

しかし、対照的に黒い仮面をした男の顔は微細な所もころころ変わる  
今、頬が僅かにだが赤く染まっている

「と、とにかクまずは荷解きダ」

「……でももうこんな時間だし、夕飯にしよう」

夢音は時計を見ながらそう言う。

今の時間は午後7時。ちょうど空も完全に暗くなり、夕飯時である。  
作業している内に、こんな時間になっていたようだ。

「君はどうするの？帰るのかい？それともボクと一緒に外食にでも  
行く？奢るよ」



「ぜひ御相伴させて貰おう」

そして黒仮面は一瞬で平静を取り戻し即答であった

\*\*\*

「ああ、なんて醜いのは………」

ある一室。

そこにあるのは怪しげに光る機械と、それから伸びる大量のコード類。

そしてその全てのコードが繋がる一点には、何やら血のように赤黒い、しかし何故か透き通るような液体が詰まった透明な球体が宙に浮かんでいた。

その球体の大きさは直結3mほど。人間が一人ほど入るくらいだ。

案の定、その中には一人の女がいた。

名前は瞬<sup>まはたき</sup>。ただいま肉体再生の真つ最中である。9つに分かれた肉体は接合され、何とか人の形にまで戻ってきている

彼女は不死身なのだ。これは比喻表現でも何でも無い。ただの事実だから、本来間違い無く死ぬような状態でも生きている。そしてその状態でもはつきりとした意識がある。

普通はとつくに死ぬほどの激痛。それが彼女の意識に襲いかかる。しかし、彼女は平然としていた。なぜなら彼女はすでにこれを遙かに越える地獄を味わってきているからだ。

そんな彼女はふと上を見上げる。そこには天井は無い。吹き抜けみたいになり、そこには暗闇しか見えない。おそらく魔術でも使われているのだろう

そして、その部屋に何か……淀んだ声が響く

「……サナイ……」

不気味な声

これは瞬が発した声では無い。音源は暗闇の中だった

「……許サナイ……殺シタイ……」

ついにその声ははっきりと聞こえた。

明らかに酷い憎しみのこもった声。そして、それはまるで頭の中に直接響いてくるかのような声であった。

しかしその声を聞いた瞬は、不気味に思ったり、恐怖したりはしない。彼女は死にたいからだ。恐怖なんて意味も無い

「そうね。じゃあ私を殺して」

そして瞬が言葉を紡ぐと同時にした行為

ガシャーン

そんな音を上げて、透明な宙に浮かぶ球体は壊れた。いや、瞬の手によって破壊されたのだ。

「……さてと」

彼女は壁に立てかけてある自分の相棒である大鎌と、普段被っているオレンジ色の帽子を深々と被る。

彼女が今着ているのは白の……手術着のようなものだ。今の彼女服装を見てみると、非常におかしい。異常である

ドサッ

そんな音がした

「あら？まだ回復していなかったみたいね」

まるで他人事のようにだ。

しかし、その様子を見ている人からしてみれば壮絶とするだろう  
何故なら鎌を持っていた方の左腕が、肘からちぎれ落ちたのだから。  
しかし彼女は何ともないような様子で右手で鎌を拾い上げる

「私はこれ以上醜くならず済むのかしらね」

彼女は地面を蹴って吹き抜けの暗闇の中へと飛んだ。

……………得体の知れない『何か』に殺されるために

22ページ目 とあるマンションに現れるモノ（後書き）

という感じで次回に続きます。

これからも旅人日誌を宜しくお願いします

## 23 ページ目 裏の主演（前書き）

今回は色々と普段とは文章を変えております。

あと、タイトルを含めて意味不明な点が多いですが気にしないで下さい

## 23ページ目 裏の主役

「ふう、酷い目に合った……」

リズミアは自室にて、男装メイクも終わり静かにコーヒーを飲んで  
いた。

「やっぱり鈴音を実験台にするのは無理か……面白そうだったのに  
な」

彼……いや彼女は少々、面倒臭がり屋である。

そんな彼女が自ら動くのは面白さを求める時や、実験など自らの好  
奇心を満たすためである事が、ほとんどだ。

そんな彼女が動く要因が一つある

「やれやれ……これ以上面倒臭い事にならなければ良いのにな」

リズミアは下の方を向いて、こう呟いた

下の方といっても見据えたのは床では無く、下の部屋だ

「……すでに手遅れかもしれないけどな」

ふと、机の上に目を向ける。

するとそこにあったのは古ぼけた本。

その本はちょうど真ん中のページの所で開いており、そこには何やら  
赤いインクのようなもので書かれた魔法陣がある

「霊体束縛解除系の魔法陣か……」







ガキン

鎌は化け物の肩口に引っ掛かる。そして瞬はそれを一息に引っこうとするが……

「……っ！」

「……オ……ワ……レ……」

刃はまるで通らなかった。それどころか、鎌に纏わせたオーラが化け物の方へと流れていく。化け物は終われと言う。その時、化け物の背後の魔法陣から漆黒の光線がありとあらゆる方向へと噴射された

\*\*\*

「……なア、夢音」

「大丈夫。分かっているよ」

日が落ちた夜の街中を、二人が屋根の上をまるで飛んでるかの如く走る

「幽霊が出るトいう噂があるって聞いたが、これはいくらなんでも予想外だな……」

「うん。これは予想してなかったよ。こんな偶然があるなんてね」

二人は食事の後、すぐに異変に気づいた。  
彼女らが向かうのは……2時間前に出ていったばかりのマンション  
の一室

「まさか、あの部屋の幽霊がおよそ半年前、『山上島』で起きた事  
件の傷痕の一つとはね」

二人の速度は、とてつもなく早い。人の目にはとても止まらない速  
度である

僅か30秒。それで着いた  
すると、二人はドアに書かれた、血のように赤い魔法陣を見つけた。  
リズミアの部屋の本に書いてあった物とも、化け物の背後に書いて  
あった魔法陣とも違う

「…魔術的ナ結界か？この部屋一面に張ってある。かなり強固だな」  
「これはリズミアちゃんの書いたものだよ。面倒くさがり屋の彼女  
らしいね。動きを封じるくらいしか働かないんだから。  
……で、それじゃあ行こうか」

ドガシヤア！

夢音はドアノブに手を当てると、そんな荒々しく妙に大きくて不可  
解な音とともにドアは開いた

「乱暴だな…壊して八いナイみたいだが」「こっちの方が早いから  
ね」

そう言いつつ二人は突入した。









ている夢音に対して怒り狂っているのか。分からない

「これで二回目だね」

化け物は起き上がった。

すると、タイミングを計っていたかのように夢音は下に着地する

「さて次は三回目だね」

夢音は軽い調子でそう言う

「……………コ……………ア……………ツ……………」

化け物は声にすらない呻きをあげる

しかし、攻撃はまだ続く

今度の攻撃は、白い手でも黒いレーザーでも無い、『灰色』。

灰色の球体が突然現れたのだ。部屋中万遍無く、なおかつ不規則に。そして、その灰色の球体が現れた後には何も無い。空気すらも無い。空間の消滅というより、空間を食らうと言った方が正しいかもしれないが

「そんな狙いも定まらない攻撃なんて、ボクには当たらないよ」

夢音は静かに、時たま右へ左へズレながら歩いていく

ランダムではあるが、部屋中万遍無く現れる灰色の球体に、何故かかすりもしない。予測も出来ないし、何も規則性の無く現れる灰色の球体がまるで夢音を避けて行っているかのように

ズバァッ！





夢音は静かに右手をあげ、化け物の顔面の目前にまで持つていく。そしてその右手の中指は親指により抑えつけられていた。その攻撃は普通ならば攻撃であるかどうかすら分からない。そもそも攻撃になるのだろうか。

しかし、今回は攻撃となる

「これで最後だね」

化け物の、人間であれば額に当たる部分に照準を合わせる

『デコピン』

その攻撃が見事に決まった

## 23ページ目

## 裏の主演（後書き）

すいません更新遅れました！これからも諸事情のため、8月中は更新遅れると思います。どうぞ暖かく見守っていて下さい。

更新遅れて申し訳ございませんでした！

実は、重度のスランプに陥ってまして……文章が書けないのなんの……。

あと今回の話は伏線を詰め込んでおります。意味が分からない所も度々あると思いますが、ご了承下さい……



頭から被った白い仮面全体に無数のヒビが出来ていく。そして拘束していた鎖は完全に消え去る。  
その瞬間……化け物だったものから放たれた白い輝きが天井の見えない部屋全体に覆いかぶさった

\*\*\*

「……夢音。ちょっと聞きたい事があるんだがいい力？」

黒い仮面をした白髪の男は、赤い髪をした女に問い掛ける

「何だい？」

「……まさか。こんな状況になルとは考えていたか？」

「ははっ。こんな事になるなんて、ボクも予想外だよ」

「お前、本当に何も考えテ無いナ!？」

黒い仮面をした男はつつい大きい声を出してツツコミを入れてしまう。

「あおう……本当に申し訳ございませんでした」

そして、割り込むように最後に聞こえた声の主は、夢音のもので黒い仮面をした男のものでも無い。

「いやいやそんな事は無いよ。ボクも食後の運動になってありがた

いしね」

「そうですか……でも私の気がすまなくて」

「だから謝る必要なんか無いって」

夢音と話している女……それは、空中に浮かんでいた。

それは白い白衣を着た、胸が大きくそこを除いたら、全体的にスレンダーな感じのする、長い髪に星型の髪飾りをした女子大生くらいの美人。その美女は、全体的に白くなおかつ透き通っていた。

「それにしてもまさか、あの化け物ノ正体がコレだなんて……」

「はわわ……」

「べ、別に責め立ててルつもりで八無イのだガ」

あからさまに動揺する美女『幽霊』に黒仮面は弁明をする。

「この件は君のせいじゃないから大丈夫だよ。『彼』……に当てられてしまった不運なだけだからね。

それより……自己紹介でもしようか」

すると、夢音は唐突にそう言い放った。

「はわわ……じ、自己紹介ですか？」

どうやら、白衣を着た星の髪飾りをした彼女は『はわわ』が口癖らしい。さっきから連発している。

「ボクの名前は式城夢音<sup>しきじょうむねね</sup>。一応人間で、年齢は15の女子高生だよ」

「はア、全く。本当に唐突だな夢音。僕の名前八……………」

ザアアツ

「はわ…………風？」

疑問の声をあげたのは白衣を着た、何だか体が透けている彼女。黒い仮面をした男が自らの名前を言うと同時に、突然涼やかな風が吹いたのだ。

「…………なるほどナ」

ここは室内だ。しかも窓も開けている訳でも無い。風が吹くのはおかしいはずだ。

それなのに、黒仮面と夢音は疑問符を浮かべたり警戒もしたりしないで平静だ。

「どうやら、『空白の空間』が閉じているようだね」

そこで夢音の言ったのは、『普通なら』理解の出来ない台詞だ。しかし白衣を着た『はわわ』が口癖の女は手の平にポンと軽く握った拳をおいて、納得したような表情をする。

「『空白の空間』が崩れてるのですか…………なるほど…………それなら納得です」

「ああ、キミは『裏』の方を知ってるんだね」

「はい。そうですっ！ 私って、死ぬ前は山上財閥の方で研究員

をやっている……それ関連で多少は。

『空白の空間』と言えば、一つの世界と、別の世界とを繋ぐ道の出来そこない……でしたよね？」

「そうだよ。『空白の空間』は世界と世界を繋ぐ道が行き止まり、そこに溜まった空間が広がって出来た世界……っと、専門会話はこら辺にして次はキミの自己紹介だね」

「はわわ……そうですね。私の名前は、新橋実菜<sup>しんはしみなな</sup>って言います。一応昔は『山上財閥』って所の研究員だったんですが、今はここで幽霊をしています。

ええっと……これから宜しくお願いします！」

「いちらこそ」

そこで夢音と美女幽霊……もとい実菜は軽く手を握りあった。

\*\*\*

「……お前がとつとト戦いを終わらせてくれれば、こんな苦勞をすル必要は無かったんだけどナ」

そして、黒仮面は軽いため息をはく。そのため息には、少々すでに諦めてるような感情も見てとれた。

「ごめんごめん。つい調子に乗っちゃってね。後でから何でもするから、それで許してくれないかな？」



「ナ、何でモだトツ!？」

その夢音の発言を聞いて、つい大声を出してしまうが必死で動揺を隠そうとする黒仮面。

それもそのはず、女の子の言う『何でもする』とは男からしてみれば理想……最高で、心を貫かれてしまう台詞だからだ。

「……い、いや何でも無い。片付けヲ手伝っテくれルだけで良い。それト、女がそんな事を言うナ! 僕は、お前になん力まるデ興味無かったから良かったもの、普通だったラ………とにかく駄目ダ!」

本人としては落ち着いたように言ってるつもりで黒仮面だが、全く動揺を隠し切れてない。というかむしろ、動揺の度合いが上がっているような気さえする。現に黒仮面の顔は耳の先に至るまで真っ赤だ。湯気が見えるような錯覚さえするほどに真っ赤である。

「ははは、注意しとくよ。でも、どうしてそんなに真っ赤なんだい? ボクはちよつと謝っただけなんだけど………」

「ナ、何でも無い! それよりモ片付けするゾ片付けダ!」

二人は今現在、戦闘により破壊された部屋の片付け、もとい修理をしていた。

ちなみに実菜は、きつとまた申し訳なさでいっぱいになると判断した夢音があらかじめ上手い事、移動させたためにここには居ない。辺りには瓦礫や機械の残骸、肉片や血痕が散らばっている。瓦礫はともかく、他の物は瞬なのである。そして地面や壁はえぐれて、無数のクレーターを見る事が出来る。

おそらく、いや間違いない魔術により部屋全体が強化されていない

ればマンションが崩壊していたであろうほどだった。

「……夢音」

片付けをしている最中、ようやく黒仮面は落ち着いたのか、夢音の名前を呼ぶ。

「なんだい？ 黒仮面君」

「いや、片付けながら今回の事のあらましを纏めておこうかと思つてナ」

「……本当にキミは真面目だね、ボクにはとても真似できないよ」

「お前が不真面目にモほどがあるだけダ……デ、今回の件ハ……」

「『空白の空間』における『何物かの』戦闘により空間が破壊され、特殊な魔術によって『空白の空間』に近い所となったこの部屋に漏れ出た魔力が溜まり、ここに住んでいた彼の力に当てられてしまった『幽霊』ちゃんが目覚めて起きた事……だよね」

「えらく簡単に纏めたナ……まア確かニその通りダ」

そうして黒仮面は上の方に顔を向けた。

そこにあるのはただただ高い壁。天井は見えず、暗闇に包まれている。しかしそこには、『風』が吹いていた。

「『空白の空間』カ……」

黒い仮面をした男はぼつりと呟く。

「そうだね……普通ならば、『有り得ない』事。でも、ここなら……いやこの島『山上島』にはその『有り得ない』事が起きる」

「……そうだな」

夢音の言葉に黒仮面は同意する。

「この島には異常が溢れている」夢音の台詞とともに、ちょうど上方の風が吹きやんだ。

「そろそろかな。『彼』……鳥崎君が動き出すのも」

夢音の台詞は何の脈絡も無いようで実は繋がっている。

ザアアア

次の瞬間、一旦止んだと思った風がまた吹きはじめた。

## 24ページ目

## 異常なる島（後書き）

本当に更新遅れてすいませんっ！ 次回からは日常編に戻ります…  
…でも中編ネタはあるのに日常編のネタが無いという事態

ページ裏2      キャラ人気投票に関するお知らせ（前書き）

今回のページ裏の内容は、サブタイトル通りでございます。  
それと、地の文が無い内容を書くのが下手になってる……。

## ページ裏2

## キャラ人気投票に関するお知らせ

えーもしもし。マイクの調子OK。

どうも。作者の正体不明です！ 今回は少々唐突ですが、物語も一段落ついたので二回目のページ裏という事でございます。

鈴音「で、今回は何をするんだよ？」

おお。よくぞ聞いてくれました！

鳥本「やけに鬱陶しいな……いや、いつも通りなのかもしれんが」

鳥本君。気にはしては何にもならないサ。

鳥本「……緑。コイツを今この場で殺しても、全然問題は無いよな？」

緑「はい。その通りでございます」

へ？ 鳥本？ ちょ、ちょっと待ってくれまだ死にたく……ぐぎや  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああ……！

鳥本「脈は無いな。瞳孔も開いている……作者が死んでしまったから俺が司会をしよう」

鈴音（死んだんじゃないかってお前が殺したんだろ……！）

緑（でもまあ作者様の事ですから、すぐに生き返ると思いますけど

ね)

蘇った!

鈴音「つて早えよオイ!? 鳥本が司会をやるつて言った直後にかよ!?」

鳥本「前代未聞の速さの蘇りだな……動く死体か?

……まあそれはいい。これで俺が司会をする必要も無くなった」

……何だか酷い言われようだけど、気にしないようにする。

さてはて、それではまず最初に……というかこれが主題なんですけど、とある発表をしたいと思います!

鳥本「また新しい企画か何かか?」

その通りでござる!

……なんと、『キャラ人気投票』を行います!

鳥本「ここは定番だが、言わせて貰おうか。誰も投票しなさそうな気がするな。もしくはごく数票か」

う……と、鳥本。不安になるからそれを言うのは、定番だけど止めてくれえっ!

鳥本「それにしても、この企画……タイミング的にも一応主人公である鈴音とか、凜歌とかがランク外とかそんな気が非常にするのだが」

鈴音「何も言っていない俺に突然矛先が!?!」

鳥本「事実、それが原因だろう。お前は主人公のくせに、特に主人公らしい事もせずにツツコミを入れ続けているだけじゃないか」

鈴音「うぐ……」

鳥本「さて、鈴音は黙らせたが……作者。企画の説明をしる。このままでは読者に詳しい説明をする前に終わってしまう」

あ、はいはいそうですね……ごほん。それでは説明をしたいと思いません。

その企画の趣旨は名前の通り、『キャラ』の人気投票でございます！投票キャラは、今までに登場したキャラ全てです。ちなみに名前だけ登場したキャラは登場キャラに含まれませんのでお気をつけ下さい。

そして読者様一人一人が投票出来るのは、10票まで！と致します。一人に全部入れるもよし。分散させて入れるもよし。また、投票した後の途中変更も別に構いません！投票場所は、感想欄かメッセージでお願い致します。

鳥本「……未活躍キャラにはまず票が入らないなコレは……タイミングを間違えてるんじゃないのか？」

うぐ………そ、それは気にしないでくれ！

鳥本「無理だな」

ひ、酷いよう鳥本………。

それはそれとして締め切りは………随時、発表すると致します。



鳥本「全くの無計画だな」

緑「今更の事ですよ。鳥本様」

鈴音「確かに……」

み、みんな酷い……。

鳥本「さて、そろそろ会話が終わりそうな所だが、少々文字数が少ないな……作者。何か宣伝したらどうだ」

せ、宣伝ツスカ？

鳥本「そうだ。これからの展開をいくつか紹介したりすれば良いだろう。まあ、予定は言わない方がいいな。まずお前だと守れない」  
相変わらず酷い言い草だ……でもまあ、これからの展開について微々たる宣伝をさせて頂きます。

まずただ今、正体不明が考えてる構想中では暫くコメディイになる予定です。一話完結、もしくは2、3話程度のコメディイ話の連続になるかと思えます。

しかしながら、実は正体不明は新たな長編の構想も考えております。その名も『臃げなる天魔』編！

この長編、詳細は詳しくは話せませんが言わせてもらおうとすると、なんと主人公である鈴音を中心としたメンバーが主になって活躍する話です。

そこで、またしても読者の皆様方から意見を集めたいと思います。この『臃げなる天魔』編を早めにやるか、それとも結構長くコメディイをやってから始めるか、そのどちらが良いか是非ともご意見お待ちしております。

鳥本「それでは、俺たちは読者の皆様方からの投票、意見を待つて  
るからな」

鈴音「それでは、これからもこの作品『旅人と高校生の日常記録日  
誌！?』略して旅人日誌をお楽しみ下さいませ」

それでは今日はここら辺で別れの挨拶をします。また次話  
で会いましょう、さようなら！

ページ裏2      キャラ人気投票に関するお知らせ（後書き）

ということ、感想、メッセージにてどんどん応募して下さい。待  
つてます。  
それではー

25ページ目 ゲームをやるのもほどほどにとか言うけど、それは誰かが怒る

ここで読者の皆様方に重大発表でございます。

なんと旅人日誌人気投票にあたり、期間限定で『小説家になろう』

の作者様でなくても感想を出せるようにしました！

どうぞ評価感想投票なにぞと宜しく願います！

ただし、著しいマナー違反、迷惑行為目的等の感想が来た場合には元と同じ状態に戻しますのでお早めにお願います。そう、できれば鈴音の活躍シーンが出る前にお願います（笑）

「ふあぁ……っ」と

朝、俺はリビングのカーテンを開ける。

すると、とても清々しい日光が部屋の中に差し込んできた。

軽く窓を開けると、風がちょうど良く吹いてきて、心地が良い。

ザワザワと木の葉は揺れて、小鳥はちゅんちゅん鳴いている。

そして俺は軽く背伸びをした後、朝日に照らされたリビングの方を向いてみる。

ピコピコピコピコ

ガチャガチャガチャガチャ

ウーンウーン

チカチカとした画面の光。鳴り響く電子音。コントローラーを叩く音。画面に大きくキャラの顔が出ると同時に発せられる、必殺技らしき音声。

「あ……鈴音え……おはよー……」

「もふもふ……もふー」

「……お、おはよう」

そして、そこに居たのは凜歌、旅人、メルモフの三人（二人と一匹？）だ。

そのうち二人はテレビに映し出されたゲーム画面に向かい、コントローラーを手にしている。ちなみにメルモフは旅人の膝の上で幸せ



「じゃあ、ゲームのやり過ぎで腱鞘炎にでもなったらどうすんだよ！？」

「それは心配のし過ぎだよ！？　そこまでは流石にやらないから！」

「じゃあ、そろそろ真面目にツッコミ入れるぞ」

「やっぱり今日の鈴音の、今までのツッコミは本気じゃ無かったんだね……」

「まあ、たまには俺だってボケてみたいしなあ」

「そんな理由だったの！？　もし鈴音が完全にボケに回ったら……ええっと、世界があらゆる意味で壊れる所だったよ？」

「ちょっと待てい！」

「今なんか聞き捨てならない事があったよな！？　世界があらゆる意味で壊れるって何がどうなってそうなるんだよ！？　世界のバランスが崩壊するとかそんな所か！？　その程度で世界が崩壊して堪るかあぁっ！」

「……………うん。そうだよ

ね鈴音」

「今の微妙な感じな間は何！？　あれ、それはもしかしてマジなのか！？　なあオイ！」

「……………この世には気にしない方が良い事もあるんだよ鈴音」

「うおい！？　なんか無茶苦茶気になるぞ！」

「……………そろそろ本題に入ったらどうだ？」

俺と凜歌が馬鹿会話に突入しかけた所で、旅人が制止をかける。確かにその通りだ。話しが脱線しまくってる。どうせこんな話は冗談に決まってるだろうし……………

……………ほ、本当に冗談だよな？

「そ、そうだな。それじゃあ本題に戻るけど……………何でお前らはこんな朝っぱらの俺が起きる前から、いつの間にかこの部屋に来て二人でテレビゲームなんてやってたんだよ？」

「それは……………気がついたらこうなっていたとしか……………な」

「は？　どういう事だよ？」

旅人の答に俺は明確な疑問文で返す。すると、凜歌がその肉付けをしてくれる。

「それは要するにね……………」

凜歌の話を総合してみよう。

どうやら凜歌は昨日眠れなかったらしい。

すると、凜歌は俺の家の庭の方から聞こえてくる物音に気づいた。

\*\*\*



「んう……………うーん寝れないよう……………」

凜歌は、ベッドの中で幾度も寝返りをしていた。寝返りといっても、実際に寝てはいないから間違いなものかもしれない。厳密にはゴロゴロしていたと言っべきか。その時だった。

ヒュッ

ズシァア！

外の方から空気を切り裂く音と共に、何かか地響きをあげて落ちたような音がした。

「……………鈴音の家の方からみたい……………」

凜歌はその音を聞き、目にも留まらぬ速さでパジャマから私服に着替えて靴を履き、鈴音の家の庭へと向かう。

凜歌は足音を立てないように、なおかつ出来るだけ速く歩く。どうやら多少なりとも緊張しているようだ。ただし、天然か。警戒はしてないが……………

刹那。

「誰だ……………？」

男の、低い声が聞こえた。

その声の主は、鈴音の家の庭に居た人影。

人影は長身だが、少々細身だった。そしてその左手には明確な武器……………小刀が見てとれる。

その様子を見て、凜歌のした行動、それは。

「やつほーっ！ 旅人」

そんな、なんか緊迫してそんな雰囲気は何もかもミクロレベルでぶつ壊す陽気かつ呑気なテンションの音が放たれた。

ちなみにその時、人影がすっ転びかけたのは秘密事項だ。

そしてやつぱり人影の正体は、ぶっちやけた話し、誰でも最初からまるわかりだったであろう旅人だ。

「な、ななな、なんですか凜歌さん」

「『さん』付けはいらないよ」

あまりにあんまりなこの状況で動揺しまくった旅人は、なんか口調が色々とおかしくなっている。はつきり言わなくても変だ。

もしこの場で、普段の旅人を知る第三者が入れば間違いなく爆笑であっただろう。

そして凜歌のツッコミも、あきらかに軸がぶれている事も爆笑の一要因だ。ちなみに凜歌には悪気は一切無い。全ては天然だ。天然が悪い。そうとしか言えない。言いようが無い。

数分後

「……………で、こんな深夜にどうしたんだ？」

ようやく平静を取り戻し、小刀を収めた旅人が凜歌に尋ねる。

「あーっと。実はちょっと寝れなくて起きていたら、ここからなんだか音が聞こえてきて、『何だろう？』って思ってたね」

「そうか……………それは悪かったな」

「いやいやそんな事は無いって。で、何をしてたの？」

凜歌は旅人の周りを見渡してみる。

旅人の足元の地面には、力強く移動したのか足跡がつき、なおかつそこには大剣が突き刺さっている。

旅人の隣にある実寸大の人形は、胴の所から真つ二つに切り裂かれ、頭がある部分は地面に落ちている。

そして当人である旅人は、軽く汗を書き書いて、左手には小刀を持つていた。

そこから凜歌の出した結論は。

「……………一発芸？」

「……………一体何でそんな結論に至る？」

「ええっ!?!? 違うの? 刀の先から水を吹き出したりその人形を切ると噴水のように水が吹き出すんじゃないの?」

「いやいやいや水芸か? それは暗に俺に水芸をしると言ってるのか!?!?」

「じゃあ……………民族舞踊?」

「それはまあ、分からない事も無いが……………」

「確か……………この後裸踊りとかするんだよね?」

「だから一体俺に何を求めているっ!?!?」

「え……違つもの？」

「なんだそのキョトンとした顔は……まさか本当にやると思つていたのか？」

「……やはりツツコミは慣れない。鈴音のようにはいかないな……。それはともかく、俺がしていたのは剣術やらの修練だ。毎日やらな」と体が鈍る

「へえーそうなんだ。鈴音と一緒にだね」

「『鈴音と』？」

「あーっとゴメン。気にしないで」

「……そうか」旅人はあまり詮索はしないタチのようだ。その言葉を聞いて、つい失言をしてしまった凜歌は、軽く安堵の息を吐く。

すると、旅人は。

「……とりあえず、今日の所の修練はもう終わりだ」

突然こんな事を言い出した。

「え？ もう？」

「時間的にも遅いからな」

「うわー……どうしょ。私、今日は寝れないから旅人の修練をずっと見てようかと思つてただけ……仕方が無いよね」

旅人の言葉は正論だ。それに凜歌は渋々ながらも納得し、引き下がるほかは無。

「どうしよう…… 鈴音も寝てるし……」

そして凜歌は暫く考え込む。これから何をして眠たくなるまでの暇つぶしという点だ。

「……………それじゃあ俺は寝る事にする」

そう考え込んでいる凜歌を後にして、片付けを始める旅人。

「……………そうだ」

何を突然思いついたのか、凜歌は片付けをする旅人を置いて鈴音の家の中に入っていく。

ちなみに凜歌は鈴音の家の合い鍵持ちだ。同じく鈴音も凜歌の家の合い鍵を持っているのだが、鈴音の方はほとんど合い鍵を使う事が無い。

数分後。

チュドーン

ドカドカドカ

ガチャガチャガチャガチャ！

「っ！？」

付近の迷惑にならない程度に鳴り響くゲーム音。それに驚いた旅人

は、大して大きく無い音なのだが、つい耳を全力投球豪速球で耳を塞ぐ。

「一体何をやっているんだ!？」

「あ、旅人。私はテレビゲームをやってたんだよ」

旅人が見た所に居たのはやっぱり凜歌。

テレビ画面の前に座って何かを操作していた。

「テレビゲーム？ 何だそれは？ テレビで殴り合う戦いか？」

「いや、違うよ!？ というか一体なんなのそのゲーム!？」

「じゃあ……テレビで殺し合うゲームか？」

「なんか、より一層物騒に!？」

「ならばテレビを海に沈める競技か!？」

「環境に悪そう!？ それになんてシユールな光景!？ というか一体何でそんなのが思いついたの!？」

「なら……」

「もういいよ……なんか正解しそうな気がしないもん」

テレビゲームという単語自体聞き慣れないのか、なんかもうツッコミ所満載だ。

「……じゃあ、やってみない？」

次に凜歌が放ったのはこんな言葉だった。

\*\*\*

「なるほど。そういう訳かよ……………てめえら、ゲームのやり過ぎだあつ！ー！」

「う、ゴメンね鈴音！」

俺の正体不明の謎の気迫に圧されたのか小さくなっている凜歌に、そして何故か旅人も。

「まったく……………その時からずっとやっていたのかよ？」

「うん……………ちょっと夢中になっちゃって」

「やっぱりっーか。凜歌……………お前強すぎるんだから、少しは手加減してやれよ……………そして旅人。お前の場合はきつと、もうまるで勝てなくて意地……………もしくはヤケクソになってるだろ？」

「すまない。その通りだ……………いかにゲームと言っても一回も勝てないねは悔しくてな」

「そりゃあまあ……………凜歌は、さるゲーム大会で優勝するほどの実力者だからな」

「……………？」





25ページ目 ゲームをやるのもほどほどにとか言っけど、それは誰かが怒る

うっ……コメディ編のネタが無い……

## 26ページ目

## やっぱり普段と変わらない日常（前書き）

更新が非常に遅れて、申し訳ございませんでした！ 旅人日誌をこれからもよろしくお願いします

それは、とある日の事だった。

「ハンバーガー大食い大会？」

「そうだ！ チラシで見つけたのだが……どうやら、ロットリアというハンバーガー店で、ハンバーガー大食い大会が開かれるらしい」

今、俺と旅人は昼休みの学校の屋上にて話していた。

そして言わずもがなか、やけに鼻息を荒げて俺に話しかけているのが旅人だ。

ちなみに何故屋上かと言うと、教室だと旅人のファンクラブやら周りから、サラウンドで見られていて落ち着かないからだ。

……ああその事を思い出すと、ムカついてきた。今すぐにでもぶん殴ってやりてえ。っと止まれ！ 俺の右拳！ 握りしめて振りかぶるうとするんじゃない！

「それでな……優勝商品が、今回一品限りのハンバーガー、その名も『特別版無限大バーニングスペシャルギガバーガーEXカスタム 龍王モデル』なんだ」

「ちょっと待った。相変わらずツッコミたいんだが、なんだよその無限大なんとかバーガーとかいう、ヘンテコな名前のハンバーガーシリーズは！？」

「違う！ 『無限大なんとかバーガー』ではなく、『特別版無限大バーニングスペシャルギガバーガーEXカスタム 龍王モデル』だ！」

「ツツコミ返す所がちげえよ!？」

旅人は、ハンバーガーに関する事だけは何か譲れない物があるらしい。なんだコイツの異常なハンバーガー好きは。ハンバーガーみたいなジャンクフードの食べ過ぎは味覚を壊すぞ？

「……今ハンバーガーを馬鹿にするような事を思ったか？」

「い、いえ！ 滅相ありません！ だから殺気を放つのは止めて下さい！」

旅人からふと放たれた殺気に気づいて、つい敬語になる。

「おっと、すまない。それでは本題に戻ろう……この大食い大会は三人一組での参加なんだ」

「ふーん……で？」

「参加し……」

「断る」

「即答か!? というかまだ途中までしか言っていないが!」

「もう大体読めてんだよこの流れは！ 参加して欲しいだとか、そうとしか読めねえんだよ！  
それに、参加費だつてかかるんだろ？ 腹壊す可能性だつてあるし、参加しないほうが結果的に利益なんだつて」

「むぐ……し、しかし」

「当たるんなら他を当たりやがね。あ、当然参加費は出さねえからな」

俺がそこまで言った所で、階段を駆け上がってくる音がしたと思ったら、複数人の声があった。

「鈴音えー！ ゴメン待った？」

「ん？ なあに二人つきりで話しとるんや？ はっ。まさか愛の告白！？」

「なんでもBLと結び付けるのは良くないと思うよ？ 例えばいがみ合ってるライバルが二人で話しているとかはともかくさあ」

「それも大して変わらんとと思うんやけど！？ 違いが分からへん！」

「なんとか女の子たちと間に合ってたぜ……」

「うー。腹減ったツス」

来たのはいつものメンバーだ。凜歌、夫婦かどうかは分からない漫才をしながら来た魅麗と響、そして聖鳴に武士子。どうやら諸事情のため遅れたらしい。

「そんで、なに話しとったんや？」

相変わらずなエセ関西弁で首を突っ込んでくるのは魅麗。

「ハンバーガー大食い大会の話しだ」

それに答えるのは旅人。

「ハンバーガー大食い大会やて？」

「そうだ。それでこれは三人一組の参加なのだが……組んで参加してみないか？」

そこで旅人は、この場の全員に向かってほとんどなりふり構わずに聞いた。

しかし、俺にはぶっちゃけどうなるか予想がつく。

「すまへんがパスや」

まず真っ先に断りを入れるのが、関西弁の背の低い妹キャラでピンクの髪をした魅麗だ。

「僕も止めとくよ」

「俺もだぜ」

次は響と聖鳴の男勢が続く。ぶっちゃけあいつらには、わざわざ参加したくも無いし、旅人に対してそこまでの恩も義理も無い。それに響は大食いには不釣り合いな体格だし、聖鳴は……まあ、諸々の事情により目立つのを嫌うのだ。

「うーん……私も止めとくよ」

ちよっと考えるそぶりを見せた後に断るのが凜歌。普段は結構良く

食べるが、最近旅人のせいでハンバーガーを食う事が多く、ハンバーガーには飽き飽きしているのだ。  
そして最後に残った一人。こいつの答えはもう決まってるだろう。

「私も無理ッスね」

残った一人、名前を鳴海 武士子。

その答えを聞いて、俺が思った事は一つ。

「……………て、天変地異の前触れか……………」

「富士山噴火かもしれんで!？」

「これはきつと大地殻変動の前触れかと思うけど」

「……………明日、空から氷柱が降ってくると思うよ?」

「いいや、凜歌。氷柱程度じゃねえと思うぞ? そつだな……………太陽系全惑星の大群が地球に降り注ぐとか」

「太陽系全惑星の大群!？ ……まあ、十分ありそつだよね」

「いいや、皆まだ甘いぜ。全部が起きるに決まってる!」

「それだあつ!」

「『それだあつ!』を皆で大合唱ってどういう事ッスか!? といつか色々と説明を求めるッス!」

誰が言った台詞なのかは上から俺、魅麗、響、凜歌、俺、凜歌、聖

鳴、武士子を除く全員で、最後にツツコミを入れたのが武士子である。

「当然の反応だろ!? お前が大食い大会に参加しないだなんて、破壊神以上の破壊の力で世界滅亡のとてつもない大ピンチだぞ!? お前は世界の全てが混沌の鍋焼きうどんへと突っ込んで、破壊神と裁縫道具持った電車が豆腐の角に頭ぶつけてビクバンしても良いと言っのかあっ!?!?」

「いや、もう意味が全く分からないツスよ!?!?」

「リアルでこんな意味の分からない事が起きるかも知れねえだろ!? 大食いの代名詞とも言える武士子が大食い大会に参加しねえなんて、多分世界が滅亡でもしない限り有り得ねえ! いやきつとそうに違いない!」

「いや、私にもちゃんと参加出来ない理由があるツスよ!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………え?」

そこで黙りこくった俺たち。

「な、何ツスカ。皆してその『想像もしていなかった』という顔は」



その様子を見て、珍しい事に明らかに動揺を示す武士子

「……………ゴメン」

「あ、謝らないでほしいッス！　なんかこう、色々胸の辺りが辛  
いッスからああ！」誰かがポツリとそう言うと、武士子はその場に  
うずくまって軽く涙目だ。

……………や、やべえ。今の武士子が意外と可愛い……………！　こん  
な一面があつたんだな武士子。

すまない。今までお前の事を誤解していた。

「と、ところで理由つてのはなんなんや？」

そこで魅麗が話題の方向転換を計るために流れをぶった切つて武士  
子に尋ねた。

心無しか、魅麗の両ほっぺが赤いのはおおかた武士子の隠された可  
愛い一面に気づいたからだろう。その気持ちは良く分かる。

「……………その日は旦那に連れ添つて、日本全国甘味ツアーに行くんッ  
スよ」

前言撤回。やっぱり武士子は武士子であった。

「それじゃあそろそろ飯食うッスよ」

そんな武士子は空腹に耐え兼ねたのか大きな重箱……………おそらく武士  
子専用の弁当をとり出す。

「そうするか。雑談ばっかで昼休み終わっちゃうしなあ」

「うん。そつだね」

武士子の意見に皆賛成な俺たち。

「……あれ？ そついえば旅人は？」

そんな中、響がこんな事を言い放つ。

そつだ。そう言えば旅人はさつきから一言も喋っていないかった。旅人はどこだろうと辺りを見る。すると。

……なにやら、重苦しくまがましい、どよどよという効果音がダイレクトで聞こえてきそうなオーラを放つ旅人が、静かに佇んでいた。

「お、おい！ 旅人！ 大丈夫か！？」

「大丈夫だ……問題無い」

「いや、明らかに大丈夫じゃないだろ！？ まさか俺たちの他にハンバーガー大食い大会に誘えるような奴が居ない。もしくはハンバーガー大食い大会に参加出来ないのがそんなにシヨックだったのかよ？」

まあ、そんな事は無いよな？ と言いつつ尋ねてみる。

「……………」

「む、無言！？ ま、まさかお前……………」

「……………仕方が無いだろう。」

話しかけると、なぜか男は『この男の敵が！』と言われる。

女は顔を赤らめて逃げてしまつか、気絶してしまつかだから、どうしようにも無いんだ」

……忘れてた。コイツは顔がとても良いんだ。しかも口数も少ないから、クールに見えてとてもモテるだろう。

やっかいなのは、当の本人がそれに気づいていない事である……くそつ。死ねば良い。

……チツ。でも、こんな事を気にしたって仕方がねえか。

「なあ、皆」

そこで場の空気が少しだけ変わったような気がした。さっきまでの和やかで穏やかな空気から、張り詰めたような緊張した空気へ。

「分かってるぜ」

「うん。そうだね」

ポツリと言った俺の発言に返してくれたのは、隣に座っていた聖鳴に凜歌。

「旅人に、大食い大会に参加出来るような友達を作ってやろうぜ」

他人が聞けば笑ってしまうような事。それを俺たちは真剣に取り組む事にした。

26ページ目

やっぱり普段と変わらない日常(後書き)

人気投票受け付け中です。応募、お待ちしております

## 27 ページ目

### 友達を作ろう漫才会（前書き）

読者の皆様方、ここの所更新が遅れ遅れで申し訳ございません。弁明の仕様がございません。

こんな駄目作者が送る作品ですが、どうぞ宜しくお願いします。

前回までのあらすじ。

俺たちは様々な要因が重なって、俺たちの他に友達の出来ない旅人に友達を作る事にしたのだ。

……その様々な要因というのが非常にムカついて、旅人を殺したくなってしまうから、説明したくは無い。ともかくそんな訳だ。

「……と、言う訳でどうすりゃあ良いと思う？」

ズンガラゴツシャーンツ！

「な、何も考えて無かったの！？」

俺の発言に、謎の擬音を響かせ漫画さながらに皆がずっこけた中、凜歌がツッコミを入れる。

「だって仕方がねえだろ。 友達の作り方なんて分かんねえしな」

「本末転倒やな……」

俺の台詞を聞いた魅麗ががっくりと肩を落とす。

「……まあ、気にしても仕方が無いよ。まず、友達を作る方法を考えよう」

そこで空気を沈黙させまいと、響が言う。

「ほな、部活に入るんがええんやないか？」

「確かに、部活に入るとそれ繋がり友達が出来るからね」

そこで始まる討論会。まず口火を切ったのは魅麗と響。

「タイミング的にこの時期に部活に入るのは中途半端じゃないか？  
それに旅人本人が興味を持てる部に入らないと駄目だぜ」

「ほんじゃあ……旅人の趣味ってなんや？」

聖鳴の台詞に呼応して、魅麗が旅人に向かって尋ねる。

「……メルモフを愛でる事だが……」

瞬間、場が凍りついた。

「め、めるもふうっ？」

「確か、あのモフモフとしていてフワフワと風船みたいに移動する  
変な生物の事だよな？」

「うん。そうだよ」

魅麗、響が俺たちに尋ね、それには凜歌が答える。

「……ともすると、旅人が入るべき部はメルモ部……」

「そうそう、メルモ部や……ってそんな部あるわけないやろっ！  
メルモフ研究部や！」

「いや、それも無いと思うよ」

「それは盲点やつ!」

「はいはい魅麗に響、そこで漫才やってないで話しを戻すぞ」

魅麗と響が夫婦漫才初めやがったから、俺が流れを修正する。こいつら夫婦じゃないのに息ピッタリなんだよなあ……。最初からだつたし波長が偶然合ったのか？

……しかし魅麗は女の子にしか興味が無いからくつつく事は無いらしくて、あくまで漫才の相手として仲が良いらしい。これは本人談だ。ごく自然な口調で自然な会話の流れからたまたま聞いた事だから間違いないだろう。

「そやな。話しを戻すぞ」

「メルモフ愛好会なんて部はまずないから、生物部辺りになるかな?」

すると、響の台詞に旅人が反応して。

「すまない。メルモフ以外のものは食材もしくは敵にしか見えな…

…むぐうつ!？」

「全く旅人は冗談が上手いなあ!」

とつさに目が追いつかないくらい的高速で、旅人の口に弁当に入っていたタマゴサンドを突っ込んで口封じをして、俺は大声で作り返いを浮かべながらそう言った。

なんだか少々笑い方が大袈裟だったような気がするが、気にしない



方針で。他の皆がスルーしてくれるのを期待するばかりだ。

旅人はきつと、『メルモフ以外のものは全て食材もしくは敵にしか見えない……………』ははっ。『冗談だ』と言おうにしたに違い無い。そう信じよう。さもないと旅人はどうでもいいが、俺の世間体が危ない。

『最後のが無くても冗談と受け取ってくれるんじゃないのか?』という意見には正直、賛同しかねる。なんというか……………冗談を言う雰囲気や、表情というものがあるだろう。旅人にはそれがゼロなのだ。むしろマイナスかもしれない。

「生物部も駄目かあ……………」

あ、良かった。そういう意味で受け取ってくれたらしい。

「それじゃあ旅人の特技とかは無い?」

凜歌が旅人に尋ねた。

「特技……………特技と言えるほどでも無いと思うが強いていうなら料理だ」

「へえー。旅人が料理が得意やなんて意外やなあ。どんな料理が出るんや?」

……………あれ? なんか魅麗の言葉を聞いたら嫌な予感がした。

「蛇の丸焼くぼおっ!?!」

「喰らえ! 自家製漬物サンドおっ!」

やっぱりそうかよ畜生！　と思いつながら口の中に特製サンドを気持ち光速を越える速度で突っ込んだ。

「な、何をとち狂ったんや鈴音！？　いきなり漬物サンドを旅人の口に突っ込んで！？」

「いやー。コイツ俺の漬物サンドが食べたく無いって言うからさあ！　やっぱり好き嫌いって良くねえしな！」

咄嗟についた嘘なもんで、つい大声が出てしまう。ええい畜生！　こうなったら勢いだ！

「いやまあ確かに好き嫌いは良くないで！？　しかし漬物サンドって時点でなんか食べたく無いっちゅうのも分かるんやけど？」

「確かに店で市販されてるものとはかく、自家製漬物サンドは…」

「つぐ……………」

確かに、魅麗と響のその気持ちは分かる。だがなあ！　この漬物サンドは絶品なんだよ！　食べてみると分かるって！

……と心の中では思っても口には出さない。これで、もしもマズいと言われたら、俺は即座に屋上からの紐無しバンジージャンプを決行するであろう。

「結構美味いぜ？　この漬物サンド」

「そつだよ。美味しいよ。一口くらい食べてみたら？」



「そやで。また今度作って来て欲しいくらいや！」

「いやいや、お世辞はいいって。それほどでもねえよ。レシピなら今度教えるし、またいつか作って来てやるよ」

なんかこちらの予想を超えて大絶賛の漬物サンド。これだけ褒められるとまた作ってきたくなる。

……それにレシピ教えるほどの事はした覚えはねえんだけどな。

「……所で、会話の流れがズレまくってるが旅人の友達を作ろうか話はどうした？」

すると聖鳴の言葉で一気に会話の流れが元に戻る。

ちなみに当の本人。旅人はサンドイッチで、こちらの苦労も知らずにムグムグとしてる

「そややな……どないしよか」

「友達を作る方法かあ……」

そこで一気に沈黙に入る。

その沈黙を破ったのは意外な人物だった。

「……………別に、そこまでして友達を作る必要なんてあるッスかね？」

鳴海武士子。友達を作ろうか会話に入ってから、一度も会話に参加せずにただ食べ続けていた彼女だった。

「え？」

彼女は俺たちの反応に対して、カツサンドを手に持ったままキョトンとした顔で言葉を続ける。

「そこまでして無理に友達を作っても、それは友達では無いような気がするツスけどね」

「……………」

無言の俺たちに対して武士子はさらに口を動かす。

「友達って作るようなものじゃ無くて、勝手に出来るものだと思うツス。」

作れるものは仲間。仲間と友達はまるで違うような気がするツスよ」

そこで武士子は一旦息を吸って。

「私たちは、友達じゃ無いんツスか？」

……………  
……………

「……………そうだな。武士子の言う通りだ」

「無理に友達を作る必要なんか、無いよね」

皆が口々に言う。

そこに水を差したのが一人。

「……………そもそも俺は、大食い大会に参加出来れば良かっただけ

なのだが」

旅人の台詞に、皆が口を揃えて『……あ』と言った。

## 27ページ目

## 友達を作ろう漫才会（後書き）

最近リレーが流行ってますね。実は正体不明もいくらかバトンを渡されたまま滞納しております。更新の遅れとともにこちらの方も申し訳ございません！

あ、人気投票受付中！

メリークリスマス！

ということのでクリスマスですね。しかし言ってみただけで特に何も意味はありません。

それにしても最近良いサブタイトルが思いつかない……。



結局、旅人が大食い大会に参加出来るようにするにはやはり知り合いを当たってみるのが一番だとかいう結論に達して、手分けをして大食い大会に参加しても良いと言う人を捜してみる事にした。静かな教室で、俺は椅子に行儀悪く座り、一人の男と話していた。ちなみに教室には俺たち二人以外には誰も居ない。

「……で、俺か？ すまないけど、俺も無理だ。大食い大会当日に部活の練習試合があるからなあ」

「そういえばお前の部活って剣道部だったっけ？ 鬼王寺」

「そうだよ。後、出来れば苗字で呼ばないで欲しいなあ。剣なって呼んでくれないか？ 鈴音」

「分かったよ剣」  
鬼王寺きわおうじ剣。それが今俺と話している男の名前だった。

俺と同じクラスで、身長は平均より少し高め。茶髪でそれなりに整った爽やか系の顔立ちをしている。それとなにやら『鬼王寺』という苗字で呼ばれるのが嫌らしい。

席が近くなせないもあって、俺とそれなりに親しくなつた奴だ。……俺がいつものあのメンバー以外で友人が居ないと思つたら、大間違いだからな？ いやまあ悲しい事に友達少ねえけどさあ。

「ま、俺のツテでも誰か参加しようとする奴が居ないか探してみるよ」

「あ、ありがとう剣」

そこで俺は一息置いて。

「……所で今更の事だけど、苗字の鬼王寺はひとまず置いて、剣って名前もかなり変だよな？」

「……親のセンスだ。それでも鬼王寺よりは剣と呼ばれた方がまだ格好がつく分マシな気がするんだよ」

「親のセンスで剣って事は、もしかしたら楯も居たりするのかわ？」

俺は軽く笑いながら言う、当然冗談だ。

「……………」

「お、おい！？ 無言か！？ もしかしたら本当に居るのかわ？

いや盾と書いて『じゅん』と読むなら有り得ても流石に楯は……………！」

「すまない。実は両方居るんだ！」

「マジか！？」

「ああ、マジだ。大マジだよ。それだけじゃない。兄には鎧やら兜も居る」「うおおいつ！？ なんだその武者鎧甲冑名前シリーズは！？ まさか、他にも……………？」

「き、気にしないで欲しいなあ」

そこで剣の顔が引き攣る。

「それに、親の名前のセンスで困ってるのはキミもじゃあ無かったか？」

「うげ……まあ俺もこの女顔と親が付けやがった『鈴音』つつづ名前前で女と間違われまくってただけどさあ」

「……確か、間違われる確率は99%ぐらいじゃあないか？」

「違う、95%だ！」

「大して変わらないような気がするけどなあ」

「かなり違えんだよ。4%も違うんだぞ!？」

「まっ良いか。95%だね……で、とりあえず話を戻そうか。こっちは俺の兄弟と剣道部の方を当たってみる事にするよ」

「宜しく頼む」

「まあ、期待はしないで欲しいなあ。剣道部の面子はまず試合で無理だろうし、俺の兄弟……矢弓姉やゆみさんは遠くに行ってるし、鎧が兄いさんは馬鹿だし。兜兄さんは最近忙しいし、他の弟たちも大食い大会に参加するにはちょっと心配だしなあ」

「実の兄貴を馬鹿扱いかよ？　そして鎧甲冑シリーズで新しく出て来たのは弓と矢で矢弓か……」

「兄弟ってそんなもんだよ。それに俺の兄弟は多いから、一人くらいは馬鹿が居ないと駄目だしなあ。あと矢弓姉さんは鎧甲冑名前シ

リーズではかなりマシな方だ。……あぶみ 鏝なんて名前の妹も居るよ」

「あぶみ 鏝？ あぶみ 鏝ってまさかアレか。馬に乗った鎧武者の足を置くアレの事だよな？ そんな名前のまで居るのかよ！？」

「ああ、残念な事にな。うちは兄弟が多いから、その分マイナーと  
いうかマニアックな名前の鎧甲冑シリーズが増えるんだ……。  
まあ、それでも家族がたくさん居るっていうのは良いものだし、そ  
こら辺は実はほとんど気にしてないけどなあ」

「ふうん……。そういうもんか。俺には兄弟がたくさん居る所か、家  
族が一人も居ねえから良く分からねえな」

「そういうものだよ……。って家族が一人も居ない？」

そこで剣は驚いた顔をした。

「……。しまった、失言だったか。『兄弟が』じゃなくて、つい『  
家族が』って言ってしまった。

まだ、学校で初めて会った奴らには一度も話した事のねえんだけど  
なあ。ちっ、面倒くせえ。

「……。でも、しょうがねえか。ここで切り上げても余計に厄介な事に  
なる。」

「……。俺の両親は、ちょっと前に航空機の事故で二人とも死にやが  
ったんだよ。」

「……。俺の父方の祖父母は生きちゃあいるが、なにやら俺が生まれる  
前に俺のクソ親父と親子の縁を切りやがったらしいから、血こそ繋  
がってるものの家族じゃあねえ。」

だから俺には家族はいねえんだよ」

「.....悪い事を聞いた。すまない」

剣が頭をゆっくりと下げた。

「別にもう気にしちゃあいねえから良いよ。それに、家族はいねえけど家族のような奴はいるから問題はねえ」

「そう、か」

そこで会話が止まったり、俺は席を立とうとした所で、ふと俺の後ろのドアが開いた。

「やあ、二人とも。こんな所で何を話していたんだい？ ボクにも聞かせてよ」

それと同時に一人の赤い髪の女が入ってきた。名前は夢音。クラスは違うが俺の同級生だ。

「よう夢音。調度良かった。今からお前の所にも行くこうかと思ってたんだ。実はな.....」

「大食い大会参加の件だね？ 聞いてたから分かるよ」

「そうそう.....ってなんで聞いていたのに尋ねてきたんだよ？」

「だってさ、会話のきっかけって重要だしね」

「いや意味分かんねえよ」

「全く、夢音は時々訳の分からない事を言っなあ」

最初に俺が突っ込んで、次に瞬が軽く笑いながら言う。  
そこで、俺は剣の台詞に僅かな疑問を浮かべる。

「って剣？ お前夢音と知り合いなのかよ？」

俺の記憶の中では、剣と夢音は一度も会った事が無いはずだ。

「ああ。実は中学校が同じなんだ」

その言葉ですぐに俺の疑問は無くなった。

「そういう事だよ鈴音。……で、大食い大会の件んだけどボクの方に心当たりがあるんだ」

「本当か夢音!？」

俺は食いつくように言う。

「うん、本当だよ。ちょっとしたバイト仲間なんだけどさ」

「そうか……ふう、安心した。なんか手当たり次第で駄目だったからマジで誰も駄目かと思っちまったよ」

俺は安堵して、胸を軽く下ろす。

そこに、夢音の声がさらに聞こえてきた。

「本当に、キミはよくそこまで友達のために動けるよ。なんでキミはそこまでかいがいしく世話を焼くんさい？」

「へ？」

俺は一瞬ばかり、言葉に詰まった。確かにその通りだ。普通ならここまでする必要はねえ。だがなんで俺はここまで動く？ 昔の俺なら間違い無くこんな事はしねえはずだ。

「よく分かんねえよ。理由なんてないかもな」

もしかしたら、ただ『昔の俺』から変わりがたかっただけなのかもしれない。荒れていた『あの頃』からの脱却を望んでいたのかもしれない。

でも、そんな事は今はまるで考えていなかった。ただ友人として動いただけだ。だから分からない。

「……なるほどね。全く、自分自身が出ればそんなに頑張らなくても良かったのにさ」

夢音は明確に呆れたようなそぶりを見せ、やれやれと言った感じで首をふる。

「一度断つちまった以上、また参加するだなんて事は出来ねえよ」

「それはまた変なプライドだなあ」

横から剣が声をはさんできた。

「うつせえよ。俺だって本当は意地っぱりだって自覚してるからな！」

そこで、クスリとした笑いが大きな笑いへと変化した。

\*\*\*

「……………鈴音は行ったか」

「行ったようだね」

鈴音は行き、教室に残ったのは剣と夢音の二人だけとなった。二人とも、先程とは僅かばかり雰囲気が変わっていた。まるでスイッチが切り替わったかのように。

「それにしても同じ中学校かあ。良い言い分を思いついたね。剣」  
「お前が考え無しなだけだと思っなあ」

二人ともクスリと笑う。

「ところで、ちょっと一つ聞いてもいいかな？」

「なんだよ夢音」

夢音は一拍置いた後、軽く息を吸い込んで発する。

「キミが槍館鈴音に干渉しているのは『ただの偶然』か、それとも『狙った』のか、どっちだい？」

それはとてもゆっくりとした、相手に見えない圧力をかけるような口調だった。



「ただの偶然だよ」

剣は圧力なんて関係無しに腕を軽く振って否定を示す。

「ふーん……まあいいか」

一瞬だけ夢音は疑わしい目を向けてすぐに止める。

「信用無いなあ俺は。俺だって学生だよ。友達の人や二人、居てもおかしく無いじゃあ無いか」

「まあ、そうだね……っとボクはちょっと用事があるからここら辺で行かせてもらうよ」

「ああ、気をつけてな」

「そうするよ」

そして、夢音は静かに教室から出て行った。

28ページ目

教室での三人の会話（後書き）

キャラ人気投票はまだ受付中です。どうぞご応募下さい！

## 29ページ目 ほのぼのとした最大級の動揺（前書き）

更新が遅れて、本当に申し訳ございません！ 実はかなり重度のスランプに陥ってまして……次回の更新もかなり遅れるかと思えます。こんな駄目作者ですが、どうか暖かい目で見守っていて下さいませ。

## 29ページ目 ほのぼのとした最大級の動揺

そこは、地平線と呼ばれるものが存在しない。

長い、とても長い赤い床の廊下はどこまでも平坦に続いており、普通ならば地平線に沈みゆくその先は、どこまでも見る事が出来た。

その廊下の壁も、当然かのように床と共にどこまでも続く。その壁の色は一方は白、もう片方は黒だ。そしてその壁には一定の間隔を空けて、同じようなドアが永遠と取り付けてあった。

普通なら目がおかしくなってしまうようなその光景を、足音も立てないでゆっくりでも無く急ぎもせず、平然と歩く一人の男の姿があった。

顔の左半分に黒い仮面を付け、全身をモノクロ色のマジシャンのような服で包んでいる。髪は白く、瞳の色は金色。そして何故か、今日はシルクハットのような、本来ならば黒い部分が白くなった帽子も被っていた。

「……………全ク、この景色にモ僕は慣れてしまったカ」

その男は、軽く嘆息すると足の歩みを僅かばかり速くする。

この場所は『回廊』。どの世界にも分類されず、また神界を除いた魔界、人間界のみならず、それらとは別の次元での異世界へとも通じている。

そして扉の一つ一つが、彼の属している組織のメンバーの所へと通じている。

彼はふと、一つのドアの前で立ち止まった。

そのドアに唐突に『S 05』という文字が現れる。彼はそれと同時にドアノブに手をかけ、中へと入っていった。

\*\*\*

「ハンバーガー大食い大会だト?」「そうだよ。それで、君は出てみるつもりはないかな?」

「断らせててもらおう。……………まア、どうしてもというなら考えない事も無いガ」

夕暮れ時、とあるマンションの一室にて黒を基調としたシャツとジーンズを着た赤い髪の女と、黒い仮面をした白髪の男とが椅子に座り、机を挟んで向かい合うように話していた。

「ああ、じゃあいいよ。なんとなく面白い事になりそうだから、聞いてみただけだしね」

夢音の言葉に、黒仮面は眉を潜める。

「面白い事だト?」

「参加といっても『旅人と同じチームで』という条件つきだったからだよ。もし君が即座に頷いていたら言わないつもりだったさ」

「おい待て夢音。言いたイ事八たくさんあるガ、まず一つ言わせてもらおうゾ?」

……………お前八一体全体学校で何ヲやってるんだ!??」

飛び上がるかのように椅子から立ち上がり、黒仮面は叫ぶように大声を出した。

「ははっ、気にしない気にしない」

それをまるで気にとめない夢音。

「いや気にするゾ!? そもそもうちノ組織と旅人と八敵対関係にあるのだが?」

「向こうは全然そうは思っていないみたいだよ。まあ、気にもとめないと言った方が正しいかもしれないけど」

「それでモ色々と駄目ダ! モシ僕が旅人を倒せばどうすルつもりダ?」

「他のメンバーが旅人を攻撃しないように色々と手を回している君なら、そんな事はしないと信じているからだよ」

その言葉を聞いた黒仮面は明らかに動揺し、しかしそれを必死で隠そうとする。

「ソ、それはお前二頼まれテるから、仕方が無くやっているだけダ! それ二うちの組織のメンバーは仕事の事に無頓着な奴が多いカラ、大した手間に八ならないしナ!」

「ははっ。君は優しいよね。ボクの頼みなんて聞かなくても良いのに……ありがとう。」

その日頃のお礼と言ってはなんだけど、今日は何か食べていきなよ

「そ、そうカ」

まだ動揺を静め切れてない黒仮面を横目に、夢音は立ち上がる。

そして隣の部屋に入り、複数枚の紙を持って戻ってきた。

「さあ、どれがいい？」

夢音は机の上に、複数枚の紙……食べ物書かれたチラシを広げる。それを見た黒仮面は一瞬目を丸くして、すぐにそれを理解し、何やら僅かに残念そうな雰囲気漂わせる。

「……………出前か？」

「そうだよ。もしかしたら、ボクの手料理だとも思ったかい？」

その言葉に黒仮面は先程よりも明らかに大きく動揺する。

「ソ、そんな事は無いゾ！ ケ、決して期待と力していたわけで無いからナ！ 勘違いするなヨ！」

……………どうやら期待していたらしい黒仮面は、顔を赤くし妙な汗をかきつつ、手を大きく振って否定を示す。

「ははっ。そうなんだ。でもまあ、そもそもボクに料理は作れないしね」

夢音のあっけらかんとした台詞に対し、黒仮面はキョトンとする。

「料理ガ……………出来ないだト？」

「そうだよ。知らなかった？」

「ソ、そうダ知らなかつタ。アあ知らなかつタとモ」

黒仮面は平静を装ってるものの、内心猛烈に落胆しているのは秘密である。

口調が少々おかしくなっているが、それを聞くのは野暮というものだろう。

「じゃ、じゃあ普段の食事はどうしているんだ？」

そこで彼はなんとか違うベクトルの話題へと転換しようとする。

「それは普段から弁当とか出前とか外食とかだよ」

「それだと健康に悪いだろう！」

相変わらずな調子で彼女が答えると、黒仮面は目を泳がしながら、先程から椅子に座らずに立ったまま言った。

おそらく先程の事が恥ずかしく、話題を必死に変えようとするあまりに、本人でも自分の言ってる事がよくわかって無いにも違いない。

「僕が今日の夕飯を作ル！」

現に、今の黒仮面は言ってる事からして正気では無かった。

それに対して、まるで顔を変えない夢音。もしかしたらそれは苦笑い、もしくは困っているのかもしれない。

「ははっ。とりあえず落ち着こうかキミ」

そこで一旦、彼女は黒仮面の横に立ち、両肩を掴んで強引に座らせようとしたその時。



「おっと！」

あまりにもほのぼのとした空気に油断していたのもあるのだろう。先程広げたチラシのうち、下に落ちてしまった一枚を踏み、彼女は足を滑らせた。……………黒仮面を巻き込む形で。

ドーンという大きな音がした。しかし一応このマンションは防音な上、さらに防音効果を独自に堅固にしてある。それに下に住人は居ないのだ。だからこの音や、先程までの二人の会話も含めて違う部屋の住人には聞こえないはずだ。

「……………ッ!?!」

今の衝撃のおかげで、少し平静を取り戻した黒仮面はすぐに平静さを失った。今の自らの状況に気づいたからだ。

床に倒れた彼、下にひんやりとした感触がある。横を見ると、ちょっと前まで座っていた椅子が倒れていた。

そして上、もうお気づきだろう。そこに居たのは、赤い透き通るような髪をした一人の女の子。夢音が彼に覆いかぶさるように倒れていた。

それだけでは無く、彼の手の中の感触、それはとても柔らかでなおかつ張りも弾力も兼ね備えた、意外と大きいものであった。それは二つある。

黒仮面の顔面がみるみる真っ赤になり、彼の思考回路がオーバーヒートし、熱暴走を起こしかけた。

「はわわ……………」

突如としてそんな声が聞こえた。その声を認識した時、続けざまに違う女の声が聞こえる。

「うるさいと思って来てみたら……まさかこんな事だとは予想外ね。」

……まあ男女の諸事には手を出さない事にするわ」

確かに他の住人には防音作用のために聞こえない。しかし、同居人ならどうだろうか。

一人は髪に星型の髪留めをつけた幽霊。彼女は顔を真っ赤にしてこちらの方を見ていた。

もう一人は白い、多少青っぽい髪に、死んでるような白い肌をした女。彼女はこちらの方を特に表情も変えず見ていた。

「コ、これハ……！　これはアアアッ！！！」

その二人の姿を視界に捉えた黒い仮面の男は、そこで本日最大級の動揺を見せた。

29ページ目 ほのぼのとした最大級の動揺（後書き）

次回も夢音・黒仮面サイドの話になるかと思えます。

謝罪するより他に正体不明がする事はございません。あらかじめ前話で更新遅れると言いましたが、あまりにもあんまりなほどの更新の遅れ、真に申し訳ございませんでした。

それでは今回からシリアスになります、気長な目で見守ってください。つつお楽しみになられると幸いです。

「はア……こんな事になルとはナ」

「ははっごめんごめん。つい押し倒しちゃった事には謝るよ」

「……ソ、その事は言わないでくれ。なんという力、なまめかしく聞こえてしまウ」

太陽はすでに沈み、完全に暗くなった道を一組の男女が歩いていた。女は透き通るような赤いロングウェーブの髪をした、黒を基調としたシャツとジーンズというボーイッシュな服装をしている。

男の方は白い短髪をして、顔の左半分には嘲笑するかのような表情をした黒い仮面を付けている。服装はモノクロ調の色彩に手品師の服のような形をした特異なものだった。

二人とも、十二分に人の目を引く格好である。しかし、二人の真横を通り過ぎる人も遠くから見ている人も特には気にした様子は無い。魔術的なものか、はたまた別の力なのかは分からないが、不思議な事に違和感無く、服装に関しては辺りの雰囲気と空気に溶け込んでいるのだ。

そのうち黒い仮面をした男の方が、何かを思い出したかのように顔を耳まで真っ赤にして自らの手をまじまじと見た後、何かを忘れようと振り払うかのように手を上下に動かす。

「一体どうしたんだい？　急に手を動かして」

「ナ、なんでも無い。コ、これは腕に何か虫が付いたから振り払ってただけダ！」

「ははっ。そうかい。キミは堅物っぽいけど時々おかしい行動を取るよね」

「……ッ」

些か難のある弁解を聞いて、まるで子供みたいな何も疑っていないさそうな無邪気な笑い顔をする夢音に、黒い仮面の男はピタリと一瞬全身の動きを止める。そしてそのまま手の動きを止める代わりにさらに顔を赤くした。

……ちなみに、夢音は黒仮面が何とか忘れようとしている事の当事者であるのだが、まるでそれを気にしている様子は無い。いやそれどころか下手すればついさっきの出来事であるのに、細かい所はすっかり忘れているみたいである。

「ソ、そんな事より早くスーパーに行くゾ！ 時間も時間だしナ！」

「ははっ。それもそうだね。君の料理、期待しているよ」

そして二人はぽつぽつと電灯が光る道を歩いていった。

所かわってここはマンションの部屋の扉の前。

そこにあまりに唐突に一人の人物が、さも最初からそこに居たかのようにして現れた。

その人物は中性的……ユニセックスな服装をしており、白いフードを深々と被っていて、顔は口元しか見えないがその口元も男か女かどっち着かずで中性的な感じがする。

肌の色も白く、腕にも余計な筋肉が無いように見えて細い。

見た感じでは、その人物の性別は分からなかった。

ピンポン

その人物は前にある部屋のベルを一回鳴らす。しかし部屋の中からは他に物音は聞こえず、無反応である。

「誰も居ないのかな？」

白いフードの人物が僅かに開いた口から聞こえた声も、男か女か判別し難い中性的なものだ。

そこでその人物は一瞬も躊躇するそぶりを見せず、ドアに静かに手を当てる。

すると、どうした事であろうか。そのドアが手を中心として、まるで水の波紋のように揺れ動いたかと思ったら、すでにその手はドアの中へと入りこんでいた。

それはまるで、ドアがそのままの形を保ったまま水になったかのような光景だ。気づいたらその人物は、すでに水のようになったドアをすり抜けていた。

その一瞬後の事だ。ドアをすり抜けた人物の首に大鎌の刃が当てられた。

「貴方は誰なのかしらね？」

その人物に鎌を当てたのは死んだ魚のような目と白い髪をした女、瞬である。瞬はいつもとまるで変わらない口調でそう尋ねた。

「はわわ……」

ちなみに瞬のずっと後ろには、星型の髪飾りをした幽霊女がはわわ

わと言つて、明らかなまでに慌てている。

鎌を当てられた方は、それらの反応を飄々とした様子で流し目気味で見た後、口を静かに開く。

「私の事か？ 私はそうだな」

そこでわざと勿体振るように間を置いて再度口を開く。

「……………『死神』だよ」

瞬間、周りから音が消えたような気がした。

「はわわっ！？ し、死神ですか！？ わ、私昇天させられるですかっ！？」

死神のその言葉を理解した途端、その沈黙を破り、涙目になって幽霊こと新橋実菜しんはしみなはその半透明な身体で戦闘体制だか、全力で逃げるのだから分からない妙なポーズを取る。

それを尻目に瞬は死神と自ら名乗った人物に対して冷笑を浮かべた。

「死神、ねえ……笑わせてくれるわね。『死にぞこない』。ついつい笑いを堪えてしまったわ。私を殺す事も出来ないくせに、よく死神を名乗れるわね」

「私は君の思っている死神になるつもりは無いよ。死を完全に操るような事が出来たなら、まさしく本物の反則……死神を遥かに越えているじゃないか。

だけど私は人より遥かに高い所で、死をある程度までは操れるし、魂を狩るような事も出来る。だから私は死神だよ」



「相変わらず、反吐が出るような台詞ね。はつきり言わなくても分かるだろうけど、私はあんたが大嫌いよ。だから私の視界から消えてくれないかしら？ さもなくば今すぐに殺すわ」

「それは嫌だな。なんせ私は、いくら殺しても死ねない君が大好きだからね。だからこそ君がそんな事を言つと本当に殺されそうだけど、ここに居るよ」

「そう、なら私があんたを消すわ。影！」  
ブラック

同時に両者は動いた。瞬はその手にした大鎌を手前に引き、首を切断しようとするが、それよりも早く、影と書きブラックと読む者は動き、地に伏せるようにしゃがむ事でその鎌を回避する。

そして足に力を込め、一足跳びで一気に瞬の脇を抜けて移動する。

「逃がすとも思っただの？」

しかしその動作とともに瞬は反転し、距離を詰めようとする。それと同時に影も後ろ向きに走り、その両者の間の差は変わる事がない。やがて影の背中が一つのドアにぶつかり、動きが止まった。

ザシユ

そんな音がし、影の首が宙を飛んだ。

本来ならこのような狭い廊下だと瞬の獲物である鎌のように、巨大な武器は動かしづらはずなのだが、瞬は壁やドアなど気にせず、それもろとも切り伏せたのだ。

「これで一回、殺されてしまったよ」

「そういう所が醜いのよ。潔く死になさい」

「いや、すでに私は今一回潔く死んだよ。まあ生き返ったけどね」  
気がついたら、その切られた首は元と同じ場所にあった。

「同じ事……よっ!」

「おっと!」

瞬は再度切り掛かるが、それは避けられる。

「参った。あらかじめ何回かは生き返るように細工は出来るが、死んだ後に生き返る細工をするなんて器用な真似、私には出来ないよ」

「そう、なら死ぬまで殺してあげるわ」

「それは困るね。第一私は戦闘向きじゃないよ……」

そんな事を言ってる間に、鎌の尖端が心臓を貫きまたしても殺された。

「さあ、後何回殺せば良いのかしらね?」

その様子を、瞬は自分が殺した本人であるにも関わらず他人事のように言った後、汚物を見るかのような目に変わる。  
その時だった。どこからともなく、ある人物の声が聞こえた。

「そりゃまあ、普通は尋ねても言わないでしょう」

突如として、影を庇うようにして二人の間に一人の男が現れる。

その男は黒髪黒瞳、容姿はそこそこ。不可ではない。着ている服は赤と青を基調とした色彩の、どこぞの少数民族の衣装のようなものだった。

名前は黒。<sup>シヤドウ</sup>黒と書いてシヤドウと読む、随分とおかしな名前の男であった。

「だから、私は戦闘はこいつに任せる事にするよ」

「ひとまず、宜しくお願いしますと言っておきましょう」

「だからあんたたちは大嫌いなよ……！」

そうして、戦いは続行される。

Bannon!

夜の住宅街は基本的に静かなものである。少なくともここではそう  
だ。

しかし今夜ばかり、特に彼の周りではそうでも無かったみたいだ。  
またしても彼のすぐ近くで音がし、自らの姿を隠すための影にして  
いる壁の一部が砕ける。

どうやらどこに隠れていても、彼の潜む場所は分かっているらしい。  
非常に整った容姿をし暗闇の中でもその銀髪が映える、旅人と自ら  
を称するその男は、今現在狙撃による襲撃を受けている。旅人の手  
の中には小回りが利く小刀が握られていた。

Bannonとまたしても音がし、今度は壁が弾け飛ぶ。旅人は人体の限

界を越える反射速度で反応し、壁から姿を現し大まかな見当をつけた狙撃手の居る方向へと、緩急をつけランダムに体を左右に振りながら走り出す。

狙撃というものは、本来ならば弾丸が発射されてから2、3秒後になりようやく着弾するものであり、このような旅人の動作は十分意味があるものである。さらに言うのであれば、暗殺を目的にした狙撃手というのは最初の一発が外れたらすぐにその場を離脱するものであるが、この狙撃手は違ったようだ。第一にして、最初の一発目からして遊びのようなものであった。

最初の一発目はこう言っては難があるかもしれないが、『普通の』狙撃であった。使われた弾丸も銃も通常のものであり、だからこそ眠った状態といえども危機察知能力に優れた旅人は、身体強化なども含めた一切の魔術を使わずに避ける事が出来た。しかし二発目から徐々に、徐々に通常では無くなってきた。異常になったのだ。

元来、旅人を殺そうとするのは魔法であったり気功術であったりオーバーテクノロジーであったりと、『異常の力』を知る者ばかりである。今回も例に漏れずそうであったようだ。

(狙撃自体もそうだが、これはそれに増して厄介だな。魔術か銃の性能だかは分からないが、一発一発ごとに弾丸の速度どころか威力も性能も完全にランダム。……しかし、妙だな。壁を貫通する弾丸もあるほどだ。一発ぐらいは当たっても良さそうなものだがな)

再度壁に潜んだ旅人は張り詰めた状態のまま思考を開始した。

今現在旅人は非常に高度な身体強化魔術を使用しているため、普通の弾丸なら十分な余裕を持って見切りそれどころか掴む事さえもが出来る。しかし狙撃手からは幾度も見切る事が出来ないほどの速度と威力の弾丸が連続で飛んできたりもしている。着弾時間もはやコンマ数秒も無い。

それは旅人がそれだけ狙撃手に近づいてきた。という意味もない事

は無いが、それよりも増して弾丸の落差が激しいのだ。  
そう思考している間にさらに事態は進行した。

ドゥーン！

「っ！？」

旅人は真横から飛んできた、非常に早い弾丸を咄嗟に身を屈めて避けた。

今の弾丸はおかしかった。今までの弾丸と飛んでくる方向が明確に違うのだ。それだけでは無い、今までとは音の性質が違う。今までのものは弾丸が何かしらの物に当たる事で聞こえたものだが、今は銃本体から出たものだった。

旅人はその事実を一瞬も間を空けず理解し、身体全体を横へ向け、そちらの方へ忽然と現れた襲撃者へと視線を向けた。

「なかなかやるねえ。油断させておいて、今で仕留めたと思ったが流石は懸賞金が高いだけはある。一筋縄ではいかない」

聞こえてきた声とあとその体つきからしてどうやら女らしい。凜歌の鮮やかな金髪とはまた違う、少々栗色に近い金髪で髪は後ろ側で無造作に紐で束ねられている。大きなゴーグルを装着しており暗闇のせいもあつてか、顔はよく見えない。

服装は軍服のようなミリタリー調のもので、その肩には担ぐように持たれた大きな銃があった。全長はおよそ2m近くある。おそらくその銃で旅人を狙い続けていたのだろう。

「……まさか狙撃者が自分から姿を現すとはな」

旅人は低い声で独り言のように言い放った。その手は静かに小刀を

構え、完全な臨戦体制である。

「ああ、俺は元々狙撃が専門じゃないんでねえ。ちまたじゃあ『銃撃屋』って言われているんだ」

飄々とした様子の中、銃撃屋と自らを名乗った彼女の立ち振る舞いにおいては一切の油断も隙も見受ける事が出来ない。

旅人は長年の経験と雰囲気だけで相手の実力を計る事が出来る。そして彼女は相当な実力者である事が分かった。

相手は旅人でもそうは戦った事の無いほどの強者である。

今回はいかに強力な身体強化魔術をかけていようと、油断したら間違いない死ぬ事になると思いつつ、旅人は銃撃屋へと向かって駆け出した。

### 30ページ目

### 死神と死にぞこないと(後書き)

次回は少なくとも今回よりは更新遅れないように努力したいと思います  
ます……

### 31ページ目

### 複数の接触と微かな歪み（前書き）

弁明の仕様がございません。旅人日誌の更新が大変に遅れてしまい、誠に申し訳ありません。誠意をもって謝罪します。



もう時間はかなり遅く、日が変わりかけている頃。

自動ドアが開き、閉店間際のスーパ―から二人組の男女が出てきた。その二人は異様な格好をしているが誰も気に留めるような様子も無いし、そもそも付近に人自体が居なかった。

そのうちの一人、赤い髪をした女が歩きながら口を開く。

「もうこんな時間かあ。随分と遅くなっちゃったな」

「確かニそうだな。早く帰るゾ。瞬はともかく、幽霊の方があの瞬と二人きりなの八少々不安だ」

主に瞬の様子にビクビク震えてるんじゃないかという事で。

「杞憂だと思うよ？ あの二人って意外な事にそこそこ仲良くしているみたいだしね」

「……嘘だ口？」

その言葉に、顔の左半分に黒い仮面をした男は疑惑の眼差しを向ける。

不老不死といった永遠を何よりも忌み嫌い瞬間の美しさを信仰する瞬と、本人の意思はともかくとして死んでも幽霊と化してまで現世に留まり続ける実菜とが仲良くしてるとは思えない。特に瞬の方が問題である。

「本当だよ。実菜ちゃんの方が何度無下にされたり攻撃されたりしても、その度に謝りつつくじけずに歩み寄ろうとしてくれていてね。」

最近になってようやく普通の会話が出来るようになってるみたいだよ」

「それハ……凄いナ」

黒仮面は驚嘆の表情を浮かべる。

瞬とわずか数日で普通に話せるようになった奴は黒仮面の知る中では誰一人として居ない。まして幽霊等といった者ならなおさらだ。ちなみに『普通の会話』の定義とはかなり曖昧だが、ここでは『戦闘に関わりの無く、策略などでも無いただのとりとめの無い会話』として認識している。

「最近だと瞬も実菜に関しては幽霊だという事を忘れていてるみたいだしね。これも実菜の尽力のおかげだと思っよ。まあボクも色々アドバイスやらはしたけどね」

「……そうカ」

そもそも瞬と実菜はともに夢音の家に居候状態で、そのおかげで話す機会も多く、夢音も二人の様子をよく見ているのだろう。ちなみに黒仮面はかなりの頻度で夢音の家に行っているが、夢音が寝る前には立ち去るし、やはり夢音ほど観察は出来ない。

「……所デ夢音」

ふと、一呼吸おいて黒仮面が夢音に話しかける。

「何だい？」

「後ろノ奴にハ氣づイているカ？」

黒い仮面をした男は、音量のみを不自然では無い程度に変え先程までと変わらぬ様子でそう言い放った。

「うん。尾行されてる事に気づいたのは今さっきだけどね」

二人は声のトーンを僅かに落として、両者にだけ聞こえる程度の音量で話す。

当然、これは尾行者に気づかれないための措置だ。

……まあ魔法やら能力やらが使われていたら会話も筒抜けで、まるで意味の無い行為なのだが、ぶっちゃけ二人ともそこまで隠す気はない。

バレたらバレたで、向こうとしては大体が逃げ出すか攻撃するかかの二択だろう。逃げ出したらほっとけば良いし、攻撃してきてもすぐに対処出来るからだ。

「俺たちヲ見張っテいる奴の目星はついてルか？」

「いや、まるでついてないよ。尾行されるような心当たりは無いし」

「それハお前ナラいくらでもありソウな気がスルが……」

軽口を叩くかのように二人の会話は続く。

ちなみに二人にとって、尾行者を撒くという選択肢は無い。

理由？ それは実に単純。二人が尾行を撒く時の超スピードのせいで、つい先程にスパーで買ってきた卵等といった品々が悲惨な事態になる事を避けるためである。

「ははっ。いくらボクでも知らない間に知らない敵を作ってるなん

て……………無い事もないか」

「自覚していたのかっ!？」

それ二、向こうにいるのが敵と断定された訳ではないが……………どうす  
ル?」

「どうしようかなあ。卵を割るのは勘弁して欲しいし、向こうが勝  
手に立ち去ってくれるのが一番なんだけど」

夢音が言い終わると同時、黒仮面は軽く口から息を漏らした。

「まア、手遅れだな」

「うん。そうだね。こちらの様子に気がついたらしい」

二人はゆっくりとした動作で後ろを振り返る。

すると、そこには先程までは影も形も見えなかった一人の人間がい  
た。

黒髪黒瞳、容姿平凡、服装平凡。いかにも日本人といった顔立ちで、  
強いていうなら黒いフレームの四角型の眼鏡をかけている程度の他  
に取り立てて特徴が無い、17か18歳程度の外見の男だ。…………ま  
あもつとも、見た目の年齢など彼らのような異常の力を持つ者にと  
っては当てにはならないが。

「ああもつ、こんなに早くバレるなんて……………予想以上だ」

その男を空を仰ぐようにして手を額に当てる。

「で、キミの目的はなんだい? 何故ボクたちを監視した」

「そりゃあ、貴女達みたいな相当な実力者が二人一緒になって近くをうろついていたら気にもなるでしょ」

夢音が男に向けて尋ねた所、隠す様子もなく間髪も入れずに即答した。

「……嘘だな。もしくは八、それだけでは無いだろう」

「その根拠は？」

しかし夢音の隣に居る黒い仮面をした男は、目を鋭くしそれを否定。対して男は一切の動揺も見せずに言葉を返す。

「根拠なラ目の前二有ル」

黒き仮面をした彼は、怒気も殺気も放たず、ほんの僅かばかりの敵意を眼光に込める。

「尾行すルだけなら、人の形をすル必要など無いかうだ」

「そついつ事らしいよ。『式神』君」

そして、夢音が軽く追従した。

深夜の住宅街は、上空から見ても何も面白くは無い。何も動かない上に暗闇でろくすっぽ見えないからである。

しかし彼女は繁華街であろうと住宅街であろうとお構いなしに、上空から少々懐かしむように、そして確認するような目で見ている。とあるマンションの屋上よりも、ちよつと上の場所。そこに彼女は浮かんでいた。

一切の音も立てずに、静かに滞空している姿は飛んでいるよりも浮かんでいると表現した方がまだ正しいだろう。

そして彼女は全体的に白く、透き通っていた。それは比喻表現などではなく、実際に身体が服ごとわずかに透き通っている。

研究服という名の白衣に身を包み、星型の髪飾りを付けた彼女の名前は新橋 実菜<sup>みな</sup>。

現在、このマンションの夢音の部屋に実質居候状態で住んでいる浮遊霊だ。

「変わってない……ですね」

ふと、彼女の口からそんな言葉が漏れた。

それから彼女はゆっくりと振り返り、先程は背を向けていた方向の景色をじつと見ていた。

彼女は今一体何をしているのかといえば、生前の記憶を呼び起こし昔と今とを見比べているのだ。……まあ、昔と言っても一年程度の事ではあるが。

ちなみに、彼女が幽霊と化してから部屋から外に出てくるのはこれが初めての事である。

それどころではなかったのだ。何故なら彼女は少し前までは、ただの『化物』となっていたのだから。

あの時の記憶と意識は朧げではあるが、ただひたすら『苦しかった』という事は自覚出来た。彼女は死んだ後、永遠とも思えるような苦

痛を受け続けながら、亜空間に縛り付けられていたのだ。

あの場から解放してくれた夢音に、彼女は心の底から感謝をしている。それどころか、実は性別の問題を別とすれば完全に惚れていると言っても良いぐらいのレベルで服従していたりする。

それだけではなく黒き仮面をした男にも、当の本人の意思や思惑は別として助けてくれようとしてくれた瞬間に関しても、彼女は非常に感謝をしていた。

だからその恩は人生全てを払ってでも返したいと実菜は思っているのだ。

……幽霊の時点で人生はすでに終わっているのだが、彼女はそれに気づいていないし、誰にも話してないから指摘してくれる人物もいない。

それはともかくとして、夜の街景色を見物していてふと彼女は思う。

「あれ……？ 私どうやって死んだんだっけ？」

よく考えてみると、彼女は生前の記憶をやけにはつきりと覚えているものの、死ぬ時の記憶が一切無いのだ。気づいたらあの亜空間で地獄の苦痛を受けており、その時は頭もボーっとして考える事もできなかつた。

そもそも、何故あの亜空間に縛り付けられていたのかも不思議である。

「未練とか私あつたかな……？」

幽霊になる理由としてまず最初に挙げられるのが、現世への未練である。

しかし細々とした未練はたくさんあるものの、幽霊になるほどの強烈な未練は思い当たらない。強いて言うなら、ある発明を完成させ

たかったという事ぐらいであろうか、だがぶつちやけそれもそれほど強い執着がある訳でもない。

やはり死んだ時の事がキーポイントになるのだろうか。と実菜は考える。

そういえば、実菜の同居人であり、最大級の恩人であり、実菜が仲良くしたいなと努力している一人の女、瞬の事について思い浮かぶ瞬は最初、こちらを完全に嫌って拒絶しているような態度を取っていたのだ。そして、実菜の方はといえば純粹にそんな関係が嫌だったのだ。

だから瞬と少しでも距離を近づけるように頑張った。

そして、なんとか普通に話しを出来るようになるまでこぎつけたのだ。

話してみると、だんだん瞬の事について理解も出来るようになってきた。彼女は、最初おかしな人だと思っていたのだが、それは違った。彼女はちよつと特殊な美学を持つだけで実は案外、普通に近い感性を持っていたのだ。

ただ、彼女は精神の歯車が外れているだけなのだ。決して元から異常になるように精神の歯車が組み合わされていた訳ではないし、また歯車自体が壊れている訳でもない。

なんせ話してみれば、ちゃんと会話は通じているのだ。

無愛想で無頓着で、普通の人よりも強い信念を持っているだけの人間。それが彼女の瞬に対する印象だ

そんな瞬の信念とも言える美学、それは『全ての物はいつか必ず滅びなければならない』だ。

だから実菜は早く成仏したいと思う、それがきつと瞬に対する一番の恩返しなのであるから。

「ん……？」

それはそうとして街を一通り見た所で、部屋のバトルもそろそろ収



まってるだろうと判断した実菜は視界の端にかすな違和感を覚えた。彼女はそちらの方を向く。

すると、そこは明らかに『異常』であった。

ありえない高速で一人の男がこちらの方へ向かって近づいてきたのだ。

「……………」

男は一言も発しないで近づいてくる。先程まではかなり遠くにいたのだが、すでに目前まで迫ってきていた。

男の動きは早過ぎて、実菜にはとても捕らえきれない。

確認出来たのといえど青系統の色彩のスーツを着て、腕には何やら刃らしきものを取り付けてある事くらいだ。

そしてその男は、紛れもなく実菜の方へ一直線に、腕に取り付けてある刃を構えて空を飛ぶかのように辺りの屋根を蹴って跳んでくる。

「はわわわわっ!?!」

それを頭の中で認識した時、実菜は咄嗟に腕でガードするような体制を取る。しかし、男の動きはそれよりはるかに早過ぎた。

気づいた時には、すでに男は実菜へと軽く目配せした後、わきを通り抜けて行った。

「はわっ?」

数秒後、実菜はその事実にようやく気づいた。その実菜の頭はクエスチオンで埋めつくされている。

実菜は狙われるような事など身に覚えの無いし、なんでいかにもこちらを攻撃するような体制だったにも関わらず、脇を通り過ぎていっただけなのか。そもそもあの男は何者なのか、疑問が尽きない。

「危ない所じゃったな。反応がもう少し早ければ、斬られていたんじゃないぞ?」

「はわっ!?!」

すると今度は実菜の隣に一人の女の子が居た。いつの間にか現れた実菜と同じように空中に浮かんでいる女の子に実菜は驚愕し、高速で後ずさりする。

「そんなに警戒されるとは心外じゃな」

「はわわ……し、信用できないです……そもそも、あ、貴女は誰なんですか?」

妙な口調の女の子に対してびくびくとしつつ実菜は言葉を発する。

「まあそれよりも、あちらの方を見た方が良いと思うんじゃないが」

だが突然現れた女の子は華麗にスルーし、ある一方向へ振り向く。

「はわ……?」

それにつられて、ついつい実菜も同じ方を振り向いてみる。

実菜が見たのは先程見た街景色の二画。そこは何の変哲も無い、先程見たものと全く同じように見える。

しかし、そこで実菜は何か気づく。なにやら微妙にその街の二画『歪んでいる』ように見えるのだ。それはごくごく些細な、何気なく見てるなら決して気づかないほどの小さな歪み。しかし、彼女はそこから目を離せなかった。

「ほほう。何か感づいたのか」

隣から、女の子の声が聞こえてくる。

「アレが、先程の原因の一つじゃ」

その言葉は、やけにはっきりと聞こえた。

### 31ページ目

### 複数の接触と微かな歪み（後書き）

次話もかなり遅れてしまっただろうとは思いますが、どうか温かい目で見守って下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6005i/>

---

旅人と高校生の日常記録日誌！？

2011年10月5日16時03分発行